

淡路市

山田地区遺跡 I

— 経営体育成基盤整備事業(山田地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I —



平成21(2009)年3月

兵庫県教育委員会
淡路市教育委員会

淡路市

山田地区遺跡Ⅰ

—経営体育成基盤整備事業(山田地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—

平成21(2009)年3月

兵庫県教育委員会
淡路市教育委員会



山田地区（圃場整備前俯瞰）

巻首図版2



山田地区遠景（圃場整備後：南東上空から）



山田地区近景（圃場整備後：北上空から）



山田地区遠景（圃場整備後：南上空から）



山田地区近景（圃場整備後：南から）

卷首図版4



大歳遺跡出土中世土器

例　　言

1. 本書は、淡路市山田に所在する山田地区遺跡（白生遺跡・筒井遺跡・宇和田遺跡・大蔵遺跡・五反田遺跡・七反田遺跡・狭間遺跡）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は経営体育成基盤整備事業（山田地区）に先立つもので、淡路市からの依頼を受け、兵庫県教育委員会と淡路市教育委員会が平成17年度に本発掘調査を実施した。発掘調査は、淡路市教育委員会分を前川建設株式会社に委託し、兵庫県教育委員会分を株式会社 森長組が請け負い、実施した。
3. 発掘調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（当時：現兵庫県立考古博物館）山田清朝・鐵英記、淡路市教育委員会大石雅一が担当した。
4. 調査後の空中写真の撮影および図化は、兵庫県教育委員会が株式会社 エイトコンサルタントに、淡路市教育委員会が株式会社 イビソクに委託して行った。他の遺構の写真撮影・実測は調査員が実施した。
5. 整理作業は、兵庫県教育委員会分は平成19年度から兵庫県立考古博物館にて、淡路市教育委員会分は平成19年度から淡路市埋蔵文化財事務所にて、実施した。
6. 遺物写真の撮影は、兵庫県教育委員会が谷口フォト株式会社に委託して行った。淡路市教育委員会分は、淡路市教育委員会伊藤宏幸が撮影した。
7. 調査は、三角点をもとに三級基準点を設置しておこなった。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に位置する。
8. 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
9. 本書で使用した遺構番号は、遺跡ごとに呼称した。また、各遺構は以下のように呼称した。
掘立柱建物跡→SB、柱穴→P、土坑→SK、溝→SD、欄→SA
10. 第2図は、国土地理院発行1/50000地形図『洲本』『明石』『須磨』を縮小使用した。第4図は、国土地理院発行1/50000地形図『洲本』を使用した。第5図は、平成5年作成（平成14年改訂）一宮町発行1/2500地形図を使用した。第7図は、国土地理院発行1/25000地形図『郡家』を使用した。
11. 本書に用いた遺物番号は、遺跡ごとにつけ、それぞれ本文・挿図・図版ともに統一している。同一遺跡内においては、県教育委員会分→市教育委員会分と連続して番号を付けている。
12. 本書の編集は岡崎輝子の補助を得て山田が行い、山田・鐵・伊藤宏幸が執筆した。執筆分担は本文目次に示してある。
13. 本報告にかかわる写真・遺構図等は兵庫県立考古博物館に、遺物は淡路市教育委員会に、保管している。
14. 最後に、発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいたいた。ここに感謝の意を表するものである。
浦上雅史・定松佳重・平本雅穂・池本道治・岡崎正雄・山本 誠・岡田章一・中川 渉

目 次

第1章 山田地区遺跡群	
第1節 地理的環境(山田) 1
第2節 歴史的環境(山田) 6
第2章 調査の経緯	
第1節 調査の起因10
第2節 確認調査12
第3節 本発掘調査14
第4節 整理作業16
第3章 調査の成果	
第1節 白生遺跡	
1. 遺跡の概要(山田) 17
2. 県教委(E地区)の調査(山田・鐵) 17
3. 市教委(A・B・C地区)の調査(伊藤) 28
4. 市教委(D地区)の調査(伊藤) 30
第2節 筒井遺跡	
1. 遺跡の概要(山田) 32
2. 県教委(K地区)の調査(山田・鐵) 33
3. 市教委(A~G地区)の調査(伊藤) 54
4. 市教委(H・I・J地区)の調査(伊藤) 58
第3節 宇和田遺跡	
1. 遺跡の概要(山田) 59
2. 県教委の調査(山田・鐵) 59
3. 市教委(A・B地区)の調査(伊藤) 76
4. 市教委(C地区)の調査(伊藤) 79
第4節 大歳遺跡	
1. 遺跡の概要(山田) 80
2. 県教委の調査(山田・鐵) 81
3. 市教委(A地区)の調査(伊藤) 100
4. 市教委(B地区)の調査(伊藤) 103
第5節 五反田遺跡	
1. 遺跡の概要(山田) 104
2. 県教委の調査(山田・鐵) 105
3. 市教委(A地区)の調査(伊藤) 124
4. 市教委(B地区)の調査(伊藤) 125
第6節 七反田遺跡	
1. 遺跡の概要(伊藤) 126
2. 市教委(A・C地区)の調査(伊藤) 126
3. 市教委(B地区)の調査(伊藤) 127
第7節 狹間遺跡	
1. 遺跡の概要(伊藤) 128
2. 市教委(A地区)の調査(伊藤) 128
3. 市教委(B・C地区)の調査(伊藤) 131
第4章 まとめ	
第1節 遺物(山田) 132
第2節 遺構(山田) 145
第3節 総括(山田) 146

表 目 次

第1表 主要周辺遺跡	6
第2表 調査概要	10
白生遺跡	
第3表 出土土器観察表(1)	26・27
第4表 出土土器観察表(2)	29
第5表 出土土器観察表(3)	31
筒井遺跡	
第6表 出土土器観察表(1)	50・51
第7表 出土土器観察表(2)	52・53
第8表 出土土器観察表(3)	57
宇和田遺跡	
第9表 出土土器観察表(1)	72・73
第10表 出土土器観察表(2)	74・75
第11表 出土土器観察表(3)	78
大歳遺跡	
第12表 出土土器観察表(4)	79
五反田遺跡	
第13表 出土土器観察表(1)	96・97
第14表 出土土器観察表(2)	98・99
第15表 出土土器観察表(3)	102
第16表 出土土器観察表(4)	103
七反田遺跡	
第17表 出土土器観察表(1)	122・123
第18表 出土土器観察表(2)	125
狹間遺跡	
第19表 出土土器観察表	127
第20表 出土土器観察表(1)	130
第21表 出土土器観察表(2)	131

挿 図 目 次

第1図 淡路市の位置	1
第2図 旧一宮町の位置	1
第3図 遺跡周辺の地形環境(南上空から)	2
第4図 山田地区遺跡周辺の地質	3
第5図 山田地区遺跡	4
第6図 山田地区遺跡の立地	5
第7図 主要周辺遺跡	7
第8図 正保の国絵図から復元した中街道	9
第9図 工事計画図	11
第10図 確認調査	12
第11図 確認調査位置図	13
第12図 調査位置図	15
白生遺跡	
第13図 調査位置図	17
第14図 E地区基本土層図	18
第15図 調査風景	18
第16図 E地区平面図	19
第17図 SB01	20
第18図 SB02	20
第19図 SK01～SK03 (E地区)	21
第20図 SD01	22
第21図 E地区出土土器	23
第22図 E地区出土石器	24
第23図 B地区基本土層図	28
第24図 B地区平面図	28
第25図 SD01	29
第26図 SK01	29
第27図 A・B地区出土遺物	29
第28図 D地区基本土層図	30
第29図 D地区平面図	30
第30図 柱穴列	31
第31図 SK02	31
筒井遺跡	
第32図 調査位置図	32
第33図 K地区基本土層図	33
第34図 K地区平面図	33

第35図	SB01	34	第72図	SK01	64
第36図	SB02	35	第73図	土坑断面	65
第37図	SB03	36	第74図	SD02出土石器	68
第38図	SB04	37	第75図	SD02	68
第39図	E地区 南建物群	37	第76図	D地区出土土器(1)	70
第40図	SB05	38	第77図	D地区出土土器(2)	71
第41図	SB06	39	第78図	D地区出土土器(3)	72
第42図	SB07	40	第79図	D地区出土銅錢	72
第43図	SB08	41	第80図	D地区出土金属製品	73
第44図	SB09	42	第81図	A・B地区平面図 及びB地区西壁土層図	76
第45図	柱穴の検出	42	第82図	A地区平面図及びSD01土層図	77
第46図	柱穴断面の調査	44	第83図	SD03	77
第47図	SK01	44	第84図	SD02	77
第48図	K地区出土土器(1)	48	第85図	B地区下層造構平面図	78
第49図	K地区出土土器(2)	49	第86図	B地区出土土器	78
第50図	K地区出土銅錢	49	第87図	C地区平面図	79
第51図	K地区出土金属製品	49	第88図	C地区出土土器	79
第52図	A～J地区地区割図	54	大歳遺跡			
第53図	A地区平面図	54	第89図	調査位置図	80
第54図	SB01	55	第90図	作業風景	81
第55図	D地区基本土層・平面図	56	第91図	C地区基本土層図	81
第56図	F地区基本土層・平面図	56	第92図	C地区平面図	82
第57図	B地区出土石器	57	第93図	SB01	83
第58図	A地区出土金属製品	57	第94図	SB02	84
第59図	C・D・F地区出土遺物	57	第95図	SB03	85
第60図	J地区平面図	58	第96図	SB04	86
第61図	H地区出土石器	58	第97図	SA01	88
第62図	H・I地区平面図	58	第98図	SK01	88
宇和田遺跡				第99図	SK02	89
第63図	調査位置図	59	第100図	SK04	90
第64図	D地区基本土層図(1)	60	第101図	SD01	91
第65図	SK01内土器検出作業	60	第102図	SD03	91
第66図	D地区基本土層図(2)	61	第103図	M1	92
第67図	SB01	61	第104図	C地区出土土器	93
第68図	D地区平面図	62	第105図	D地区造構検出作業	94
第69図	SB02近景	62	第106図	D地区基本土層図	94
第70図	SB02	63	第107図	D地区平面図	95
第71図	SB03	63				

第108図 SB05	95	第138図 SD05	119
第109図 D地区出土土器	97	第139図 C地区出土金属製品	120
第110図 D地区出土石器	97	第140図 山田小学校体験発掘	120
第111図 A地区平面図	100	第141図 尾崎小学校体験発掘	120
第112図 SK03	101	第142図 C地区出土土器	121
第113図 A地区出土土器	101	第143図 調査風景	124
第114図 A地区出土石器	102	第144図 A地区基本土層図	124
第115図 B地区出土土器	103	第145図 B地区基本土層図	125
第116図 B地区平面図	103	第146図 B地区出土土器	125
五反田遺跡			
第117図 調査位置図	104	第147図 調査位置図	126
第118図 C地区調査風景	105	第148図 地区割図	127
第119図 C地区基本土層図	105	第149図 B地区平面図	127
第120図 C地区平面図	106	第150図 B地区出土土器	127
第121図 C地区北西建物群	107	第151図 調査位置図	128
第122図 SB01	108	第152図 A地区基本土層図および平面図	129
第123図 SB02	109	第153図 A地区出土土器	130
第124図 SB03	110	第154図 出土銅鏡	130
第125図 SB04	111	第155図 出土石器	130
第126図 南東建物群	111	第156図 B・C地区平面図	131
第127図 SB05	112	第157図 B・C地区出土土器	131
第128図 SB06	113	第158図 土師器皿・杯の法量分布	133
第129図 SB07	114	第159図 土師器皿の分類	133
第130図 SB08	115	第160図 土師器杯の分類	135
第131図 SB08出土石器	115	第161図 須恵器捏鉢の分類	135
第132図 P02内土器の検出作業	116	第162図 瓦器碗の分類	137
第133図 柱穴断面の観察	117	第163図 中世主要一括資料(1)	140・141
第134図 SD01	117	第164図 中世主要一括資料(2)	142・143
第135図 SD01出土石器	118	第165図 山田地区遺跡の動向	149
第136図 SD03の検出作業	118		
第137図 SD03	119		

卷首図版目次

卷首図版 1	卷首図版 3
山田地区（圃場整備前俯瞰）	山田地区遠景（圃場整備後：南上空から）
卷首図版 2	山田地区近景（圃場整備後：南から）
山田地区遠景（圃場整備後：南上空から）	卷首図版 4
山田地区近景（圃場整備後：北上空から）	大歳遺跡出土中世土器

図版目次

白生遺跡

写真図版 1 E地区遺構	D地区遺構 北西から
近景 南上空から・近景 北上空から	A地区包含層出土土器 (32)
写真図版 2 E地区遺構	A地区包含層出土石器 (S4)
全景（俯瞰）	B地区包含層出土土器 (30・31・33)
写真図版 3 E地区遺構	D地区包含層出土土器 (34)
全景 南から・全景 北から	製塙土器 (35~39)

写真図版 4 E地区遺構	筒井遺跡
SB01・SB02 北東から	写真図版 9 K地区遺構
SB01・SB02 南西から	全景 西上空から・全景 北西上空から
SB01 P1断面 南から	写真図版10 K地区遺構
SB01 P6断面 南から	全景（俯瞰）・全景 南西から

写真図版 5 E地区遺構	写真図版11 K地区遺構
SB02 P2断面 西から	SB01 P7断面 北西から
SB02 P3 断面北から	SB01 P9断面 北西から
SD01断面 南から	SB02 P6断面 北西から
SK01断面 西から	SB02 P7断面 北東から
SK02断面 北東から	SB03 P2断面 南西から

写真図版 6 E地区遺物	SB03 P3断面 南東から
包含層出土土器	SB05 P6断面 南から
(1・3・4・6・7・9・13・17~22)	SB05 P7断面 北から

写真図版 7 E地区遺物	写真図版12 K地区遺構
SD01出土土器 (24・27)	SB06 P1断面 北西から
包含層出土土器 (25)	SB06 P3断面 北東から
包含層出土石器 (S1~S3)	SB06 P5断面 北東から

写真図版 8 A~D地区遺構・遺物	SB06 P7断面 南東から
B地区遺構 南から	SB07 P2断面 北から

SB07 P11断面 東から	全景 南上空から・全景 北上空から
SB08 P2断面 北西から	写真図版 20 D地区遺構
SB08 P4断面 南東から	全景 (俯瞰)
写真図版 13 K地区遺構	写真図版 21 D地区遺構
P10断面 北から・P11断面 北から	全景 南から・全景 北から
P12土器出土状況 南東から	写真図版 22 D地区遺構
P13土器出土状況 南東から	SB01・SB02 西から
SD04断面 東から	SB01 南から
SD05断面 北西から	SB01 P4土器出土状況
SD08断面 北から	SB01 P5断面 東から
SD09断面 北から	写真図版 23 D地区遺構
写真図版 14 K地区遺物	SB02 南から
P01出土土器 (11) P13出土土器 (14)	SB03 P1断面 西から
P11出土土器 (21) P12出土土器 (22)	SB03 P2断面 西から
SK02出土土器 (28) SD07出土土器 (31)	P01 土器出土状況 東から
包含層出土土器 (34・41)	SK01 土器出土状況 西から
写真図版 15 K地区遺物	写真図版 24 D地区遺物
P13出土土器 (25) 包含層出土土器 (33)	SB01出土土器 (1・3～5)
包含層出土金屬製品 (M1・M3)	SK01出土土器 (10・11)
写真図版 16 K地区遺物	写真図版 25 D地区遺物
包含層出土土器 (42～45)	SK01出土土器 (12)
写真図版 17 A～J地区遺構	SK03出土土器 (14～18)
A地区遺構 SB01 北東から	SK04出土土器 (21)
D地区遺構 南東から	SK06出土土器 (27)
F地区遺構 南西から	写真図版 26 D地区遺物
写真図版 18 A～J地区遺構・遺物	SK05出土土器 (25)
B地区包含層出土石器 (S1)	包含層出土土器 (40～42・44～46)
A地区包含層出土鐵器 (M4)	写真図版 27 D地区遺物
A地区 SD01及び包含層出土銅鏡 (M5)	SK08出土土器 (26)
C地区溝状落ち込み出土土器 (46・48)	包含層出土土器 (32・33・43)
D地区包含層出土土器 (47)	P01出土鐵釘 (M1～M4)
F地区包含層出土土器 (49・50・52)	SK10出土鐵釘 (M5・M6)
C地区包含層出土土器 (51・53)	包含層出土鐵釘 (M7)
H地区包含層出土石器 (S2・S3)	SD02出土石器 (S1)
II地区遺構 東から	写真図版 28 A～C地区遺構・遺物
宇和田遺跡	B地区上層遺構 南東から
写真図版 19 D地区遺構	B地区下層遺構 南東から
	SD03出土土器 (47・48・51)

P06出土土器 (50) · P01出土土器 (51)	SK02断面 南から
B地区包含層出土土器 (49・52)	SK04全景 西から
写真図版 29 A ~ C地区遺構・遺物	SK06全景 西から
C地区全景 西から	D地区 全景 (俯瞰)
C地区柱穴 南西から	D地区 全景 北から
C地区包含層出土土器 (54 ~ 56)	写真図版 37 C地区遺物
	SB01出土土器 (2)
	SB02出土土器 (5・8)
大歳遺跡	SB04出土土器 (12) P07出土土器 (20)
写真図版 30 C地区遺構	SK01出土土器 (23)
C・D地区全景 北上空から	SK02出土土器 (25)
C・D地区全景 北東上空から	包含層出土土器 (27・31・32)
写真図版 31 C地区遺構	写真図版 38 C地区遺物
C地区全景 (俯瞰)	SK01出土土器 (22)
写真図版 32 C地区遺構	写真図版 39 C・D地区遺物
全景 東から · SB01全景 北西から	C区包含層出土土器 (29)
写真図版 33 C地区遺構	D区包含層出土土器 (37 ~ 39)
SB01 北西から	D区包含層出土石器 (S1・S2)
SB01 P1断面 南から	写真図版 40 A・B地区遺構・遺物
SB01 P2断面 南から	A地区全景 南東方向から
SB01 P6断面 東から	SK03 南から · SK03遺物出土状況
SB01 P9断面 西から	A地区 P18出土土器 (40)
写真図版 34 C地区遺構	A地区包含層出土土器 (42・49)
SB02 北西から	A地区 SK03出土土器 (45 ~ 48)
SB02 P2縫出土状況 北から	A地区 P16出土土器 (51)
SB02 P4断面 東から	写真図版 41 A・B地区遺構・遺物
SB02 P5縫出土状況 北から	A地区包含層出土土器
SB02 P4縫出土状況 東から	(41・43・44・52 ~ 54)
写真図版 35 C地区遺構	A地区 SK03出土石器 (S3)
SB03 P1断面 南から	A地区 P27出土石器 (S4)
SB03 P4断面 西から	B地区全景 西から
SB03 P5断面 西から	B地区 P02出土土器 (55)
SB03 P4断面 西から	
SB04 P1断面 西から	
SB04 P4断面 西から	五反田遺跡
SB04 P3断面 西から	写真図版 42 C地区遺構
SB04 P4断面 南から	近景 南西上空から · 近景 西上空から
写真図版 36 C・D地区遺構	写真図版 43 C地区遺構
SK01全景 北西から	全景 (俯瞰) 南から

写真図版44 C地区遺構	SD01出土石器 (S2)
北西建物群 南東から	写真図版49 A・B地区遺構・遺物
北西建物群 南から	A地区全景 南から・
SB02 P6断面 西から	A地区近景 南から
SB02 P7断面 西から	B地区包含層出土土器 (34~36)
写真図版45 C地区遺構	B地区全景 北から
南東建物群 西から・SB06全景 西から	
SB06 P4断面 南から	七反田遺跡
SB06 P5断面 西から	写真図版50 A~C地区遺構・遺物
SB07全景 西から	C地区全景 北から
写真図版46 C地区遺構	A地区全景 北から
SB08全景 北から	B地区全景 南から
SB08 P4断面 北から	C地区包含層出土土器 (1~3)
SB08 P5断面 東から	
P02土器出土状況 南東から	狭間遺跡
P05土器出土状況 北西から	写真図版51 A~C地区遺構・遺物
SD03断面 西から	A地区全景 北東から
SD04断面 北から	A地区包含層出土土器 (1~6)
写真図版47 C地区遺物	A地区包含層出土銅鏡 (M1)
SB02出土土器 (1・2)	A地区包含層出土石器 (S1・S2)
SB06出土土器 (5)・P02出土土器 (12)	B地区全景 北西から
SD01出土土器 (22・23)	C地区SD01出土土器 (7)
SD03出土土器 (25・26)	C地区製塙土器 (11)
包含層出土土器 (27~29)	B地区P07出土土器 (8)
写真図版48 C地区遺物	B地区P10出土土器 (9)
SB08出土石器 (S1)	B地区P11出土土器 (10)

第1章 山田地区遺跡

第1節 地理的環境

1. 遺跡の位置

山田地区遺跡は、兵庫県淡路市山田に位置する。淡路市は、淡路島の北部に位置し（第1図）、2005年4月1日に、淡路町・北淡町・東浦町・津名町・一宮町の5町が合併してきた市である。市域の南側は洲本市と接し、北側は明石海峡を挟んで神戸市・明石市と境をなしている。また西側は播磨灘に、東側は大阪湾に面している。市域の面積は184.21km²に及び、人口は4,900人（平成20年7月現在）である。

山田地区遺跡は旧一宮町に所在し、淡路市のかでも南西部に位置する（第2図）。淡路島のなかでは、西海岸のはば中央部にある。西側は播磨灘（瀬戸内海）に面し、北側から南側にかけては丘陵地帯となっている。旧町域の面積は40.24km²である。昭和56年10月における人口は10,534人であった。



第1図 淡路市の位置



第2図 旧一宮町の位置

旧一宮町は律令時代には津名郡に配されており、その都衙が現在の郡家付近にあったと推定されており、津名郡の中心地であった。旧一宮町多賀に淡路国一ノ宮の伊弉諾神宮があり、これが、当時の町名の由来である。現在では、農業・漁業・線香製造業が主要な産業で、特に線香の生産は日本一で、全国の約7割を占めるほどである。そしてこれが、淡路島の特産品の一つとなっている。

さらに、旧一宮町は、交通の要衝としても重要な位置を占めている。旧一宮町郡家が、淡路島の西浦を海沿いに延びるルートと、内陸部にのびるルートの結節点となっている。これは少なくとも江戸時代まで遡るもので、江戸時代にはこの郡家と南あわじ市国衙（旧三原町）を結ぶ街道が、旧一宮町の中央部を南北方向にのびていた（第8図）。この街道が律令時代まで遡るという説もある。また、江戸時代、江井に徳島藩邸が設けられたことから、海上交通に関する重要な位置を占めていた。

そして、この街道沿いに山田地区遺跡がある。郡家からほぼ直線的に約5km内陸部南西方向に入った地点にある。このように、山田地区遺跡の所在する山田地区は、旧一宮町のなかでも南部に位置する。つまり、山田地区遺跡は淡路市の南端部に位置し、南側は洲本市五色町（旧津名郡五色町：平成18年2月に洲本市と合併）と接している。

当初、一宮町は、昭和30年に津名郡尾崎村・郡家町・多賀村・江井町が合併してきた町で、遺跡が所在する山田村は昭和31年と1年遅れで、一宮町に編入されている。当地区は農業を基盤とした地区で、稲作とみかん栽培が盛んである。特に、当地産の米は淡路島内では最も美味といわれている。ただし、平地はわずかであるため、当地は顕著な棚田が形成されていた。

2. 地形的環境

淡路島の地形は、北部・中部・南部と大きく3地区に分けることができる。北部は花崗岩から構成される山地が北東-南西方向にのび、その北西側は活断層があり、その断層崖の前縁には丘陵と段丘が分布している。中部は、花崗岩からなる先山（標高448m）を中心にして丘陵が発達している（第3図）。南部は、中央構造線の北側に沿って和泉層群から構成される諭鶴羽山地が発達している⁽¹⁾。

山田地区遺跡の所在する旧一宮町は、上記の中部に位置する。特に、遺跡周辺は丘陵が顕著に発達した地域で、遺跡周辺は標高250m以下の低丘陵からなる。丘陵のなかでも、やや高い箇所は花崗岩類からなり、それ以外は大阪層群から構成されている⁽²⁾。そして、この丘陵地帯にはいくつかの小河川があり、これら小河川を中心に多くの小谷及び谷底平野が形成されている。ちなみに、当地は瀬戸内気候に

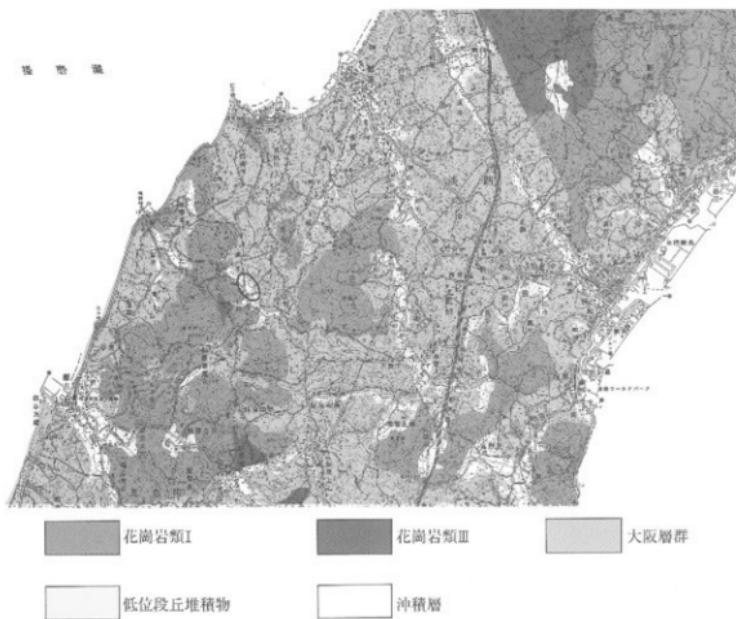
あたため降水量が少なく、これら小谷・谷底平野の多くは枯谷である。このため、旧一宮町内には6000を超える灌漑用ため池が造られている。

旧一宮町内に多数存在する谷底平野の一つが、山田地区遺跡が所在する山田盆地⁽³⁾である。詳細にみると、山田盆地の南側から東側・北側にかけての丘陵は大阪層群からなり、西側から南西側にかけての丘陵は花崗岩類からなる（第4図）。

山田盆地は山田川を中心に、その上流部に形成された盆地である。南東から北西方向に開けた盆地で、その規模は300m×800mを測り、その面



第3図 遺跡周辺の地形環境（南上空から）



第4図 山田地区遺跡周辺の地質

積は約 24 km²である。山田川は、洲本市五色町中邑を源とする二級河川である。山田盆地を北流後盆地北部で西方に変え、大きく蛇行を繰り返し、高山・草香を経て流れて播磨灘（淡路市明神）に注いでいる。河川長は 4000 m である。

山田地区遺跡は、山田川の左岸・右岸に分布している（第5図）。左岸には、北側から七反田遺跡・筒井遺跡・狹間遺跡・大歳遺跡が所在する。右岸には、北側から五反田遺跡・白生遺跡・宇和田遺跡が所在する。

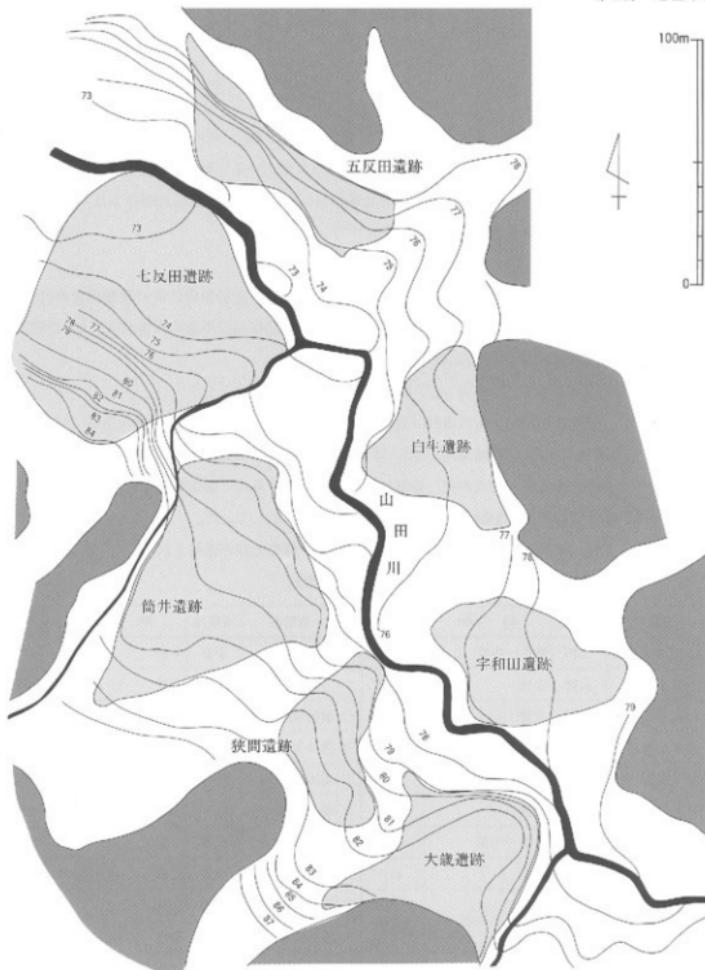
山田地区遺跡内の各遺跡は、基本的に山田川に沿った平坦部から丘陵部への変換部に立地している（第6図）。この変換部は周囲よりはやや高く緩斜面となっている。この緩斜面であるが、大きく 2 タイプに分類できる。

一つは、小扇状地に立地するものである。一口に山田盆地と称しても、盆地を囲む丘陵部には多くの小谷が山田川に向って形成されている。この小谷から噴出した堆積により形成された小扇状地である。筒井遺跡・宇和田遺跡がこれに該当する。筒井遺跡では、山田川により低位段丘化している。

もう一つは、丘陵部の延長、その二次堆積により形成された微高地上に立地するものである。五反田遺跡・白生遺跡・大歳遺跡・狹間遺跡・七反田遺跡が該当する。特に、大歳遺跡の南端部は丘陵斜面にまで及んでいる。また、白生遺跡に関しては、一部山田川によって形成された自然堤防上に立地する可能性も考えられる。一方、大歳遺跡・狹間遺跡・七反田遺跡は、山田川沿いの低地とは明らかな標高差が認められ、一段高い段丘面に立地しているものと考えられる。



第5図 山田地区遺跡 (1 : 5,000)



第6図 山田地区遺跡の立地

〔註〕

- (1)太田陽子・成瀬敏郎・田中眞吾・岡田篤正編『日本の地形6 近畿・中国・四国』東京大学出版会 2004
- (2)高橋 浩・寒川 旭・水野清秀・服部 仁『洲本地域の地質』地質調査所 1992
- (3)「山田盆地」という名称は正式なものではない。本報告では便宜上このように呼称する。

〔参考文献〕

神戸新聞出版センター『兵庫県大百科事典』1983

一宮町『一宮町史』1999

第2節 歴史的環境

1. 周辺の遺跡

山田地区遺跡周辺には、周知された遺跡はわずかである（第7図）。このような状況の中、近年、圃場整備に伴う事前調査で、いくつかの遺跡が明らかとなってきている。以下、これらの成果をもとに、時代ごとにまとめていくことにする。なお、当該地域においては、旧石器時代は周知されていない。そのため、縄文時代以降についてまとめていくことにする。

(1) 縄文時代

堂ノ上券遺跡（4）が周知されているに過ぎない。平成8年度に圃場整備に伴い発掘調査が行われ、サスカイト製楔形石器・石鏃と黒曜石の剥片が出土している。山田地区遺跡の南東約0.5kmと比較的の近いことから、山田地区遺跡との関連において注目される。

(2) 弥生時代

見子遺跡（5）・新堂遺跡（7）・木戸遺跡（12）・土橋遺跡（13）・里遺跡（14）・堀池遺跡（18）・殿田遺跡（21）・俵石遺跡（24）・江井崎遺跡（28）・平見遺跡（29）・神田遺跡（32）が周知されている。

このなかで発掘調査が実施されたのは、新堂遺跡と木戸遺跡である。新堂遺跡では、遺物包含層が検出されている。木戸遺跡では確認調査が行われ、弥生土器が出土している。

この他、見子遺跡・土橋遺跡・堀池遺跡・俵石遺跡では、弥生土器が採集されている。里遺跡・沖田

第1表 主要周辺遺跡

No	遺跡名	所在地	時 代	県遺跡番号	No	遺跡名	所在地	時 代	県遺跡番号
1	山田地区遺跡	山田	弥生～中世	108～114	19	横枕遺跡	草香	中世	79
2	入野城跡	入野	中世	910037	20	沖田遺跡	草香	中世	105
3	地蔵堂遺跡	入野	中世	910042	21	殿田遺跡	草香	弥生・中世	80
4	堂ノ上鼻遺跡	入野	縄文・中世	910003	22	溝ノ下遺跡	草香	中世	106
5	見子遺跡	入野	弥生・中世	119	23	高山遺跡	草香北	中世	910034
6	江口遺跡	入野	中世	116	24	俵石遺跡	高山甲	弥生	910008
7	新堂遺跡	山田甲	弥生・中世	115	25	北浦遺跡	深草	中世	107
8	湯谷遺跡	山田	中世	117	26	深草古墳	深草	古墳	910019
9	山田城跡	山田甲	中世	910038	27	入管池遺跡	江井	奈良	910032
10	明神古墳群	明神	古墳	910015～17	28	江井崎遺跡	江井	弥生	910006
11	宇栄我山古墳	明神	古墳	910018	29	平見遺跡	江井	弥生・中世	910007
12	木戸遺跡	明神	弥生・古墳・中世	910045	30	濱遺跡	江井	中世	81
13	土橋遺跡	明神	弥生・中世	73	31	堂田遺跡	江井	中世	82
14	里遺跡	草香	弥生・古墳・中世	74	32	神田遺跡	江井	弥生・中世	83
15	南坊遺跡	草香	中世	75	33	佃遺跡	江井	中世	84
16	戎ヶ谷遺跡	草香	中世	76	34	熊ノ山遺跡	江井	中世	72
17	宇栄我下遺跡	草香	中世	77	35	向谷遺跡	江井	中世	910033
18	堀池遺跡	草香	弥生・中世	78					

※県遺跡番号中の2桁もしくは3桁の番号は、一宮町分布地図の番号



第7図 主要周辺遺跡

遺跡では、弥生土器とサヌカイト片が採集されている。平見遺跡ではサヌカイト片が採集されている。神田遺跡ではサヌカイト製の石鏃が採集されている。また、江井崎遺跡では、サヌカイト製の石鏃が採集されるとともに、銅鐸出土土地として知られている。一般に「伝淡路国出土銅鐸」と称され、本興寺（兵庫県尼崎市）所蔵銅鐸が、江井崎遺跡出土の銅鐸と考えられている⁽¹⁾。ちなみに、外鉢2式2区流水銅鐸に分類されるものである⁽²⁾。

(3) 古墳時代

明神古墳群（10）・宇栄我山古墳（11）・木戸遺跡・里遺跡・深草古墳（26）が周知されている。明神古墳群については、3基の古墳（明神1号墳～3号墳）からなる。1号墳と2号墳については昭和46年度に発掘調査が行われ、6世紀後半の古墳群であることが明らかとなっている⁽³⁾。1号墳は3基の主体部が検出され、内1基は堅穴式石室である。2号墳の主体部は箱式石棺である。

木戸遺跡では確認調査が行われ、古墳時代の須恵器と土師器が出土している。里遺跡では須恵器が採集されている。

(4) 奈良時代

入管池遺跡（27）が周知されている。須恵器片が採集されている。なお、淡路市の所在する淡路島は、律令時代においては、1島で淡路国となり、淡路市は津名郡に配されていた。そして、津名郡の郡衙が旧一宮町の郡家にあったと推定されている⁽⁴⁾。また、後述するように、淡路国府と津名郡衙をほぼ直線的に結ぶルートが、山田地区遺跡を通過していた可能性が考えられる。

(5) 平安時代

当該期に位置付けられる遺跡は周知されていない。

(6) 鎌倉時代・室町時代

入野城跡（2）・地蔵堂遺跡（3）・江口遺跡（6）・湯谷遺跡（8）・山田城跡（9）・見子遺跡・新堂遺跡・木戸遺跡・土橋遺跡・里遺跡・南坊遺跡（15）・戎ヶ谷遺跡（16）・宇栄我下遺跡（17）・堀池遺跡・横枕遺跡（19）・沖田遺跡（20）・殿田遺跡・溝ノ下遺跡（22）・高山遺跡（23）・北浦遺跡（25）・平見遺跡・濱遺跡（30）・堂田遺跡（31）・神田遺跡・佃遺跡（33）・熊ノ山遺跡（34）・向谷遺跡（35）が周知されている。

このなかで発掘調査が実施されたのは、江口遺跡・新堂遺跡・湯谷遺跡・北浦遺跡である。江口遺跡・新堂遺跡・湯谷遺跡では柱穴と包含層が検出されている。木戸遺跡では土師器が出土している。北浦遺跡では、室町時代（15世紀後半）に位置付けられる中世墓が2基検出されている⁽⁵⁾。1号墓では土師器が、2号墓では備前焼が藏骨器として使用されている。旧一宮町域では唯一の中世墓の調査例として注目される。

この他、入野城跡・土橋遺跡・神田遺跡では、土師器が採集されている。南坊遺跡・堀池遺跡・堂田遺跡では須恵器と土師器が採集されている。戎ヶ谷遺跡と濱遺跡では、土師器と瓦器が採集されている。宇栄我下遺跡・横枕遺跡・沖田遺跡・殿田遺跡・溝ノ下遺跡・平見遺跡・佃遺跡では、土師器・須恵器・瓦器が採集されている。高山遺跡は、古鏡の出土土地として周知されている⁽⁶⁾。

山田城跡では、8面の平坦面が確認されている。熊ノ山遺跡では、五輪塔とともに藏骨器とみられる陶器片が散布している。向谷遺跡では藏骨器等が出土している。

なお、貞応二年（1223）に作成された「淡路国大田文」には、「山田保」の記述が認められ⁽⁷⁾、当地は国衙領となっていた。これによると、当時、田三〇町・畠七町四反六〇歩が開墾されていたようである。

(7) 江戸時代

当該期の遺跡は明らかとはなっていない。しかし、江戸時代においては、阿波の蜂須賀藩の所領となっており、江井には徳島藩邸が設けられていた。

ところで、正保三年(1645)完成の「正保の国絵図」に島内の往還道が記されている。ここに、往還道のひとつとして、郡家濱村(現淡路市郡家)と国ケ村(現南あわじ市国ケ)を結ぶ中街道(中通り)が記されており、この往還道が山田地区遺跡を通過している。具体的には、淡路市郡家から同市柳沢を通り山田に至り、吉田村(旧五色町吉田:現洲本市吉田)に抜けている⁽³⁾(第8図)。このルートは、律令時代における淡路国府と津名郡郡衙をほぼ直線的に結ぶもので、この時代まで遡る可能性を示すものである。



第8図 正保の国絵図から復元した中街道

〔註〕

- (1)濱岡きみ子「第二章 考古学上の遺物・遺跡 3 弥生時代の銅鐸」「一宮町史」一宮町 1999
- (2)直良信夫『本興寺所蔵の銅鐸』『考古学雑誌』第17巻第7号 1927
- (3)阿久津 久『明神古墳群』一宮町教育委員会 1972
- (4)郡家長谷遺跡が調査によって当該期の遺構・遺物が明らかとなり、津名郡郡衙の候補地となっている。(伊藤宏幸「郡家長谷遺跡 - 第4次調査 - 」『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ 平成11年度 埋蔵文化財発掘調査』津名郡町村会 2001)
- (5)足立敬介『北浦遺跡』『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ 平成11年度 埋蔵文化財発掘調査』津名郡町村会 2001
- (6)濱岡きみ子「高山から出土した銭貨」「一宮町史」一宮町 1999
- (7)武田清市『淡路史を見直す 村落の歴史』神戸新聞総合出版センター 2003
- (8)武田清市『近世の淡路往還』『歴史の道調査報告書 第六集 淡路往還(南海道)』兵庫県教育委員会 1996

〔参考〕

- 足立敬介『一宮町遺跡分布図 - 町内遺跡詳細分布調査報告書 - 』一宮町教育委員会 2005
- 神戸新聞出版センター『兵庫県大百科事典』1983

第2章 調査の経緯

第1節 調査の起因

今回の調査は、経営体育成基盤整備事業（は場整備事業）山田地区に伴い実施した発掘調査である。この事業は、淡路市山田地区の農地35.6haを対象として、優良農地の確保・農業生産性の向上・後継者の育成を図ることを目的に実施した事業であり、事業期間は平成16年度～平成21年度の6ヶ年である。

本事業の対象となった地区には、白生遺跡、筒井遺跡、宇和田遺跡、大歳遺跡、五反田遺跡、七反田遺跡、狹間遺跡、新堂遺跡、江口遺跡、湯谷遺跡の10遺跡が埋蔵文化財包蔵地として周知されており、これらの遺跡を山田地区遺跡として包括的にとらえ、事業計画との調整を図った。事業に先立ち実施した確認調査の結果をふまえ、事業主体である兵庫県淡路県民局洲本土地改良事務所との調整を行い、工法変更等により最大限の保存措置を講じた結果、損壊を免れない範囲の10遺跡・11,247 m²について記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった（第9図）。

本事業に伴う発掘調査は、平成17年度～平成18年度の2ヶ年をかけて実施し、全体の調査面積は11,247 m²である。事業実施計画との調整の結果、平成17年度に7,152 m²、平成18年度に4,122 m²の調査の実施が必要となり、平成17年度については、兵庫県教育委員会の調査支援を受け、淡路市から兵庫県教育委員会へ調査の一部を委託する形で共同実施することとした。本書は、平成17年度に実施した調査の報告であり、兵庫県教育委員会および淡路市教育委員会それぞれの調査面積、期間等は以下のとおりである（第2表）。

第2表 調査概要

遺跡名	調査面積 (m ²)			調査期間	
	兵庫県	淡路市	計	兵庫県	淡路市
白 生 遺 跡	482	665	1147	8月1日～9月27日	
筒 井 遺 跡	414	1178	1592	8月29日～9月23日	
宇 和 田 遺 跡	1635	474	2109	8月18日～9月22日	
大 歳 遺 跡	828	352	1180	9月13日～10月25日	
五 反 田 遺 跡	587	109	696	9月13日～10月25日	
七 反 田 遺 跡	—	198	198	—	
狹 間 遺 跡	—	230	230	—	
計	3946	3206	7152		

平成17年7月28日
↓
平成18年1月31日



第9図 工事計画図

第2節 確認調査

確認調査は、平成15年度に第1次確認調査、平成16年度に第2次確認調査として、2ヶ年で実施した（第11図）。調査は、旧津名郡一宮町が調査主体となり、当時埋蔵文化財専門職員を共同設置していた津名郡町村会に調査担当者の派遣を求めて実施した。詳細は以下のとおりである。

第1次確認調査（平成15年度）

調査主体：一宮町教育委員会

調査期間：平成15年10月14日～平成15年12月4日

平成16年3月19日・23日

事務担当：細畠孝夫（一宮町教育委員会 教育課 課長）

大江清喜（ 課長補佐）

平本雅稔（ 社会教育係長）

調査担当：足立敬介（津名郡町村会 埋蔵文化財調査専門職員）

調査面積：768 m² (192箇所)

調査概要：山田川の両岸を中心として、2×2mの調査坑192箇所を設定し、遺構・遺物の状況を確認することを目的とした調査を実施した。その結果、山田川の両岸を中心として、弥生時代から中世に至る時期の遺物包含層や遺構の存在を確認した。

第2次確認調査（平成16年度）

調査主体：一宮町教育委員会

調査期間：平成16年10月7日～平成16年10月29日

事務担当：津田和明（一宮町教育委員会 社会教育課 課長）

大江清喜（ 副課長）

平本雅稔（ 社会教育係長）

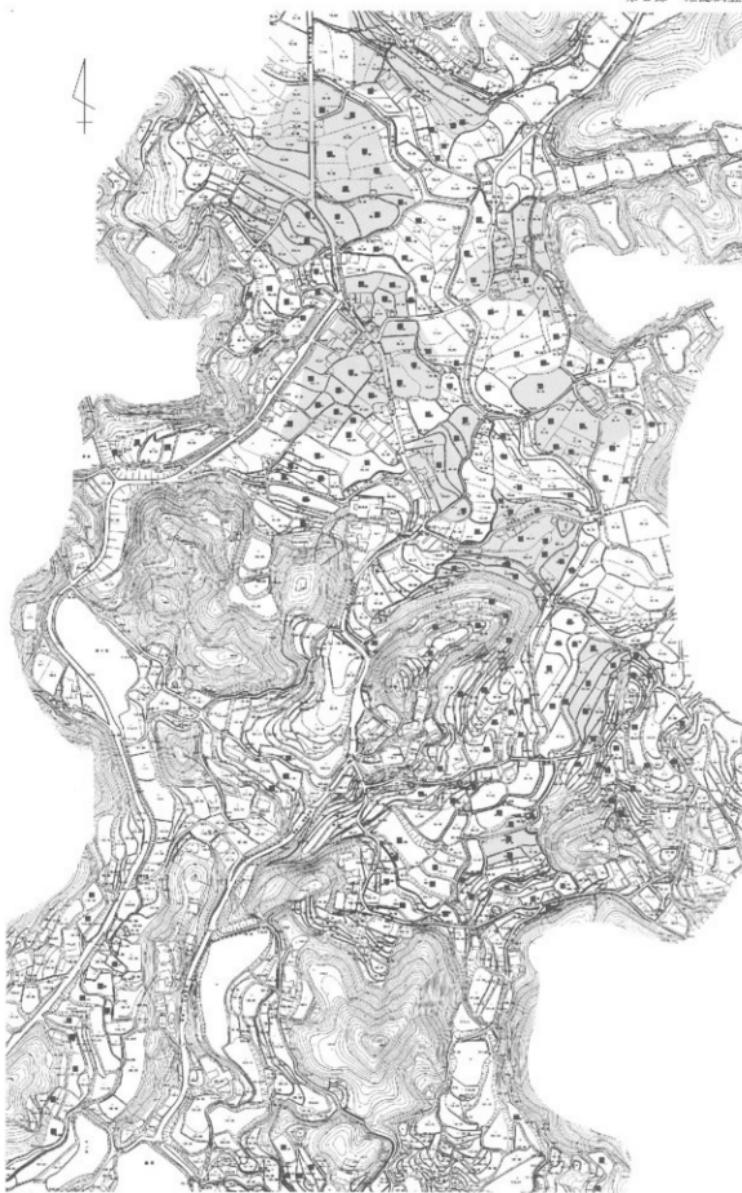
調査担当：足立敬介（津名郡町村会 埋蔵文化財調査専門職員）

調査面積：184 m² (42箇所)

調査概要：第1次調査で実施し得なかった範囲を対象として、2×2mの調査坑42箇所を設定し、実施した。その結果、中世の遺物包含層及び当該期のピットなどを検出した。中世城館跡である山田城に近く、関連する遺構の存在が想定された。



第10図 確認調査



第11図 確認調査位置図

第3節 本発掘調査

1. 調査の分担

発掘調査は、前節での契約に基づき面積によって按分し、兵庫県教育委員会（現兵庫県立考古博物館）と淡路市教育委員会が実施した。兵庫県教育委員会は主として水田造成に関わる箇所を、淡路市教育委員会は水路掘削工事に関わる箇所を、調査対象とした（第12図）。

2. 県教育委員会の調査

本発掘調査は、前節の確認調査の結果を受け、平成17年度に実施した。

圃場整備を前提としたため、耕作土層については圃場整備側が調査前に除去した。このため、床土層以下を調査対象とした。このため、第3章で報告する基本土層に関しては、耕作土を除去した段階を基準としている。

調査は、圃場整備工事と平行して行った。このため、圃場整備工事工程と調整を計り、白生遺跡→宇和田遺跡→筒井遺跡→五反田遺跡→大歳遺跡の順に進めていった。

また、遺構検出後、ヘリコプターにより全景写真的撮影を、白生遺跡・宇和田遺跡・筒井遺跡については平成17年9月14日に、五反田遺跡と大歳遺跡については同年10月19日に、実施した。そして、この撮影をもとに調査成果の図化をおこなった。また、調査と平行して、現場事務所内にて、出土遺物の水洗を行った。

調査体制は、以下の通りである。

調査員 山田清朝・鐵 英記

(兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所：当時)

現場事務員 奥井貴美子

3. 淡路市教育委員会の調査

調査は、圃場整備事業の工程と調整を図りながら、一部重複する期間はあるものの、おおむね筒井遺跡→狹間遺跡→白生遺跡→宇和田遺跡→五反田遺跡→七反田遺跡→大歳遺跡の順に進行した。その内、工事工程の事情により早期の現場引き渡しを求められた筒井遺跡・狹間遺跡については、遺構検出後、ラジコンヘリを用いた航空写真測量を実施し、調査期間の短縮に努めた。それ以外の5遺跡については、調査担当者が写真撮影及び図化作業を行い、記録を作成した。

調査体制は、以下のとおりである。

調査担当：大石雅一（淡路市教育委員会 社会教育課 埋蔵文化財係 主査）

金田匡史（　　タ　　ク　　タ　　主事）

4. 小結

上記の調査と合わせて、白生遺跡・宇和田遺跡・筒井遺跡の調査が一段落した9月18日に、一般市民を対象とした現地説明会を、兵庫県教育委員会と淡路市教育委員会共同で実施した。さらに、9月30日に淡路市立山田小学校6年生（17名）を対象に、10月27日に淡路市立尾崎小学校5・6年生（22名）を対象に、五反田遺跡にて県教委と市教委合同で体験発掘を実施した（第140図・第141図）。



第12図 調査位置図

第4節 整理作業

1. 整理作業の分担

整理作業は、基本的に県教育委員会分は兵庫県立考古博物館で、淡路市教育委員会分は淡路市埋蔵文化財事務所にて実施した。最終的な編集は、兵庫県立考古博物館にて実施した。

2. 兵庫県教育委員会

平成19年度と平成20年度の2箇年にわたり、兵庫県立考古博物館にて実施した。平成19年度は、遺物の接合・実測・復元をおこなった。平成20年度は、造構図の製図・トレース・遺物写真の撮影・編集を行い、刊行にいたった。

各年度の整理体制は、以下の通りである。

平成19年度

調査員 現兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

　　山田清朝・鐵英記

整理担当職員 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部整理保存班 岡田章一

嘱託員 岸野奈津子

平成20年度

調査員 現兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

　　山田清朝・鐵英記

整理担当職員 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部整理保存班 篠宮正

嘱託員 岡崎輝子

3. 淡路市教育委員会

発掘調査終了後、平成19年度と平成20年度の2ヶ年で実施した。遺物の洗浄・注記・接合・実測・復元・造構図の製図・トレース等の作業を整理担当職員の指示のもと遺物整理員が行い、遺物写真の撮影作業は整理担当職員が実施した。

各年度の整理体制は、以下のとおりである。

平成19年度

整理担当：足立敬介（淡路市教育委員会 社会教育課 埋蔵文化財係 主査）

平成20年度

整理担当：伊藤宏幸（淡路市教育委員会 社会教育課 課長補佐）

大石雅一（ 埋蔵文化財係 主査）

第3章 調査の成果

第1節 白生遺跡

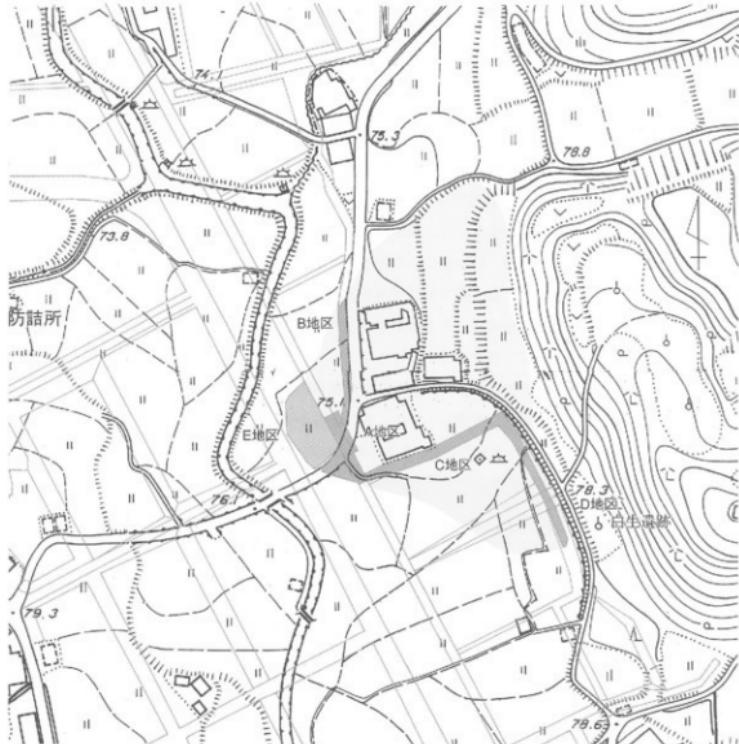
1. 遺跡の概要

(1) 遺跡の位置

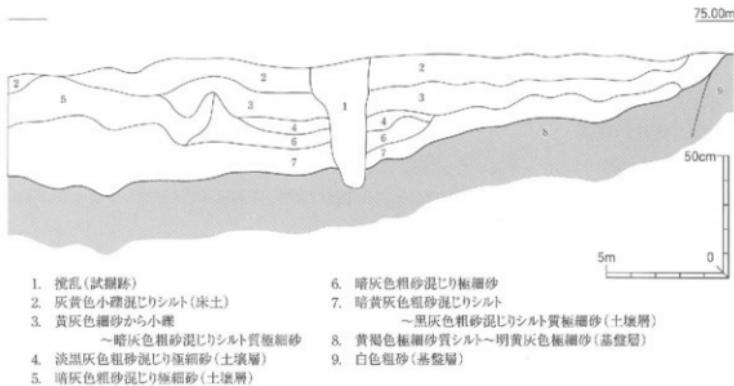
山田盆地東側、山田川右岸に位置する。五反田遺跡の南側、字和田遺跡の南側に位置する（第5図）。

(2) 調査の概要

兵庫県教育委員会は、山田川改修に係る箇所（E地区）を、市教育委員会は水路予定地（B・C・D地区）および「やまだばし」橋脚建設箇所（A地区）を、それぞれ調査対象とした（第13図）。県教育委員会が調査した地区は、山田川に近い白生遺跡のなかでも最西端にあたる箇所で、遺跡の周縁部に近い場所である。調査面積は、482 m²である。市教委分の調査地区は、県教委分の東側にほぼ隣接する地区である。より遺跡の中心に近い箇所である。調査面積は、665 m²である。



第13図 調査位置図



第14図 E地区基本土層図

2. 県教委の調査

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序

上から、床土層・旧耕作土層・土壤層Ⅰ・土壤層Ⅱ・基盤層の層序が認められた（第14図）。なお、本遺跡の調査にあたっては、調査前に現耕作土が除去されていたため、第14図にはこれが表現されていない。また、以下で報告するなかで、粗砂および小礫を表現するものは、当地域の基盤をなす花崗岩が風化したバイラン層（真砂）に由来することを断つておく。

床土層は、第2層が該当する。基本的に当調査区全域で認められた。

旧耕作土層は、3層が該当する。床土層が形成される以前に堆積し、耕作土として利用されていた層である。細かくは、数層に分層することができる。

土壤層Ⅰは、4～6層が該当する。4層と6層は基本的に同一の層で、4層はその土壤化した層である。5層は、4層・6層の後に堆積している。報告のなかで、包含層と呼称した層は、この3層のことである。基本的には、旧耕作土層と同様、ある時期に水田土壤として機能していた可能性が考えられる。



第15図 調査風景

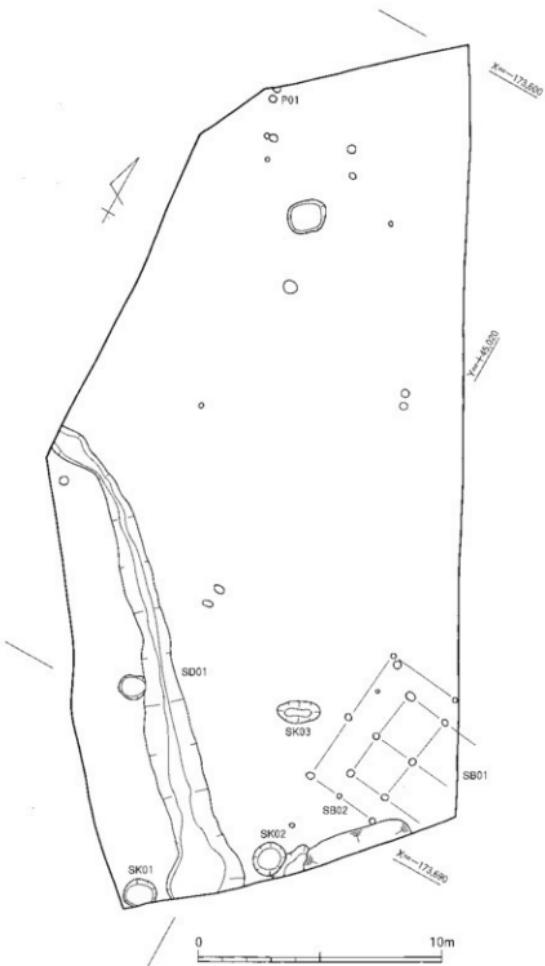
土壤層Ⅱは、7層が該当する。基本的に下層の8層と同一の層で、これが土壤化した層と考えられる。層位的には、当層上面が検出した遺構の時期の地表面と考えられる。当層は、南東隅では削平を受け認められないが、北西方向に向って厚い層となっている。特に北西部においては、湿地性堆積の状況が認められる。

基盤層は、8層と9層が該当する。先述したように、8層は上の7層と同時期の堆積と考えられるが、8層上面で遺構を検出している。基本的に

は9層の上に8層が堆積しているが両者が同一面で検出されている箇所が部分的に認められる。なお、基盤層上面のレベルは一定ではなく、その標高は、南東部が最も高く、西端部中央が最も低くなっている。その標高は、南東部で74.88m、西端部で74.05mである。

遺構の検出

遺構は、8層・9層上面の1面で検出している。



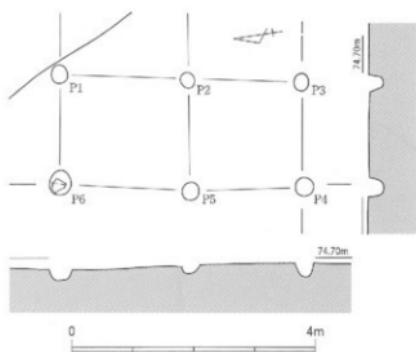
第16図 E地区平面図

第3章 調査の成果

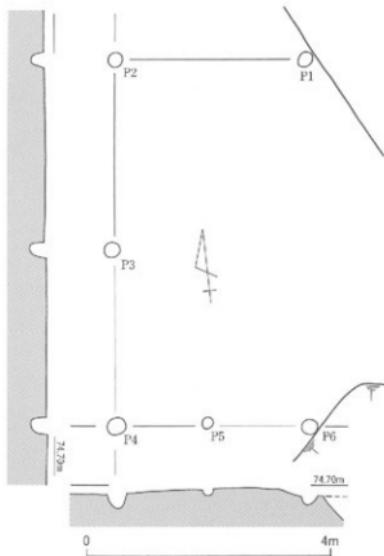
(2) 遺構と遺物

概要(写真図版1～3) 掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝を検出している(第16図)。これらの遺構の多くは、調査区南部に集中して検出されている。

掘立柱建物跡 2棟 (SB01・SB02) 検出している。



第17図 SB01



第18図 SB02

SB01 (写真図版4)

調査区南東部で検出した(第16図)。SB02と平面的に重複するが、調査ではSB02との前後関係を明らかにすることはできなかった。総柱建物で、南北方向で2間、東西方向で1間分を検出している(第17図)。当建物の東側が調査区外まで拡がるため、調査区の東側へ拡がる可能性が高いと考えられる。

建物の規模は、南北方向(P4～P6間)で4.00mを測り、柱穴間の距離はP4～P5間で1.90m・P5～P6間で2.10mである。東西方向の規模は、P3～P4間で1.70m、P1～P6間で1.80mである。なお、P4～P6を基準とした棟軸方向はN8°00' Eを示す。

柱穴掘り方の平面形は円形傾向にある。柱痕は平面・断面とともに確認することはできなかった。柱穴の検出面からの深さは、15cm～25cmである。

P4から瓦器の柄が1点(28)出土している(第21図)。体部を指オサエとナデ調整により整形後、口縁部が回転ナデ調整により仕上げられている。また、底部は回転糸切りにより切り離されている。

これらの土器から、中世I期に位置付けられるものと考えられる。

SB02 (写真図版4・5)

調査区南東部で検出した(第16図)。SB01と平面的に重複するが、先述したようにSB01との前後関係を明らかにすることはできなかった。側柱建物で、南北方向・東西方向ともに2間を検出している(第18図)。

ただし、北側のP1とP2の間では柱穴を検出することはできなかった。SB01同様、当建物の東側が調査区外まで拡がる可能性が考えられる。ただし、隣接するA地区では対応する柱穴は未検出である。

建物の規模は、南北方向(P2-P4間)で6.00mを測り、柱穴間の距離はP2-P3間で3.10m、P3-P4間で2.90mである。東西方向の規模は、P1-P2間で3.10m、P4-P6間で3.15mである。また、P4-P5間・P5-P6間それぞれの柱穴間距離は、1.50m・1.65mである。なお、P2-P4を基準とした棟軸方向はN6°00' Eを示す。

柱穴掘り方の平面形は円形傾向にある。柱痕は平面・断面ともに確認することはできなかった。柱穴の検出面からの深さは、20cm～25cmである。

柱穴内から出土した土器は、SB01同様小片ばかりである。このため、時期の特定は困難であるが、SB01と棟軸方向を同じくすることから、中世Ⅰ期に位置付けられるものと考えられる。

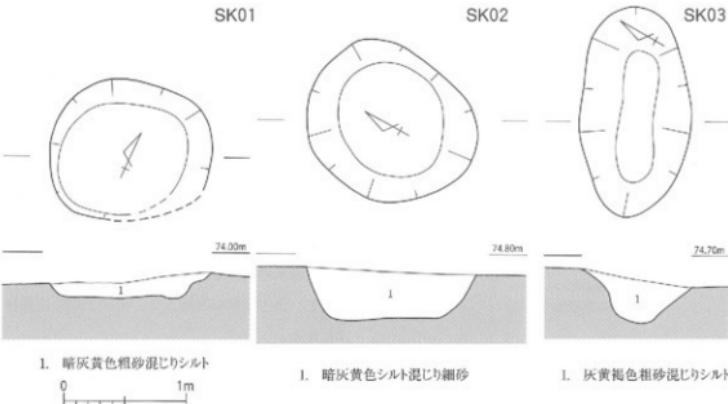
柱穴 15穴検出しているが、これらの柱穴から建物を復元することはできなかった。いずれも、掘り方の平面形は円形をなし、その径は20～30cm大である。P01から土師器の壙が1点(29)出土している(第21図)。体部外面をハケ調整、内面を板ナデ調整により整形後、口縁部外が縱方向(下→上)のナデ調整、内面が弱いヨコナデ調整により仕上げられている。中世Ⅰ期に位置付けられる。

土坑 3基(SK01～SK03) 検出した。

SK01(写真図版5)

調査区南西隅で検出した(第16図)。一部調査区外に拡がっているが、他の遺構との切り合い関係もなく、ほぼ完存する(第19図)。平面形は隅丸方形をなし、その規模は1.31m×1.17mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは23cmを測る。埋土は、暗灰黄色粗砂混じりシルト1層からなり、その層相から判断して人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物はほとんどなく、土器から時期を特定することは困難である。



第19図 SK01～SK03 (E地区)

第3章 調査の成果

SK02 (写真図版5)

調査区南端部中央に位置する（第16図）。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する（第19図）。平面形は円形に近い梢円形をなし、その規模は120m × 140mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは37cmである。埋土は、暗灰黄色シルト混じり細砂1層からなり、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

遺構の時期については、出土遺物がわずかであるため、出土土器から時期を特定することは困難である。埋土の特徴が、他の土坑と類似することから、中世を中心とした時期に位置付けられるものと考えられる。

SK03

調査区南部中央で検出した（第16図）。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する（第19図）。平面形は長梢円形をなし、その規模は長軸方向で1.72m、その直交方向で91cmを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは40cmを測る。埋土は、灰黄褐色粗砂混じりシルト1層からなり、その層相から判断して、自然に埋没後土壤化したものと考えられる。

出土遺物はほとんどなく、出土土器から時期を特定することは困難である。埋土の特徴が、他の土坑と類似することから、中世を中心とした時期に位置付けられるものと考えられる。

溝 SD01 の1条検出した（第16図）。

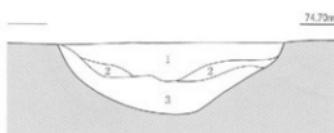
SD01 (写真図版5)

調査区南西部で検出した（第16図）。南東～北西方向には直線的にのび、北西部で西方向に屈曲している。両端とも調査区外にのび、検出した長さは20mである。検出面における幅は、50cm～33.0mを測る。横断面は緩やかなU字形をなし、最深部における検出面からの深さは、60cmから18cmである。底部の標高は、南端で74.31m、北西端で74.05mと、北西方向に傾斜している。傾向として北西部ほど幅が狭く、検出面からの深さが浅くなっている。

埋土は3層からなるが（第20図）、3層はいずれも自然堆積によるものである。

土器は、土師器と須恵器が出土している（第21図）。

土師器は、杯（27）と甕（24）が1点ずつ出土している。27は、底部がヘラ切りにより切り離され、



1. 暗灰黄色粗砂混じりシルト
2. 灰黄褐色粗砂～シルト
3. 黄灰色粗砂混じりシルト

体部から口縁部は回転ナダ調整により仕上げられている。24は、体部外面をハケ調整により仕上げた後、口縁部内外面がヨコナダ調整により仕上げられている。体部内面の調整は観察できない。須恵器は、26の甕1個体が出土している。いわゆる東播系の甕に分類されるものである。

以上、出土土器の特徴から、中世Ⅰ期に位置付けられる。

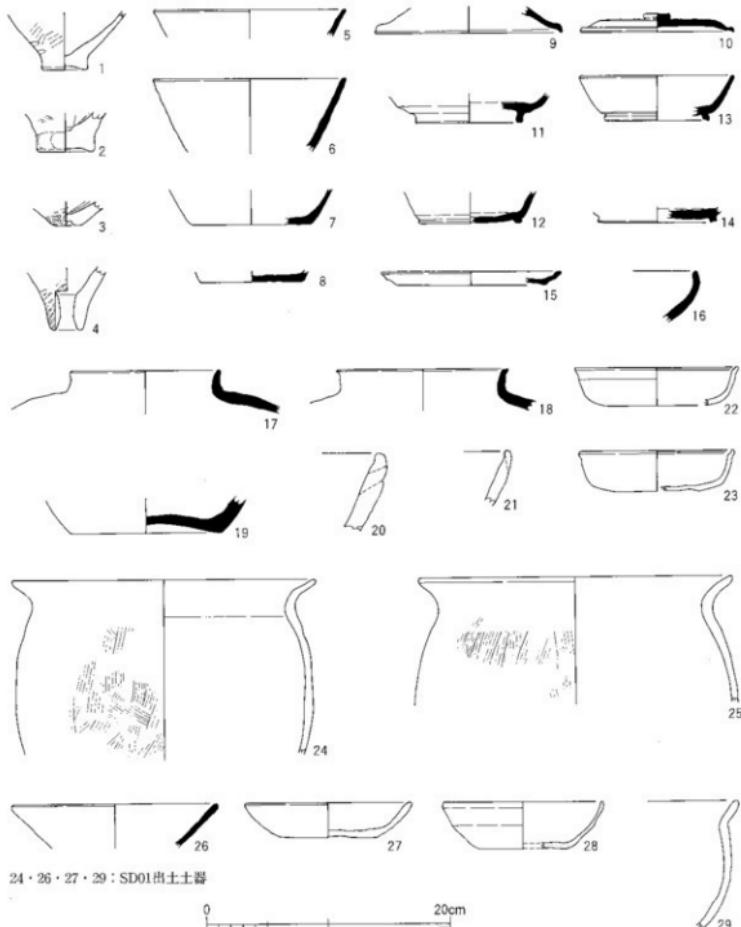


第20図 SD01

(3) その他

当遺跡を検討する上で重要と考えられる遺物が、いわゆる包含層から出土している（第21図）。以下、その概要を時期ごと報告する。出土遺物は、石器と土器からなり、土器は大きく弥生時代と奈良時代からなる。

弥生時代の土器は、4点（1～4）出土している。1～3はV様式系甕に分類されるもので、弥生時代後半に位置付けられるものである。1は弥生土器の小型甕または鉢の底部片である。内側がくぼんだ平底で、そこから体部が立ち上がる。体部外面はタキ、内面はナデを施す。2は弥生土器の底部



24・26・27・29: SD01出土土器

第21図 E地区出土土器

第3章 調査の成果

片である。内側がくぼんだ平底で器壁が厚く、側面を横方向のナデで仕上げている。体部は外面にタタキ、内面に板ナデを施している。3は底部片である。径が極めて小さく、底部充填法により成形されている。外面調整はタタキで、内面には板ナデを施す。弥生時代後期後半のものと思われる。

4は有孔鉢の底部である。狹小な底部の中心に孔を穿っている。外面にはタタキを施す。

奈良時代では、須恵器（5～19）と土師器（20～25）が出土している。

須恵器は、杯A（7・8）・杯B蓋（9・10）・杯B（11～14）・椀（5・6）・皿（15）・鉢（16）・壺（17～19）が出土している。

杯Aはいざれも底部を中心に残存し、ヘラにより切り離されている。7は、体部は斜めに開く。底部外面はヘラ切りを行い、体部及び内面は回転ナデを施している。8は、底部外面はヘラ切りを行い、体部及び内面は回転ナデを施している。いざれも、奈良時代のものと考えられる。

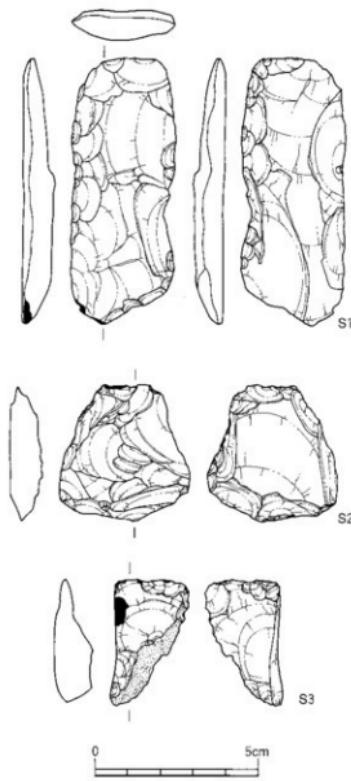
杯B蓋は、2点ともいわゆるB形態をなすものである。9は、口縁部が斜めに開き、口縁部は屈曲

して水平方向に伸びた後、端部を下方に屈曲させる。10は、平たい天井部から口縁部は斜めに開き、端部を下方に屈曲させる。天井部には平たいつまみがつく。いざれも、奈良時代のものと考えられる。

杯Bは、完形に復元できたのは13のみで、他は底部を中心には残存する。11は底部片で、貼り付け高台は高く、直立する。奈良時代から平安時代のものと思われる。12は、底部の中央が少し膨らんでいるが、外に踏ん張る高台がつき、体部は斜め上方に開く。13は、高台が外側に踏ん張り、接地面が僅かにくぼむ。体部は斜め上方に直線的に伸び、口縁部は丸く收める。14は、底部と体部の境界に外に踏ん張る高台が付く。外面調整は回転削りの後ナデ、内面調整は回転ナデを施す。12と13は、奈良時代のものと考えられる。

椀は、口径に対して深い形態をなし、体部から口縁部にかけては直線的である。5は口縁部片で、回転ナデを施している。奈良時代から平安時代のものと思われる。6は、直線的に開く体部で口縁端部は丸くおさめる。奈良時代のものと考えられる。5・6とも、杯の可能性も考えられる。

皿（15）は、底部から内縁端に立ち上がる短い体部を持ち、口縁部は軽く内側に屈曲した後、外反する。



第22図 E地区出土石器

鉢（16）は、鉢 A の口縁片である。大きく開く体部に、屈曲して内肩気味に立ち上がる短い口縁部がつく。奈良時代から平安時代のものと思われる。

壺は、17～19の3個体を図化した。17は、短頸壺である。肩の張った体部に直立する短い口縁部がつく。口縁部は回転ナデを施す。肩部外面には自然釉がかかっている。18は、短頸壺である。体部から屈曲して直立する短い頸部を持ち、口縁端部は内側に微かな段がつく。17・18とも、奈良時代から平安時代のものと思われる。19は壺の底部と思われる。中央部がややくぼむ平底で、外面には回転ヘラケズリを施している。奈良時代のものと思われる。

土師器は、製塙土器（20・21）・杯 A（22・23）・壺（25）が出土している。

製塙土器は、いずれも焼塙壺に分類されるものである。20は、器壁が厚く、粘土紐を積み上げ、ナデ調整で仕上げる。21は、器壁が20に比べると若干薄く、粘土紐を積み上げ、ナデ調整で仕上げる。いずれも奈良時代のものと思われる。

杯 A は、2点とも口縁部内端面が沈線状をなすものであるが、磨滅が著しく暗文の有無を観察することはできなかった。22は、平底から屈曲して斜めに立ち上がる体部を持ち、口縁部は外反し、口縁端部内面に沈線をめぐらせる。奈良時代のものと考えられる。

壺（25）は長胴タイプのもので、体部外面をハケ調整、内面をナデ調整後、口縁部内外面がヨコナデ調整により仕上げられている。

石器は、3点（S1～S3）出土しており（第22図）、いずれもサスカイト製の打製石器である。

S1は削器で、短冊状の剥片を利用し、短辺に刃部を作っている。石材の質はやや悪い。長さ81.5mm、幅31.8mm、厚さ9.5mmを測り、重量は27.4gである。S2は楔形石器で、周辺をある程度加工しているが、明瞭な刃部は観察されない。長さ41.8mm、幅39.8mm、厚さ11.0mmを測り、重量は212gである。S3も楔形石器で、階段状剥離はそれほど明瞭ではない。側面は片側に自然面が残り、反対側は剪断面である。長さ38.5mm、幅23.9mm、厚さ12.0mmを測り、重量は8.6gである。

第3章 調査の成果

第3表 出土土器観察表(1)

No	種別	器種	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存状況
1	弥生	甕	包含層		4.7	3.8	底部2/3
2	弥生	甕	包含層		3.3	4.8	底部1/2強
3	弥生	甕	包含層		2.0	2.5	底部完存
4	弥生	有孔鉢	包含層		5.2	2.6	底部1/3
5	須恵器	楕	包含層	15.5	2.2		口縁部1/8
6	須恵器	楕	包含層	15.6	6.1		口縁部1/12
7	須恵器	杯 A	包含層		2.9	9.8	底部1/5
8	須恵器	杯 A	包含層		1.0	8.3	底部1/2弱
9	須恵器	杯蓋	包含層	15.1	2.1		口縁部1/8
10	須恵器	杯蓋	包含層	12.4	1.5		口縁部1/7・つまみ完存
11	須恵器	杯 B	包含層		2.4	8.8	底部1/5
12	須恵器	杯 B	包含層		2.6	8.5	底部1/5
13	須恵器	杯 B	包含層	12.5	3.7	8.6	口縁部わずか・底部1/8
14	須恵器	杯 B	包含層		1.3	9.7	底部1/4
15	須恵器	皿	包含層	14.4	1.1	11.8	1/8
16	須恵器	鉢	包含層		4.2		口縁部わずか
17	須恵器	短頸壺	包含層	12.2	3.6		口縁部わずか・頸部1/6
18	須恵器	短頸壺	包含層	13.8	3.5		口縁部1/8
19	須恵器	壺	包含層		3.0	12.4	底部1/3
20	製塙上器	焼塙壺	包含層		6.5		口縁部わずか
21	製塙土器	焼塙壺	包含層		4.5		口縁部わずか
22	土師器	杯 A	包含層	13.3	3.2	8.4	口縁部1/9
23	土師器	杯 A	包含層	12.6	3.4	6.9	1/6
24	土師器	甕	SD01	25.0	14.4		口縁部2/3
25	土師器	甕	包含層	25.4	10.5		口縁部1/3+1/5
26	須恵器	楕	SD01	16.6	3.6		口縁部1/5
27	土師器	杯	SD01	13.6	2.9	7.9	1/4
28	瓦器	楕	SB01-P4	13.1	3.9	7.2	口縁部わずか・底部1/3
29	土師器	壠	P01		10.6		口縁部～体部わずか

色 講	焼成	胎 土	備 考	挿図	図版
黄褐～暗灰黄		1～5mm大の長石・石英多く含む		21	6
灰黄～灰		1～3mm大の長石・石英非常に多く含む		21	—
橙～にぶい黄橙		1～4mm大の長石・石英やや多く含む		21	6
橙～浅黄橙		0.5～3mm大の長石・石英・チャート含む		21	6
灰	良好			21	—
灰	良好			21	6
灰白	良好			21	6
灰	良好			21	—
灰	良好			21	6
灰白	良好			21	—
灰	良好		高台高0.75cm	21	—
灰白	良好		高台高0.35cm	21	—
灰～灰白	良好		高台高0.6cm	21	6
灰～灰白	良好		高台高0.5cm	21	—
灰白	良好			21	—
灰白		0.5～2mm大の長石・石英・チャート含む		21	—
灰白	良好			21	6
灰	良好		頸径13.5cm	21	6
灰～灰白	良好			21	6
浅黄橙		1～5mm大の長石・石英多く含む		21	6
灰黄～にぶい黄橙		1～4mm大の長石・石英・チャート多く含む		21	6
橙		0.5mm以下の長石若干含む		21	6
浅黄橙～橙				21	—
橙		1～4.5mm大の長石・石英（真砂）多く含む		21	7
にぶい黄橙		1～4.5mm大の長石・石英多く含む	頸径22.5cm	21	7
灰白	不良好	0.5～2mm大の長石・チャート含む		21	—
浅黄橙		0.5mm以下のクサリレキ・長石若干含む	底部ヘラ切り	21	7
灰～灰オリーブ		0.5mm以下の長石含む	炭素の吸着不十分	21	—
にぶい黄橙～浅黄橙		0.5～1.5mm大の長石・石英・クサリレキ含む		21	—

第3章 調査の結果

3. 市教委（A・B・C 地区）の調査

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序

調査区は大きく3箇所に分かれる。「やまだばし」橋脚建設箇所のA地区、第57号支線排水路（以下水路）のB地区、第54号水路の一部のC地区的3箇所である。

A地区は、県教委調査区の南東側に隣接する調査区で、基本層序はほぼ同様である。B地区は、基盤層上に約20cm程度の旧耕作土が堆積する（第23図）。遺構を検出する基盤層の深度は浅く、後世の削平を受けている可能性が強い。トレンチ中央から南半にかけて基盤層に5~10cmの厚さで遺物を含む淡灰褐色粗砂層が堆積する。C地区は、耕作土下に約80cmの厚さで旧耕作土層が堆積し、その下層で中世の遺物を含む灰色シルト層が堆積、基盤層である淡黄色粗砂層に至る。

遺構の検出 A・B地区ともに遺構を検出した面は1面である。

(2) 遺構と遺物

概要

県教委調査区に隣接するA地区では、掘立柱建物SB01、SB02の東で数穴のピットを検出したが、建物跡は確認できなかった。その他に土坑・溝などを検出した。B地区では、溝・柱穴を検出した。柱穴はトレンチ北部に集中する箇所を認めるが、建物跡は確認できない（第24図）。

溝 小規模なものも含め5条の溝を検出した。

SD01（第25図）

Bトレンチ中央部で検出した溝で、ほぼ東西方向にのびるものと想定できる。検出面における幅は1.70m~2.20m、最深部における検出面からの深さは30cmを測る。両肩の立ち上がりはなだらかで、底は平坦である。

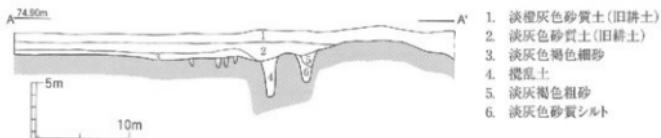
埋土は2層からなり、いずれも自然堆積によるものとみられる。

2層から土器器の小片数点および須恵器片1点が出土しているが、時期を特定できる遺物はない。

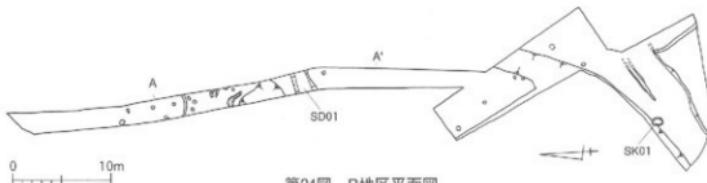
土坑 A地区において、土坑1基を検出した。

SK01（第26図）

A地区で検出した。平面形は長楕円形を呈し、長軸方向1.19m、直行する短軸方向77cmを測る。横



第23図 B地区基本土層図



第24図 B地区平面図

第1節 白生遺跡

断面は浅いU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは10cmである。埋土は灰黄褐色砂質シルト1層である。出土遺物は無く、時期を特定することは困難であるが、形状や規模などから、県教委調査区で検出している土坑とは同時期の遺構と考えられる。

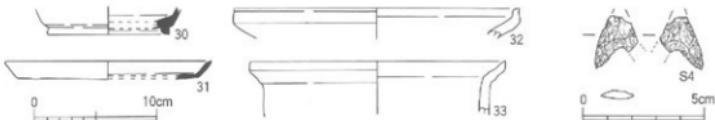
(3) その他

いわゆる包含層から出土した遺物には、土器と石器がある。A・B地区では、律令期を中心とする時期の土器と石器が出土したが、土器は細片化しているものが大半である。なかでも、土師質の土器片が多く、二次的な焼成を受けている土器が目立つ。また、それら土師器片とともに製塙土器が出土した。図化できるものはないが、器壁の厚みが1cm～1.5cmの厚手の土器であり、供伴する土器から奈良～平安時代の製塙土器と考えられる。これら製塙土器も土師器同様強い二次焼成を受けており、使用に供された土器と考えられる。また、C地区では、律令期から中世にかけての土器が出土したが、量は少なく、細片化したものが大半である。本地区でも、A・B地区と同様の製塙土器数点が出土した。

その内、図化できた須恵器は杯B(30)と皿(31)で、いずれもB地区包含層出土の遺物である。杯B(30)は底部の高台付近の破片である。高台は外側に踏ん張り、接地面は内傾し、丸みを帯びる。内面は回転ナデ調整を施す。皿(31)は平坦な底部から短く直線的に外傾して立ち上がる体部を持つ。底部と体部の境は明確な棱をなす。底部外面はハラ起しの後、ナデ調整。内面および体部は回転ナデ調整を施す。

土師器は壺(32・33)がある。いずれも口縁部の破片であるが、端部をナデ調整により上方へつまみ上げ気味に仕上げる。特に33は、端部が明確に上方へ屈折し、端部に平坦な面を有する。

石器は、サヌカイト製の打製石器(S4)がA地区の遺物包含層から出土した。基部中央に抉りのあるいわゆる凹基式の石器で、基部先端は尖る。先端部と右基部を欠損する。残存部の全長2.1cm、最大厚0.3cm、重量1.0gである。



第27図 A・B地区出土遺物

第4表 出土土器観察表(2)

No	種別	断面	地図	遺物名	口径(cm)	底径(cm)	壁厚(cm)	残存状況	色 調	成形	用 土	層 号	測定	記述	
30	須恵器	杯	B地区C	須含層			0.50	底端わずか	灰	良好			27	8	
31	須恵器	皿	B地区C	須含層	17.00	1.50	1.50	1号	灰	良好			27	8	
32	土師器	壺	A地区C	包含層	25.40			口縁部わずか	灰～灰褐色	良好	最大の石器	長石多く、金剛石少混合	27	8	
33	土師器	壺	B地区C	包含層	21.00			口縁部わずか	灰～灰褐色	良好	1～2cm大の孔	長石多く含む	外表面スリット	27	8

第3章 調査の成果

4. 市教委（D地区）の調査

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序

調査区は、第54号水路の一部が対象となる。東西トレーニチでは耕作土下に約80cmの厚さで旧耕作土層が堆積し、その下層で中世の遺物を含む灰色シルト層が堆積、基盤層に至る。それに連続する南北トレーニチでは、基盤層の深度は南北方向へ次第に浅くなり、遺構を検出した範囲では基盤層上に堆積する遺物包含層は消滅する。近世以後の水田造営に伴い、削半された可能性が高い（第28図）。

遺構の検出 検出面は1面である。

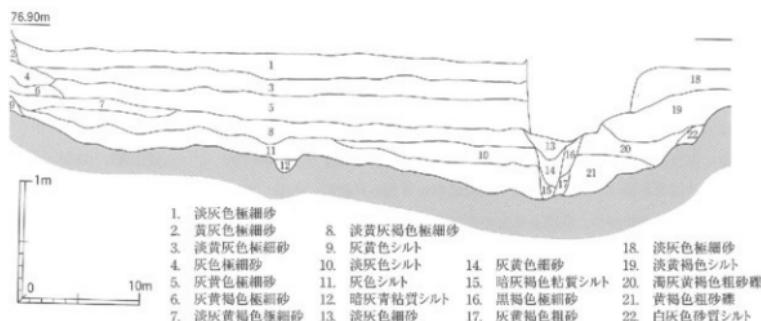
(2) 遺構と遺物

概要（写真図版8）

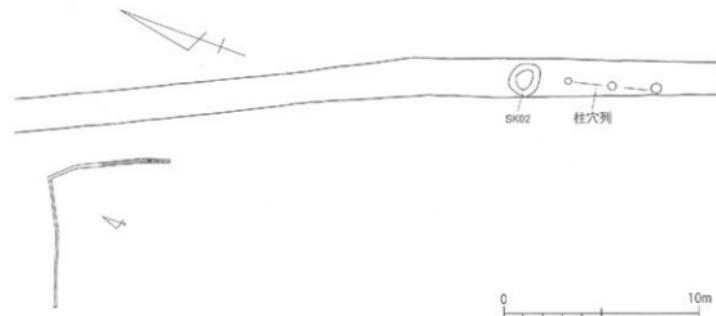
南北方向のトレーニチ南端で、土坑・柱穴列を検出した（第29図）。

柱穴列（第30図）

南北方向トレーニチ南端で検出した。3穴が一列に並ぶもので、掘立柱建物の柱列になる可能性がある。柱間はP1-P2間、P2-P3間とともに2.20mで等間隔である。柱筋の方針はN13°Wである。柱穴掘

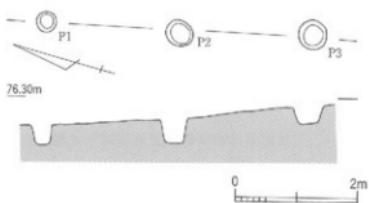


第28図 D地区基本土層図

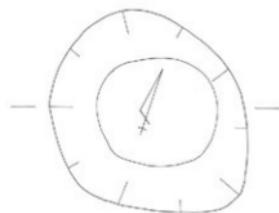


第29図 D地区平面図

第1節 白生遺跡



第30図 柱穴列



第31図 SK02

方の平面形は円形で、検出面からの深さは30~40cmである。柱痕は確認できない。

柱穴内から遺物は出土していないが、包含層出土遺物の時期から、中世の遺構と考えられる。

土坑 土坑1基を検出した。

SK02(第31図)

南北方向トレンチ南端部の柱列の北側で検出した。他の遺構との切り合い関係ではなく、完存する。平面形は円形に近い梢円形を呈し、規模は184m×155mを測る。最深部における検出面からの深さは40cmを測り、なだらかな立ち上がりを示すが、東側にわずかなステップ状の平坦面を有する。その部分の深さは15~24cmである。埋土は4層からなり、1層および4層から少量の炭化物が出土したほか1層から土師器の小片が数点出土したが、時期を特定できる遺物は認められない。包含層出土遺物の時期から、中世に位置づけられる遺構と考えられる。

(3) その他

いわゆる包含層からは、律令期から中世にかけての土器が出土した。須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・輸入陶磁器などがあるが、量は少なく、細分化したものが大半である。また、本地区でも製塙土器数点が出土した。器壁の厚みが1.0cm~1.5cmの厚手の土器であり、奈良~平安時代の製塙土器と考えられる。これら製塙土器も他地区の製塙土器同様強い二次焼成を受けており、使用に供された土器と考えられる。

出土した陶磁器は龍泉窯系の青磁碗(34)がある。外反して開口口縁部で、無文である。釉薬はオリーブ灰色を呈し、厚みは均一である。

第5表 出土土器観察表(3)

No.	種類	器種	地区	調査名	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	残存状況	色 調	偏光	胎 土	参考	神 国	区 画
34	青磁	碗	D地区	包含層	14.30			口縁部わずか	オリーブ灰	良好			—	8
35	製塙土器	製塙土器	A地区	包含層				外部わずか	赤褐	良好	2~3cmの大石英・長石多く含む	厚さ1.4cm	—	8
36	粗面土器	粗面土器	A地区	包含層				口縁部わずか	赤	良好	2~3cmの大石英・長石・カサリ鐵多く含む	厚さ1.5cm	—	8
37	粗面土器	粗面土器	B地区	包含層				口縁部わずか	橙	良好	2~3cmの大石英・長石多く含む	厚さ1.4cm	—	8
38	黑斑土器	黑斑土器	B地区	包含層				口縁部わずか	明赤褐	良好	2~3cmの大石英・長石多く含む	厚さ1.3cm	—	8
39	泥質土器	泥質土器	B地区	包含層				口縁部わずか	赤褐	良好	2~3cmの大石英・長石・カサリ鐵多く含む	厚さ1.4cm	—	8

第2節 筒井遺跡

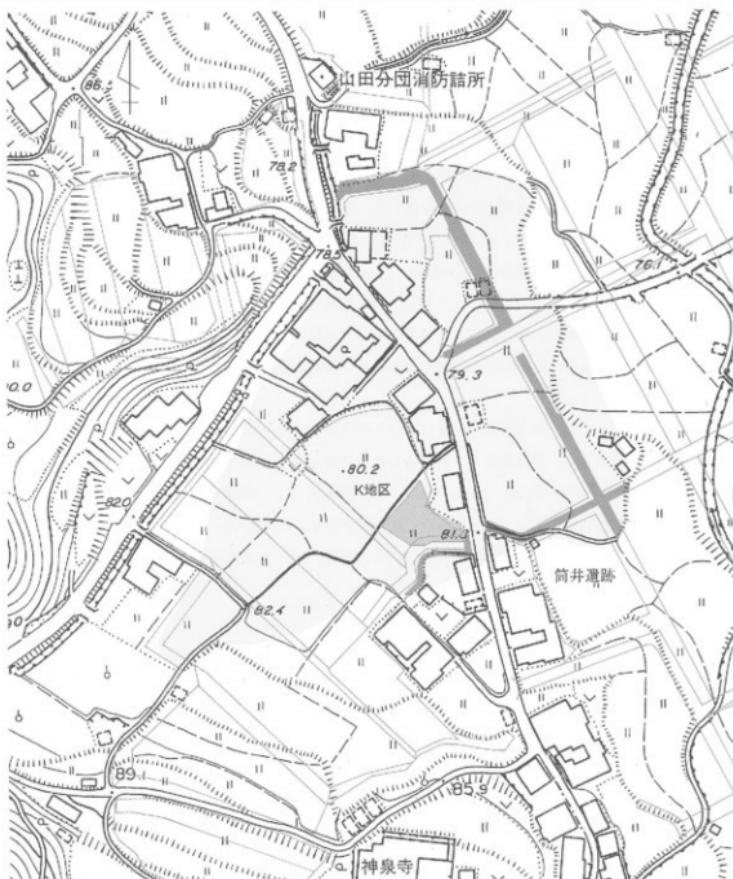
1. 遺跡の概要

(1) 遺跡の位置

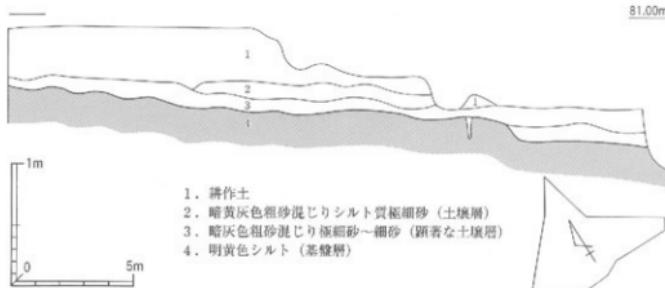
山田盆地の西側、山田川左岸に位置する（第5図）。七反田遺跡の南側、狭間遺跡の北側、白生遺跡の西側にある。

(2) 調査の概要

兵庫県教育委員会は、水田造成地（K地区）を、市教育委員会は水路掘削地及び水田造成地（A～J地区）を、調査対象とした（第32図）。県教委が調査した地区は、筒井遺跡の南端部中央にある。



第32図 調査位置図



第33図 K地区基本土層図

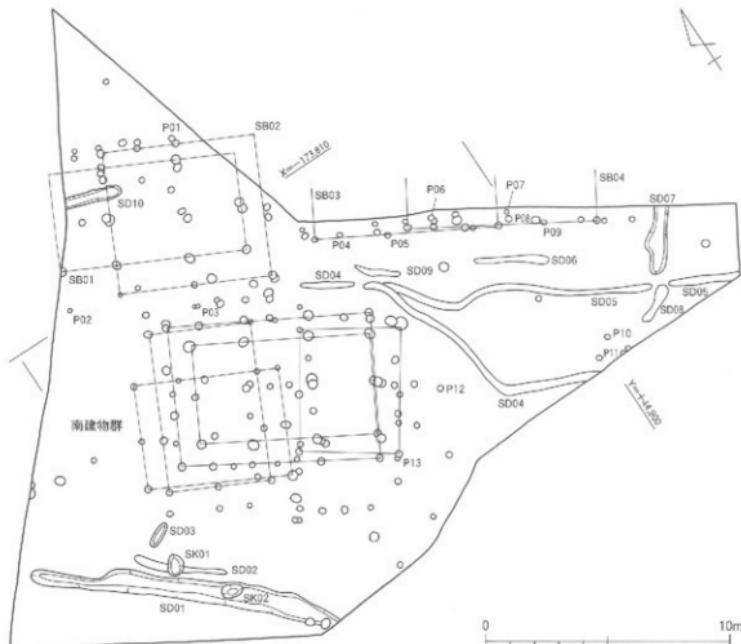
簡
井
遺
跡

2. 県教委（K地区）の調査

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序

上から、耕作土・暗黄灰色粗砂混じりシルト質板細砂（土壤層）・暗灰色粗砂混じり極細砂～細砂（顯著な土壌層）・明黄色シルト（基盤層）の層序が認められた（第33図）。暗灰色粗砂混じり極細砂～細砂は、



第34図 K地区平面図

基盤層の明黄色シルトが土壤化した層である。

遺構の検出

遺構は、第4層上面の1面で検出している。遺構面は平坦ではなく、南から北方向に低くなっている。その標高は、南西隅で80.40m、北端部で79.95mである。

(2) 遺構と遺物

概要（写真図版9・10） 挖立柱建物跡・柱穴・土坑・溝を検出している（第34図）。

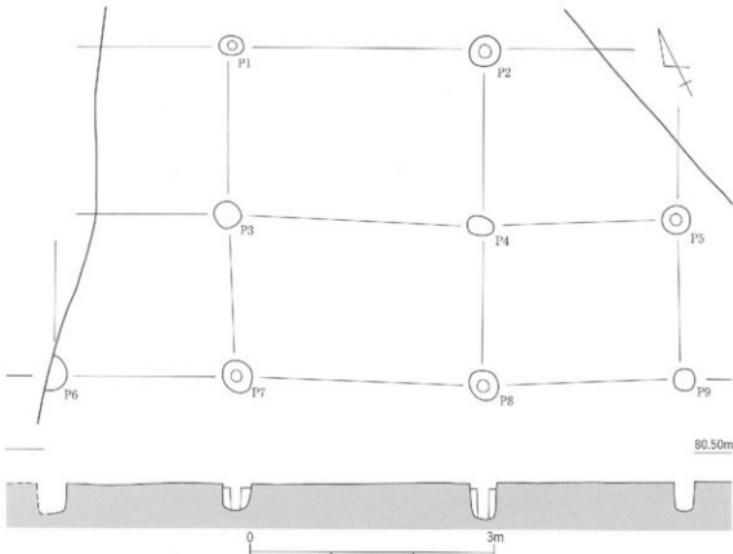
掘立柱建物跡 9棟検出した（SB01～SB09）。

SB01（写真図版11）

調査区西北部で検出した（第34図）。SB02と平面的に重複するがP3がSB02-P3を切っている。総柱建物で、東西方向に3間、南北方向に2間分を検出した（第35図）が、さらに西側へ拡がる可能性も考えられる。また、北東隅と北西隅の柱穴は調査区外にあたり、検出できなかった。

建物の規模は、東西方向（南桁行方向）で7.70m、南北方向（梁行方向）で4.05mを測り、復元される面積は31.18m²である。南桁行方向での柱穴間の距離は、P6-P7間で2.20m、P7-P8間で3.00m、P8-P9間で2.50mを測る。梁行方向（P1-P7間）の柱穴間距離は、P1-P3間で2.05m、P3-P7間で2.00mを測る。また、P1-P7を基準とした棟軸方向はN25°00' Eを示す。

柱穴の平面形は円形を基本形とし、その径は25cm～35cmである。検出面からの深さは、32cm～45cmである。埋土は、いずれも黒灰色シルトと黄褐色シルトが入り混じった埋め土で、P3・P4・P6・P9を除く柱穴で柱痕を確認することができた。いずれも、柱穴断面の観察で確認できたものである。その



第35図 SB01

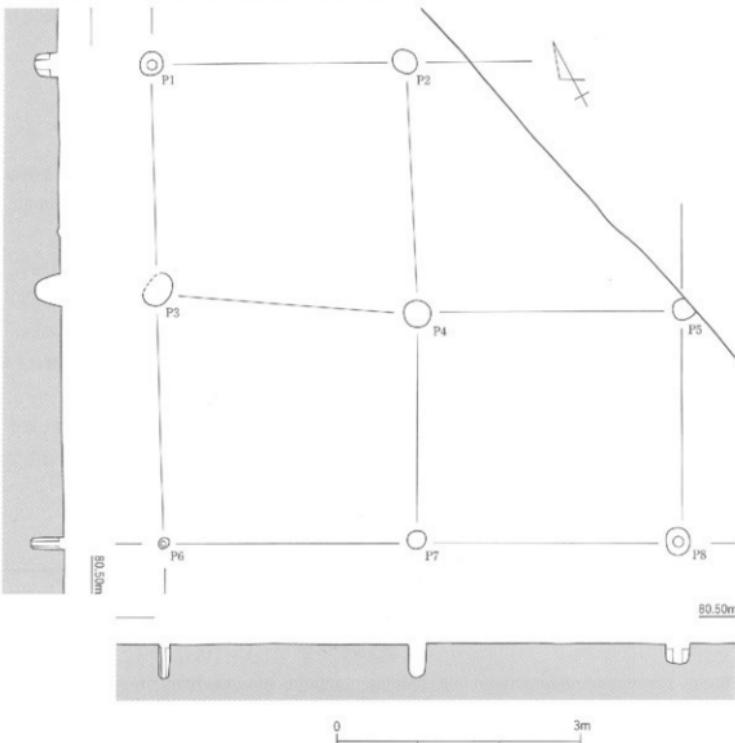
径は12cm～15cmを測る。

遺物は各柱穴から出土している。器種としては、土師器・須恵器・瓦器の各器種が出土している（第48図）。土師器は、皿・甕・壺が出土しているが、固化できたのはP3から出土した皿（3）に限られる。杯に近い形態的特徴を有し、口縁部は2段のヨコナデ調整により仕上げられている。この他、全て手づくね整形による大皿の底部片も出土している。この他、甕と壺は体部片を中心に出土しているが、甕のなかには「く」字形をなす口縁部片も認められる。

須恵器は、椀・甕・捏鉢が出土しており、椀（4）と捏鉢（1）について図化することができた。いずれも東播系須恵器に分類されるもので、椀の底部は比較的明確な平底をなし、回転糸切りにより切り離されている。

瓦器は椀と杯が出土しており、固化できたのはP4から出土した2の椀1個体に限られる。内面にわずかに暗文が認められるが、炭素の吸着が不十分である。椀については、残存する範囲においては暗文が認められない。また、底部片は、断面蒲鉾形をなすものである。

時期は、出土土器から判断して、中世Ⅰ期に位置付けられる。



第36図 SB02

第3章 調査の成果

SB02 (写真図版11)

調査区北西部で検出した（第34図）。SB01と平面的に重複し、P3がSB01-P3に切られている。総柱建物で、東西各2間分を検出している（第36図）が、北東隅は調査区外にあたり、検出できなかった。建物の規模は、西梁行で5.90m、南桁行で6.30mを測る。柱穴間の距離は、西梁行で、P1-P3が2.80m、P3-P6が3.10mである。また、南桁行でP6-P7が3.10m、P7-P8が3.20mである。P1-P6を基準とした棟軸方向はN26°30' Eを示す。

柱穴の平面形は円形を基本形とし、その規模は13cm～32cmである。検出面からの深さは、25cm～42cmである。埋土は、いずれも黒灰色シルトと黄褐色シルトが混じりあった埋め土である。柱痕は、P1・P6・P8の3穴で確認でき、その径は7cm～12cmである。

遺物は各柱穴から出土している。器種としては、土師器・須恵器・瓦器の各器種が出土している。土師器は、皿・楕・甌が出土しており、岡化できたのはP8出土の6の皿に限られる（第48図）。内外面ともヨコナデ調整により仕上げられている。他に、大皿の底部片が出土しているが、手づくねにより仕上げられている。また、底部が残存する楕は、回転糸切りにより切り離されている。

須恵器は、東播系須恵器の楕が出土しているが、小片のため岡化できなかった。瓦器は、楕が出土しているが、いずれも小片で、炭素の吸着が不十分である。

時期は、出土土器から判断して、中世Ⅰ期に位置付けられる。

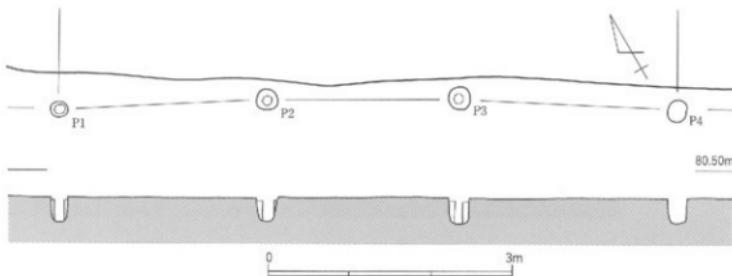
SB03 (写真図版11)

調査区北東部で検出した（第34図）。SB04と平面的に重複するが、調査では両者の前後関係を明らかにすることはできなかった。北西～南東方向に直列する4穴の柱穴（P1～P4）がほぼ等間隔であることから、1棟の建物（第37図）と判断したものである。建物の大半は調査区外に拡がっている。

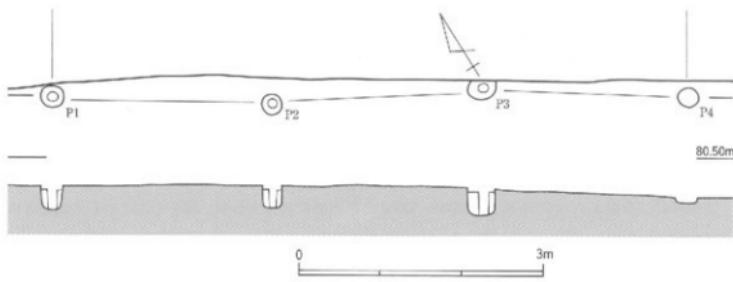
建物の規模は、P1～P4間で7.60mを測り、柱穴間の距離はP1～P2間で2.55m、P2～P3間で2.35m、P3～P4間で2.70mである。また、P1～P4の直角方向を基準とした棟軸方向は、N31°00' Eを示す。

柱穴の平面形は円形を基本とし、その径は21cm～27cmを測る。また、検出面からの深さは28cm～31cmである。埋土は、いずれも黒灰色シルトと黄褐色シルトが混じりあった埋め土である。柱痕はP4以外で確認することができ、その径は10cm～13cmである。

遺物は各柱穴から出土している。器種としては、土師器と瓦器が出土している。土師器は、壺と皿が出土しており、岡化できたのはP1から出土した壺（10）に限られる（第48図）。皿は底部片が出土して



第37図 SB03



第38図 SB04

簡
井
遺
跡

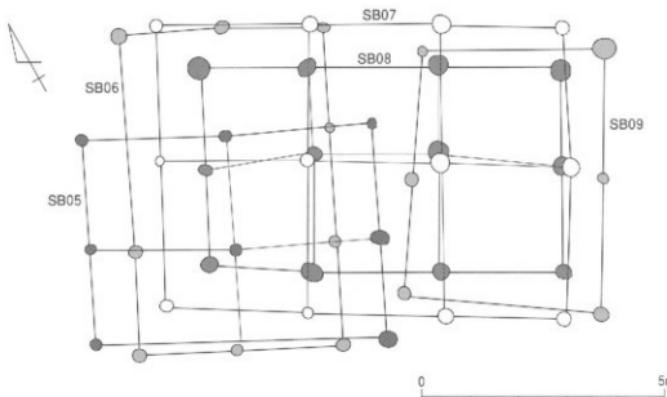
おり、手づくねにより成形されている。瓦器は楕の底部片が出土しており、高台の断面は蒲鉾形を呈する。時期は、出土土器から判断して、中世Ⅰ期に位置付けられる。

SB04

調査区北東部で検出した（第34図）。SB03と平面的に重複するが、先述したように調査では両者の前後関係を明らかにすることはできなかった。SB03と同様の理由から、1棟の建物（第38図）と判断したもので、建物の大半は調査区外に拡がっている。

建物の規模は、P1-P4間で7.80m、柱穴間の距離はP1-P2間で2.70m、P2-P3間で2.60m、P3-P4間で2.50mである。P1-P4の直角方向を基準とした棟軸方向はN32°00' Eを示す。

柱穴の平面形は円形を基本とし、その径は27cm～34cmを測る。また、検出面からの深さは7cm～34cmである。埋土は、いずれも黒灰色シルトと黄褐色シルトが混じりあった埋め土である。柱痕はP4以外で確認することができ、その径は11cm～12cmである。



第39図 E地区 南建物群

遺物は各柱穴から出土しているが、いずれも小片で、図化できたものはない。器種としては、土師器と瓦器が出土している。土師器は皿か椀と考えられる底部片が出土しており、回転糸切りにより切り離されている。瓦器は椀が出土しており、底部片はかなり退化した高台が貼付けられている。

時期は、出土土器から判断して、中世Ⅰ期に位置付けられる。

SB05 (写真図版11)

南建物群に位置する（第39図）。SB06～SB09と平面的に重複するが、調査ではこれらの建物との前後関係を明らかにすることはできなかった。2間×2間の純柱建物（第40図）で、東西方向に桁行をとる。梁行方向は平行するが、桁行方向はわずかに不規則となっている。

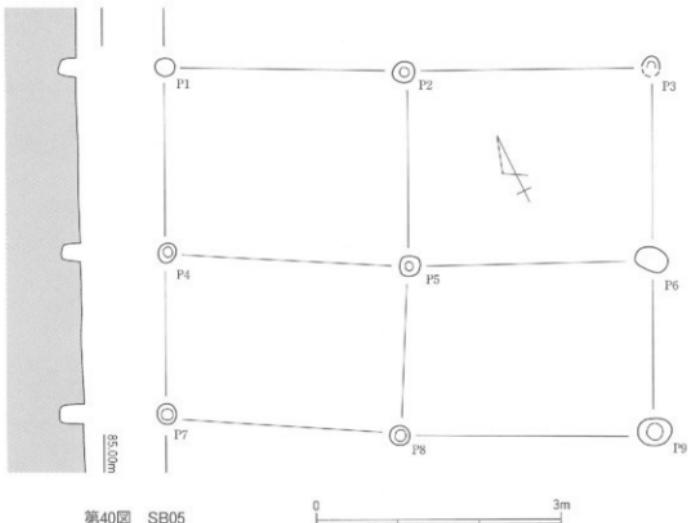
建物の規模は、北桁行方向で6.00m、東梁行方向で4.45mを測り、両者を基準とした建物の面積は26.7 m²である。北桁行の柱穴間距離は、P1～P2間が2.95m、P2～P3間が3.05mである。東梁行の柱穴間距離は、P3～P6が2.35m、P6～P9が2.10mである。また、P1～P7を基準とした棟軸方向は、N26° 00' Eを示す。

柱穴の平面形は円形を基本とし、その径は21cm～33cmを測る。また、検出面からの深さは20cm～32cmである。埋土は、いずれも黒灰色シルトと黄褐色シルトが混じりあった埋め土である。柱痕はP1とP6以外で確認することができ、その径は10cm～20cmである。

遺物は各柱穴から出土している。器種としては、土師器・須恵器・瓦器の各器種が出土している。土師器は、皿と甕が出土しているが、いずれも小片で図化することはできなかった。須恵器は、東播系の椀が出土しており、底部片は回転糸切りにより切り離されている。

瓦器は、図化できたのはP7出土の8の椀に限られる（第48図）。内外面とも暗文は認められない。

時期は、出土土器から判断して、中世Ⅱ期に位置付けられる。



第40図 SB05

SB06 (写真図版12)

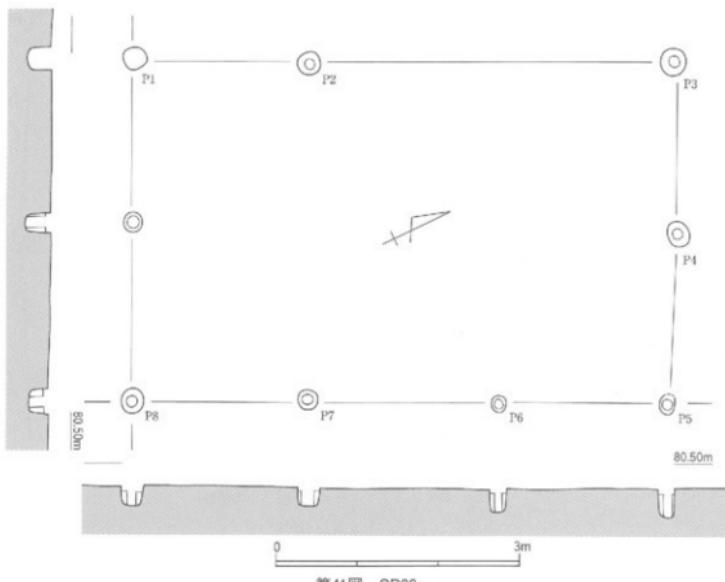
南建物群内で検出した（第39図）。SB05・SB07～SB09と平面的に重複し、P5がSB07～P2に切られている。2間×3間の側柱建物であるが、西桁行の1穴を欠く（第41図）。

建物の規模は、東桁行で6.55m、南梁行で4.20mを測り、両者を基準とした面積は27.5m²である。東桁行の柱穴間の距離はP5～P6間で2.05m、P6～P7間で2.35m、P7～P8間で2.15mである。南梁行の柱穴間距離は、P8～P9間で2.20m、P9～P1間で2.00mである。P5～P8を基準とした棟軸方向は、N26°00' Eを示す。

柱穴の平面形は円形を基本とし、その径は19cm～31cmを測る。また、検出面からの深さは23cm～33cmである。埋土は、いずれも黒灰色シルトと黄褐色シルトが混じりあった埋め土である。柱痕はP1とP7以外で確認することができ、その径は11cm～14cmである。

遺物は各柱穴から出土している。器種としては、土師器・須恵器・瓦器の各器種が出土している。土師器は、椀・皿・壺・甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。椀は底部が残存し、回転系切りにより切り離されている。須恵器は、東播系の椀が出土している。瓦器は、椀が出土しており、P3出土の9の1点を図化することができた（第48図）。比較的深い椀形をなし、内面にやや密に暗文が施されている。

時期は、出土土器から判断して、中世Ⅰ期に位置付けられる。



第41図 SB06

SB07 (写真図版12)

南建物群内で検出した（第39図）。SB05・SB06・SB08・SB09と平面的に重複し、P2がSB06～P5を、

P8 が SB08 - P8 を切っている。2間×3間の総柱建物で(第42図)、東西方向に棟軸方向をとっている。

建物の規模は、南桁行で 8.15 m、西梁行で 5.80 m を測り、両者を基準とした面積は 47.20 m²である。南桁行柱穴間の距離は、P9 - P10 間で 2.90 m、P10 - P11 間で 2.85 m、P11 - P12 間で 2.40 m を測る。西梁行柱穴間の距離は、P1 - P5 間で 2.80 m、P5 - P9 間で 3.00 m である。P1 - P9 を基準とした棟軸方向は、N28° 00' E を示す。

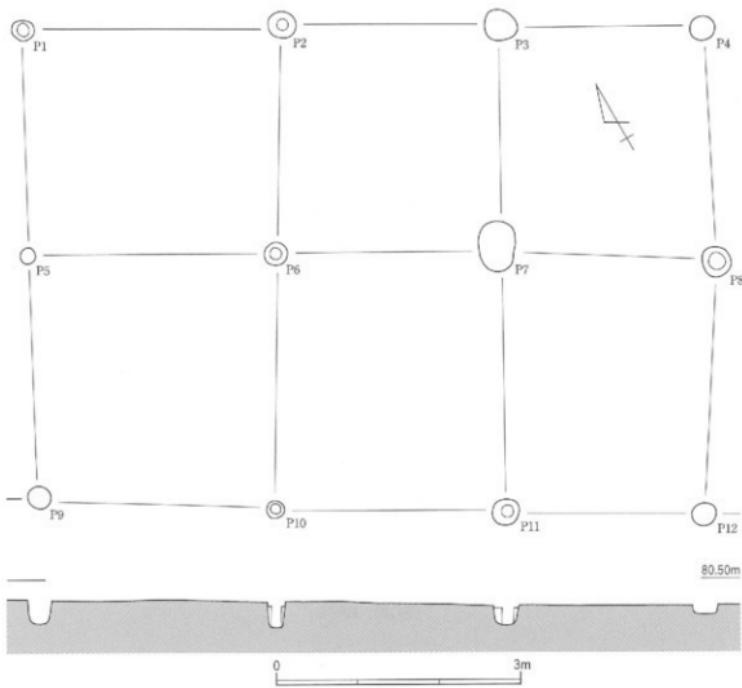
柱穴の平面形は円形を基本とし、その径は 18 cm～33 cm を測る。また、検出面からの深さは 9 cm～32 cm である。埋土は、いずれも黒灰色シルトと黄褐色シルトが混じりあった埋め土である。柱斑は P5 と P7 以外で確認することができ、その径は 14 cm～22 cm である。

遺物は各柱穴から出土している。器種としては、土師器・須恵器・瓦器・青磁が出土している。

土師器は、皿と壺が出土しているが、図化できたのは P2 出土の皿(7) 1 個体に限られる(第48図)。底部を中心へ残存し、回転糸切りにより切り離されている。他の皿は、全体を手づくねにより成形する、いわゆる京都系の皿である。壺は、3足壺に分類されるものである。

この他、須恵器は壺と捏鉢が出土している。瓦器は椀が出土している。暗文は認められない。青磁は、竈泉窯系の碗が出土している。内面に劃花文が認められる。いずれも小片のため図化できなかった。

時期は、出土土器から判断して、中世Ⅰ期に位置付けられる。



第42図 SB07

SB08 (写真図版12)

南建物群内で検出した（第39図）。SB05～SB07・SB09と平面的に重複し、P8がSB07～P8に切られている。2間×3間の総柱建物で（第43図）、東西方向に棟軸方向をとっている。

建物の規模は、南桁行で7.30m、西梁行で4.05mを測り、両者を基準とした面積は29.50m²である。南桁行柱穴間の距離は、P9～P10間で2.15m、P10～P11間で2.65m、P11～P12間で2.50mを測る。西梁行柱穴間の距離は、P1～P5間で2.10m、P5～P9間で1.95mである。P4～P12を基準とした棟軸方向は、N30°00' Eを示す。

柱穴の平面形は円形を基本とし、その径は23cm～44cmを測る。また、検出面からの深さは31cm～47cmである。埋土は、いずれも黒灰色シルトと黄褐色シルトが混じりあった埋め土である。柱痕はP1・P2・P4～P6・P10で確認することができ、その径は11cm～23cmである。

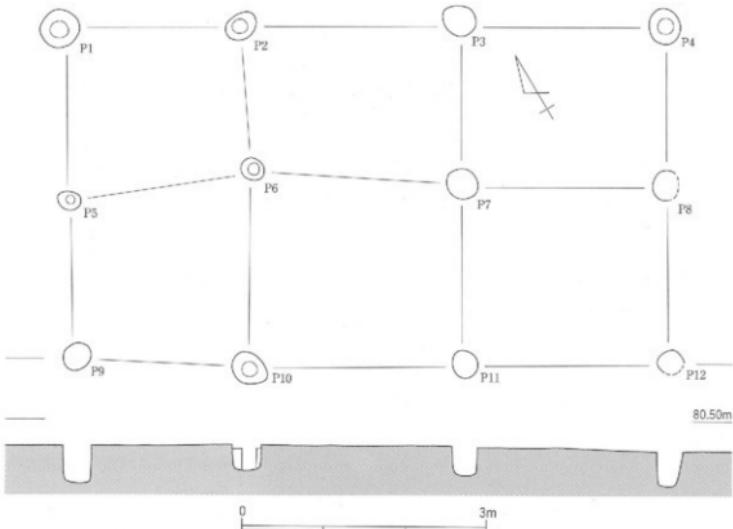
遺物は各柱穴から出土している。器種としては、土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・青磁の各器種が出土している。

土師器は、椀・小皿・壺・壺が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。椀は底部を中心に残存し、回転糸切りにより切り離されている。須恵器は、壺の体部片が出土している。

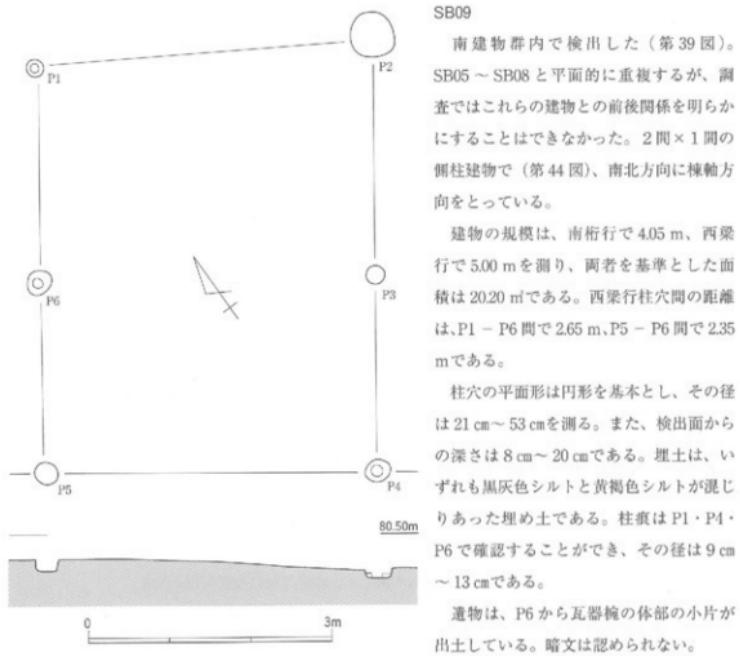
瓦器は、椀が出土しているが、いずれも炭素の吸着が不十分で、暗文は認められない。また、底部が残存する個体は退化傾向にあり、高台断面は蒲鉾形をなす。瓦質土器は、5の1個体が出土している。体部外面は指オサエ、内面はナデ調整により、口縁部はヨコナデ調整により仕上げられている。

青磁は、竈泉窯系の碗が出土している。外面に蓮弁が認められる。

時期は、出土土器およびSB07との関係から判断して、中世Ⅰ期に位置付けられる。



第43図 SB08



第44図 SB09

時期は、出土土器から判断して、中世Ⅰ



第45図 柱穴の検出

P01

調査区北西部で検出した（第34図）。SB02の北桁行ライン上に位置する。瓦器碗が1点（11）出土している（第48図）。杯形に近い形態をなし、高台は認められない。指オサエとナデ調整により整形後、口縁部を中心ヨコナデ調整により仕上げられている。内面のみに暗文が認められる。

時期は、出土土器から判断して、中世Ⅰ期と考えられる。

P02

調査区北西部で検出した（第34図）。SB02の西側に位置する。土師器の皿と瓦器の椀が出土している。図化できたのは瓦器椀（12）に限られる（第48図）。指オサエとナデ調整により整形後、口縁部を中心にヨコナデ調整により仕上げられている。内面にわずかに暗文が認められる。時期は中世Ⅰ期と考えられる。

P03

調査区北西部で検出した（第34図）。SB02とSB06の中間に位置する。土師器の皿と瓦器の椀が出土している。図化できたのは土師器の皿（20）で、口縁部はヨコナデ調整により仕上げられている（第48図）。時期は中世Ⅰ期と考えられる。

P04

調査区北東部で検出した（第34図）。SB03の西隣部に位置する。須恵器の捏鉢の小片（18）が出土している（第48図）。時期は中世Ⅰ期と考えられる。

P05

調査区北東部で検出した（第34図）。P04の北東側に位置する。土師器の皿と瓦器椀が出土している。図化できたのは瓦器椀（13）に限られる（第48図）。指オサエとナデ調整により成形後、口縁部を中心にヨコナデ調整により仕上げられている。内面のみに暗文が認められる。時期は中世Ⅰ期と考えられる。

P06

調査区北東部で検出した（第34図）。P05の東側に位置する。土師器の小皿・瓦器椀・白磁碗が出土している。小皿（23）は、手づくねにより整形され、口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている（第48図）。時期は中世Ⅰ期と考えられる。

P07

調査区北東部で検出した（第34図）。P06の南東側に位置する。土師器の小皿（24）が1点出土している（第48図）。全体を手づくねにより仕上げ、ヨコナデ調整により仕上げられている。時期は中世Ⅰ期と考えられる。

P08

調査区北東部で検出した（第34図）。P07の南側に位置する。瓦器椀が2個体（15・16）出土している（第48図）。15は完形に復元できるもので、指オサエとナデ調整により整形後、口縁部を中心にヨコナデ調整により仕上げられている。また、底部には退化した高台が貼り付けられている。16も15と同様に整形されている。いずれも内面のみに暗文が認められる。

時期は、出土土器から中世Ⅰ期と考えられる。



第46図 柱穴断面の調査

P09

調査区北東部で検出した（第34図）。P08の南東側に位置する。瓦器椀1個体（17）が出土している（第48図）。体部をナデ調整後、口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。内外面とも暗文は認められない。時期は中世II期と考えられる。

P10（写真図版13）

調査区南東部で検出した（第34図）。P11の北東側に位置する。須恵器の捏鉢の底部片（19）が出土している（第48図）。底部は回転糸切りにより切り離されている。時期は中世と考えられる。

P11（写真図版13）

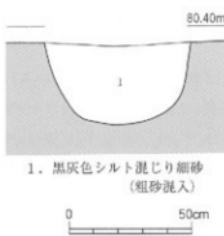
調査区南東部で検出した（第34図）。P10の南西側に位置する。土師器の皿（21）が出土している（第48図）。手づくねにより整形後、口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。時期は中世I期と考えられる。

P12（写真図版13）

調査区南東部で検出した（第34図）。SB09の南東側に位置する。土師器の椀・羽釜と瓦器の椀が出土している。図化できたのは22の土師器椀に限られる（第48図）。回転ナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。羽釜は、口縁部を中心に残存し、鶴の幅1.6cmを測る。瓦器椀は底部が残存し、断面蓄鉢形をなす高台が貼り付けられている。時期は中世I期と考えられる。

P13（写真図版13）

調査区南東部で検出した（第34図）。SB09の南東隅に位置し、同P4に切られている。土師器の小皿（25）と瓦器椀（14）が出土している（第48図）。小皿は、手づくねによる整形後、口縁部を中心に強いヨコナデ調整により仕上げられている。瓦器椀は、底部から口縁部にかけて手づくねにより仕上げられ、底部には退化した高台が貼り付けられている。内面のみに暗文が認められる。また、内面に粘土の継ぎ目が認められる。時期は中世I期と考えられる。



第47図 SK01

土坑 2基（SK01・SK02）検出した。

SK01

調査区南西部で検出した（第34図）。SD02と切り合い関係にあるが、これを切り完存する。平面形は隅丸方形をなし、その規模は85cm×60cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは32cmを測る。埋土は、黒灰色シルト混じり細砂1層からなり、粗砂が多く含まれている（第47図）。この

層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

遺物は、土師器の皿（27）と、瓦器碗が出土している（第48図）。皿は、口縁部を中心に残存し、ヨコナデ調整により仕上げられている。瓦器は小片のため図化できなかった。時期は中世Ⅰ期と考えられる。

SK02

調査区南西部で検出した（第34図）。SK01の南東に位置する。SD01と切り合い関係にあり、SD01を切っている。

平面形は橢円形をなし、その規模は90cm×56cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは20cmである。埋土は、暗灰色粗砂混じりシルト1層からなり、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

遺物は、土師器の小皿が1点（28）出土している（第48図）。回転ナデ調整により仕上げられ、底部はヘラ切り後ナデ調整により仕上げられている。時期は中世Ⅰ期と考えられる。

溝 10条（SD01～SD10）検出した。

SD01

調査区南西部で検出した（第34図）。南東～北西方向にはほぼ直線的にのびる溝で、南東側は調査区外にのび、北西端は調査区内で収束している。検出長は12.80mで、検出面における幅は85cmである。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは14cmである。埋土は、粗砂を含む黄色シルト混じり黒灰色シルト1層からなり、人為的に埋められている。

遺物は、全く出土していない。しかし、SK02に切られ、建物群との方向性が一致し同時に機能していたものと考えられることから、中世Ⅰ期に位置付けられる。

SD02

調査区南西部で検出した（第34図）。SD01の北東側ではほぼ平行する。SK01と切り合い関係にあり、SK01に切られている。ほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。検出長は2.85mで、検出面における幅は30cmである。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは6cmである。埋土は、粗砂を含む黄色シルト混じり黒灰色シルト1層からなり、人為的に埋められている。

遺物は、土師器の小片と瓦器碗が出土している。小片のため図化できなかった。SK01に切られること、および瓦器碗の特徴から、中世Ⅰ期に位置付けられる。

SD03

調査区南西部で検出した（第34図）。SD02の北側に位置する。北東～南西方向にはほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。検出長は1.10mである。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは20cmである。埋土は、粗砂を含む黒灰色シルト混じり黄色シルト1層からなり、人為的に埋められている。

遺物は、瓦器碗の小片が出土している。かなり退化した高台が貼り付けられている。この特徴から、中世Ⅱ期に位置付けられる。

SD04（写真図版13）

調査区東部で検出した（第34図）。南建物群（SB05～SB09）の東側に位置する。ほぼ直線的にのびる溝であるが、2箇所で屈曲している。また、1箇所で途切れている。両端とも調査区内で収束しており、検出長は13.80mで、検出面における幅は25cmである。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは7cmである。埋土は、粗砂を含む黄色シルト混じり黒灰色シルト1層からなり、人為的に埋められている。

遺物は、土師器・須恵器・瓦器・青磁が出土している。土師器は小皿と甕が、瓦器は椀が、須恵器は揺鉢が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。青磁は竜泉窯系の碗が1点（29）出土している（第48図）。外面に蓮弁が認められる。

出土土器の特徴から、中世Ⅰ期に位置付けられる。

SD05（写真図版13）

調査区東部で検出した（第34図）。SB03・SB04の南西側に位置する。ほぼ直線的にのびる溝であるが、1箇所で途切れている。北西端はSD04に切られ、南東端は調査区外にのびている。検出長は14.75mである。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは4cmである。埋土は、粗砂を含む黄色シルト混じり黒灰色シルト1層からなり、人為的に埋められている。

遺物は、土師器の皿と瓦器椀が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。これらの土器の特徴およびSD04との切り合い関係から、中世Ⅰ期に位置付けられる。

SD06

調査区東部で検出した（第34図）。SB04の南西側に位置する。南東～北西方向にはほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。検出長は3.00mで、検出面における幅は25cmである。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは5cmである。埋土は、粗砂を含む黒灰色シルト混じり黄色シルト1層からなり、人為的に埋められている。

遺物は、須恵器の甕と瓦器椀が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。これらの土器の特徴およびSD05と平行することから、中世Ⅰ期に位置付けられる。

SD07

調査区東部で検出した（第34図）。SB04の南東側に位置する。北東～南西方向にはほぼ直線的にのびる溝で、南西端は調査区内で収束し、北東端は調査区外にのびている。検出長は2.80mである。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは7cmである。埋土は、黄色シルト混じり黒灰色シルト1層からなり、その層相から人為的に埋められたものと考えられる。

遺物は、土師器の杯・皿・壺・甕、瓦器の椀が出土している。図化できたのは、土師器の皿（30）と杯（31・32）である（第48図）。30と31ともに、全体を手づくね後口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。32は底部から体部にかけてヘラナデ後にナデ調整が加えられ、その後口縁部を中心にヨコナデ調整により仕上げられている。

これらの土器の特徴から、中世Ⅱ期に位置付けられる。

SD08 (写真図版13)

調査区東部で検出した（第34図）。SD07の南西側に位置する。北東－南西方向にはほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。検出長は1.70mである。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは9cmである。埋土は、粗砂を含む黒灰色シルト混じり黄色シルト1層からなり、人為的に埋められている。

遺物は、瓦器椀が出土しているが、小片のため図化できなかった。この土器の特徴およびSD07と同方向であることから、中世II期に位置付けられる。

SD09 (写真図版13)

調査区中央部北東側で検出した（第34図）。SB03の南西側に位置する。北西－南東方向にはほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。検出長は1.90mで、検出面における幅は25cmである。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは6cmである。埋土は、粗砂を含む黒灰色シルト混じり黄色シルト1層からなり、人為的に埋められている。

遺物が全く出土していないため、時期の特定は困難であるが、SD06と同方向であることから中世I期に位置付けられる。

SD10

調査区北西部で検出した（第34図）。SB01と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。東西方向にはほぼ直線的にのびる溝で、東側は調査区内で収束し、西側は調査区外にのびている。検出長は2.40mで、検出面における幅は45cmである。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは4cmである。埋土は、粗砂を含む黒灰色シルト混じり黄色シルト1層からなり、人為的に埋められている。

遺物が全く出土していないため、出土遺物からの時期の特定は困難である。ただし、SB01・SB02と方向性が一致することから中世I期に位置付けられる。

(3) その他

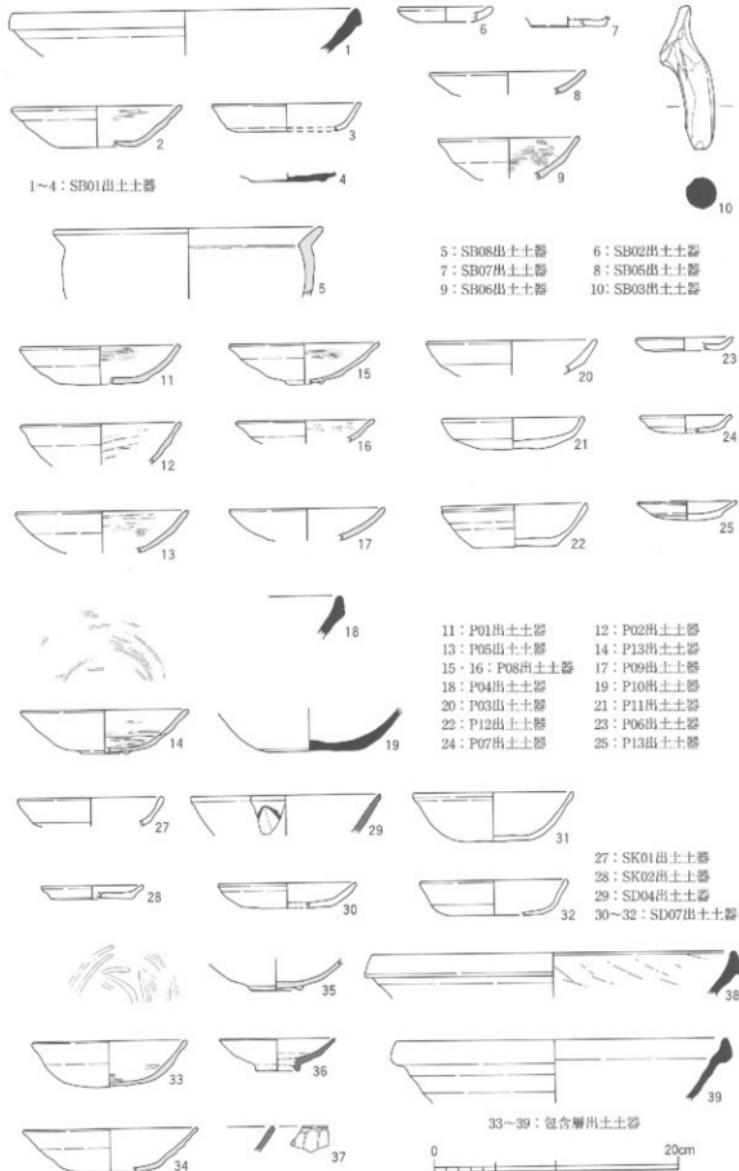
当遺跡を検討する上で重要なと考えられる遺物が、包含層から出土している。以下、その概要を報告する。遺物としては、土師器・須恵器・瓦器・白磁・青磁・陶磁器が出土している（第48図・第49図）。

瓦器は、椀が出土している（33～35）。いずれも、型押し成形後、口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。このなかで、33は比較的深い椀形をなすが、高台が貼付けられていない。内面にわずかに暗文が認められる。

須恵器は捏鉢2個体（38・39）と壺（40）を図化することができた。

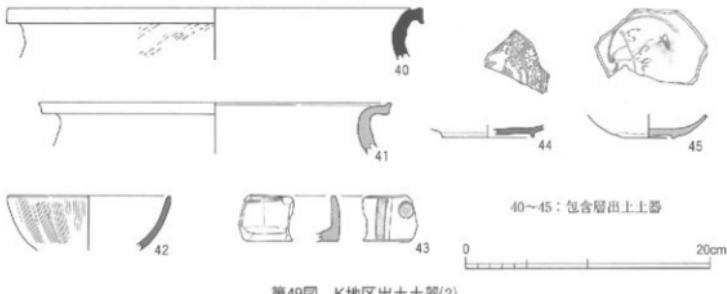
青磁は竜泉窯系の碗（37）が出土している。37の外面に蓮弁が認められる。

陶磁器は、陶器の常滑焼（41）・青磁碗（42）・施釉陶器（43・45）・染付磁器（44）が出土している。42は肥前系の青磁碗である。丸みを帯びた外面に描書きで文様を描く。江戸時代前半（18世紀前半）のものと考えられる。43は施釉陶器の破片である。六角形の鉢になると考えられる。白地に鉄釉で直線と円形の文様を描く。いわゆる織部であるが、江戸時代後半（19世紀）の復興期のものと考えられる。44は染付磁器（青花）の皿底部である。高台は低く、壺付けは尖り気味である。壺付けは露胎で、



第48図 K地区出土土器(1)

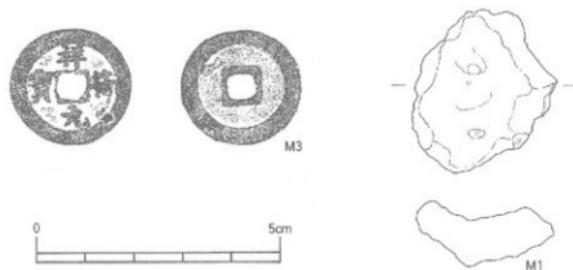
第2節 筒井遺跡



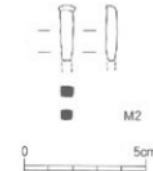
第49図 K地区出土土器(2)

高台内側に砂が付着する。体部と高台の境界に界線をめぐらされ、見込み部には全体に文様が描かれる。中国産で明末（16世紀末から17世紀初頭）のものと考えられる。45は染付磁器（青花）の碗である。底部は基底底で露胎となっている。かなり粗悪な製品で、内面見込み部には鼻須により文様を描くが、釉がにじんで明瞭ではない。中国産で明末（16世紀末から17世紀初頭）のものと考えられる。

この他、金属製品として、鉄滓（M1）、鉄釘（M2）、銅錢（M3）が出土している。M1は、いわゆる「椀形滓」である。鉄釘は、断面方形をなす和釘で、2.25cm残存する。頭部は切り落としてあると思われる。銅錢は、「祥符元宝」である。1008年初鑄の北宋錢である。



第50図 K地区出土銅錢



第51図 K地区出土金属製品

第6表 出土土器観察表(1)

No	種別	器種	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存状況	既成
1	須恵器	捏鉢	SB01-P5	28.20	3.70		口縁部1/8	良好
2	瓦器	椀	SB01-P4	13.60	3.30	6.25	口縁部わずか・底部1/4	
3	土師器	皿	SB01-P3	12.00	2.25		口縁部わずか・体部1/8	
4	須恵器	椀	SB01-P7		0.75	6.20	底部1/2弱	不良
5	瓦質土器	壺	SB08-P2	21.50	5.70		口縁部1/12	
6	土師器	皿	SB02-P8	7.40	1.25	4.60	口縁部1/6・底部わずか	
7	土師器	皿	SB07-P2		0.80	6.20	底部1/2	
8	瓦器	椀	SB05-P7	12.30	1.90		口縁部1/10	
9	瓦器	椀	SB06-P3	11.30	3.40		口縁部わずか・体部1/6	
10	土師器	壺	SB03-P1		11.75		脚1本	
11	瓦器	椀	P01	13.00	3.15	6.60	口縁部1/10・底部1/4	
12	瓦器	椀	P02	13.00	3.45		口縁部1/8	
13	瓦器	椀	P05	14.00	3.50		口縁部1/8	
14	瓦器	椀	P13	13.70	3.60	3.70	2/5	
15	瓦器	椀	P08	12.20	3.35	2.90	口縁部1/8・底部1/3	
16	瓦器	椀	P08	11.20	1.85		口縁部1/6	
17	瓦器	椀	P09	12.60	2.60		口縁部1/8	
18	須恵器	捏鉢	P04		3.50		口縁部わずか	不良
19	須恵器	捏鉢	P10		3.45	8.90	底部3/4	良好
20	土師器	皿	P03	13.80	2.80		口縁部わずか・体部1/12	
21	土師器	皿	P11	11.45	2.60	6.35	口縁部1/4・底部完存	
22	土師器	杯	P12	11.85	3.50	6.85	ほぼ完存	
23	土師器	小皿	P06	7.90	1.05	4.80	1/8	
24	土師器	小皿	P07	7.10	1.45	4.80	口縁部1/6・底部1/4	
25	土師器	小皿	P13	7.90	1.60	5.65	口縁部1/2・底部完存	
26	白磁	碗	P06				体部小片	

色調	胎土	備考	挿図	図版
灰			48	—
灰～灰白	0.5～1mm大の石英・長石含む	炭素の吸着不十分。外面暗文なし。	48	—
暗灰青～灰白	0.5～1.5mm大の長石・石英・チャート含む		48	—
灰白		底部回転糸切り。	48	—
黄灰～暗灰黄	0.5～3mm大の石英・チャート・長石含む		48	—
浅黄橙～にぶい黄橙	0.5～1.5mm大の石英・長石・クサリレキ・雲母やや多く含む		48	—
浅黄橙	0.5～1mm大のクサリレキ・石英・長石含む	底部回転糸切り。	48	—
灰	0.5～1mm大の長石・石英含む	内外面暗文無し。	48	—
灰	0.5mm以下の長石若干含む	外面暗文無し。	48	—
にぶい黄橙～浅黄橙	1～4mm大の石英・長石・クサリレキ含む	断面径2.55cm。	48	—
灰～灰白	0.5～1.5mm大の長石・石英多く含む	炭素の吸着不十分。外面暗文なし。	48	14
灰白～灰	0.5～1mm大の石英・チャート含む	炭素の吸着不十分。外面暗文なし。	48	—
灰	0.5～2mm大の長石・石英・チャートわずかに含む	炭素の吸着やや不十分。外面暗文無し。	48	—
灰～灰白	0.5～2.5mm大の長石含む	炭素の吸着不十分。外面暗なし。	48	14
灰～灰白	0.5mm以下の長石・チャートわずかに含む	炭素の吸着不十分。高台高3mm。	48	—
灰	0.5～1mm大の長石・チャート含む	炭素の吸着不十分。	48	—
灰		炭素の吸着不十分。内外面暗文なし。	48	—
灰～灰白			48	—
灰	0.5～3mm大の長石・チャート含む	底部回転糸切り。	48	—
にぶい黄橙	0.5～1.5mm大の長石・石英・雲母含む		48	—
浅黄橙～にぶい橙	0.5～1mm大のクサリレキ・長石・石英をわずかに含む		48	14
浅黄橙	0.5～2mm大の長石・石英・クサリレキやや多く含む	底部回転糸切り。	48	14
褐灰	0.5～2.5mm大の石英・長石・雲母含む		48	—
灰白～灰黄	0.5～3.5mm大の石英・長石・チャート多く含む		48	—
にぶい黄褐～灰黄褐	0.5～2mm大の長石・石英含む		48	15
灰白			—	—

第7表 出土土器観察表(2)

No	種別	器種	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存状況	焼成
27	土師器	皿	SK01	11.80	2.30		口縁部1/10	
28	土師器	小皿	SK02	8.30	1.10	6.60	1/3弱	
29	青磁	碗	SD04	15.50	3.20		口縁部1/18	良好
30	土師器	皿	SD07	11.25	2.10	7.00	口縁部1/10・底部1/4	
31	土師器	杯	SD07	13.00	4.00	6.40	口縁部1/8・底部1/3	
32	土師器	杯	SD07	12.00	2.90	7.70	1/10	
33	瓦器	椀	包含層	12.50	3.75	7.40	1/2	
34	瓦器	椀	包含層	14.30	3.60	5.20	1/3	
35	瓦器	椀	包含層		2.50	4.30	底部1/8・体部1/5	
36	白磁	皿	包含層	9.40	2.60	3.60	口縁部わずか・底部1/4	良好
37	青磁	碗	包含層		2.15		口縁部わずか	
38	須恵器	捏鉢	包含層	29.50	3.70		口縁部1/5	普通
39	須恵器	捏鉢	包含層	26.90	5.10		口縁部1/8	普通
40	須恵器	甕	包含層	34.00	4.20		口縁部1/10	良好
41	常滑焼	甕	包含層	28.80	4.20		口縁部1/12	良好
42	青磁	碗	包含層	13.15	4.50		口縁部1/6	
43	施釉陶器	鉢	包含層		3.70		1/6	
44	染付磁器	皿	包含層		1.00	7.55	底部1/4	
45	施釉陶器	碗	包含層		2.00	4.05	底部3/4	

色調	胎土	備考	挿図	図版
浅黄橙	0.5~3mm大の長石・チャート・石英含む		48	-
にぶい橙	0.5~2.5mm大の長石・石英・雲母・クサリレキ含む	底部ヘラ切り。	48	14
灰オリーブ			48	-
浅黄橙～にぶい橙	0.5~1mm大の石英・長石含む		48	-
にぶい黄橙～黄灰	0.5~1mm・5mm大の石英・長石含む		48	14
暗灰黄	0.5~1mm大の石英・長石・雲母含む		48	-
灰～灰白	0.5~3mm大のチャート・長石含む	炭素の吸着不十分。外面暗文なし。	48	15
灰～灰白	0.5mm以下の長石含む	炭素の吸着不十分。内外面暗文なし。	48	14
灰～灰白	0.5~1mm大の石英・長石含む	炭素の吸着不十分。外面暗文なし。高台高4mm。	48	-
灰白		高台部露胎。	48	-
オリーブ灰			48	-
灰～灰白			48	-
灰～灰白	5mm大のチャート含む		48	-
灰			49	-
灰褐色～暗オリーブ	1~2.5mm大の砂粒含む		49	14
明オリーブ灰			49	16
灰白		織部。	49	16
白			49	16
灰白			49	16

第3章 調査の成果

3. 市教委（A～G地区）の調査

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序

調査区は、第30・38～41・43～48号水路および200号田地区が対象となる。現地調査時点では便宜上、第30号水路をA地区、それ以外をB地区と呼称したが、今回の整理作業において、200号田および第44号水路をA地区、第45号水路をB地区、第46号水路をC地区、第47号水路をD地区、第39号水路をE地区、第40号水路をF地区、第38号水路をG地区、第48号水路をH地区、第43号水路をI地区、第30号水路をJ地区として整理した（第52図）。ここではA～Gの7地区的調査について報告する。

A～G地区における層序は、基本的には10～40cmの旧耕作土下で基盤層である明黄褐色砂質土に至る。その内、D・F地区の一部で基盤層上に厚さ5～10cmの遺物包含層が堆積する。

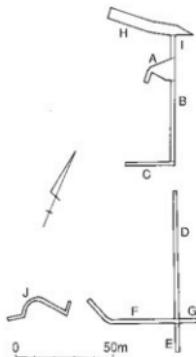
遺構の検出

各地区ともに遺構を検出した面は基盤層の1面で、検出遺構は平安時代と中世の2時期がある。

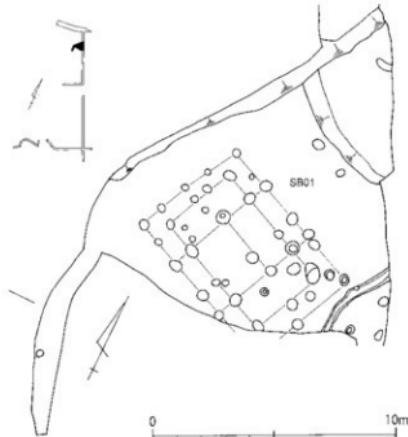
(2) 遺構と遺物

概要（写真図版17）

A地区で、掘立柱建物SB01（第53図）、D・F地区で土坑・溝・ピットを検出した（第55・56図）。D・F地区の遺構については、調査区が狭小なため、詳しい性格は不明である。また、C地区では自然流路の可能性がある大規模な溝状の落ち込みを確認したが、これも調査面積の制約上、深さや性格については確認することができなかった。



第52図 A～J地区地区割図

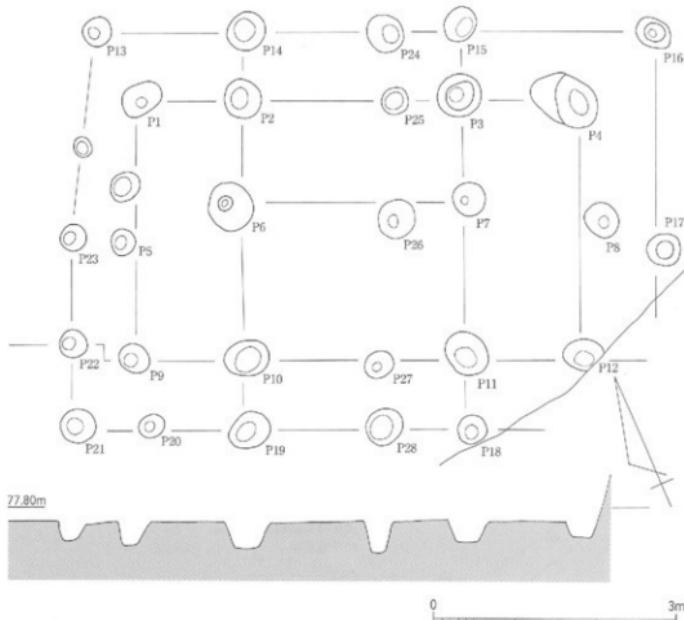


第53図 A地区平面図

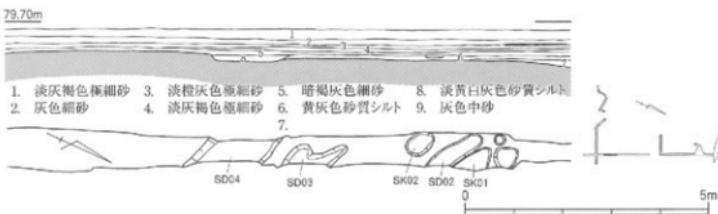
SB01 (第54図)

A地区で検出した。南角が調査区外へ拡がるが、 2×3 間の総柱建物で、四面に庇を有する。建物規模は、梁行方向が3.20m、庇部分を加えると4.80m、桁行方向が5.40m、庇部分を加えると7.20mとなる。梁行方向の柱間は、P2-P6、P3-P7間が1.30m、P6-P10、P7-P11間が1.90mで、それぞれに0.8mの庇がつく。桁行方向は、中央の柱間P2-P3、P6-P7、P10-P11間が2.70mと広く、両サイドのP1-P2、P9-P10間が1.20m、P3-P4、P11-P12間が1.50mで、庇部分は0.9mである。その結果、建物中央部にはP6-P7・P10・P11の4本の柱で形成される広い空間が得られる特徴ある建物である。P3-P1を基準とした建物の棟方位は、N21°5' Eである。柱穴掘方の平面形は円形を基本としており、深さはP1の55cmを除けば、おむね13~35cmである。なお、中央の柱間に、梁行方向と並行する柱列(P24~P28)が存在する。建物の建て替え、あるいは建て替えを受けた2棟の建物が重複している可能性もある。これによく似た構造の建物跡が、淡路島内の谷町筋遺跡で建物址11として確認されている。

P4・7・14・16・24・26から土器類や須恵器の小片数点が出土したが、時期を特定できる遺物は少なく、図化できるものは無かった。わずかにP16から出土した東播系須恵器捏鉢の口縁部破片が時期を推定しうる遺物である。それからすれば、少なくとも13世紀以降に建てられた建物跡と考えられる。



第54図 SB01



第55図 D地区基本土層・平面図

その他の遺構

D地区中央部付近およびF地区西半で、土坑・溝・ピットなどの遺構を検出した。これらの遺構の深度は浅く、後世の削平を受けている可能性が強い。遺構を検出した範囲は、わずかな起伏ではあるが、微高地を形成する範囲に営まれているものと想定できる。

D地区で検出した遺構の大半は、中世の遺構と考えられる。土坑SK02からは瓦器碗底部の破片が出士しており、13世紀後半～14世紀代頃の時期が考えられる。一方、溝状遺構SD03からは黒色土器片や須恵器杯B等の土器片が出土しており、これは平安時代の遺構と考えられる。このほかの遺構からも、土師器や須恵器、瓦器などの土器片が出土しているが、量が少なく、小さな土器片が多いことから時期を特定することは難しい。

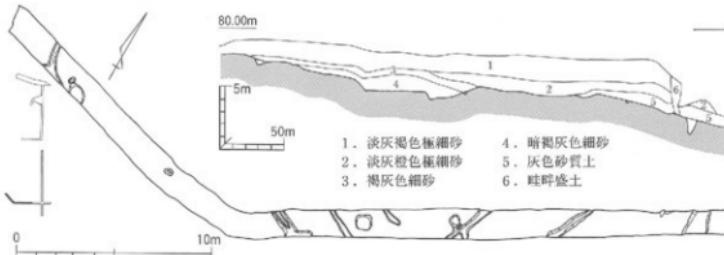
一方、F地区でも溝を中心とする遺構を検出したが、時期を特定できる遺物は出土しなかった。ほぼ同じ方位、あるいはそれに直行する溝が多いことから、時期を同じくする遺構の可能性が強い。

また、C地区ではB地区南端にかけて伸びると想定できる溝状の落ち込みを検出した。検出面での幅は約15mを測る。落ち際の傾斜は比較的なだらかであり、上層から約1.2mまでの堆積は、灰色細砂・暗褐色細砂・淡黄褐色粗砂・灰白色粗砂・青灰色粗砂の順である。調査区が狭小なため、これ以下の土層堆積状況や深さなどは確認できなかった。これら各層から、奈良時代から中世の土器類が出土した。

(3) その他

包含層から出土した遺物には、土器・金属製品・石器がある。主に、C・D・F地区から出土した。

土器は、須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・施釉陶器など、律令期と中世の2時期のものが出土した。



第56図 F地区基本土層・平面図

細片化した土器片が大半であり、固化できたものはわずかである。

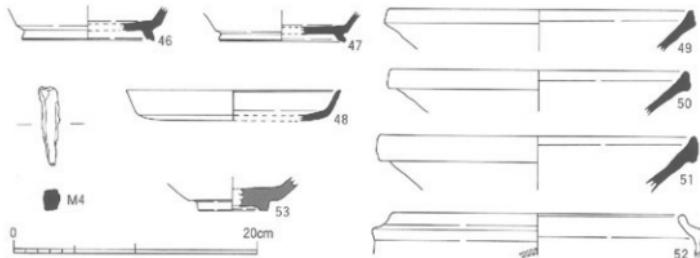
須恵器の46・47は杯B底部の破片である。高台は外側に踏ん張り、接地面は内傾する。先端部を外に掲げた特徴があり、特に46は内面にわずかな凹みを有する。48の皿は平らな底部から短く直線的に外傾して立ち上がる体部を持つ。底部と体部の境はやや丸みを帯びる。内面および体部は回転ナデ調整を施す。これらは奈良～平安時代にかけての須恵器と考えられる。一方、49・50・51は東播系須恵器の捏鉢で、いずれも口縁部の拡張は弱く、わずかに下方に肥厚する。50は下方へ肥厚し、断面が三角形を呈する。内面には浅い凹みを有する。51は上下に拡張し、内面に浅い凹みを持つ。13世紀～14世紀前半のものと考えられる。

土師器の52は羽釜形の土鍋である。口縁部は内傾し、外面にナデによる断面三角形の鉛を形成する。体部外面には細い右上がりの叩きが残る。15世紀代の土器である。

施釉陶器は、53の青磁碗がある。体部内面に施文を認め、高台裏から疊付けまで全面にかかる釉薬は内外面ともに厚い。高台裏に砂目を認める。14世紀後半～15世紀代の土器である。

金属製品には、鉄釘(M4)と銅錢(M5)がある。M4は先端部を欠損するが、残存長3.2cmで、軸断面が方形を呈する。M5の銅錢は「治平元寶」で、2つに割れている。一方は、A地区の包含層から、もう一方はA地区の溝SD01から出土した。

石器は、サスカイト製の石匙(S1)がある。全長5.4cm、最大幅3.5cm、厚さ0.6cmの縱長の石匙で、B地区の包含層から出土した。



第59図 C・D・F地区出土遺物

第8表 出土土器観察表(3)

No.	地質	器種	地区	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存状況	色	質	達成	地	土	電考	測定	回数
46	須恵器	杯	C地区	溝状遺跡	—	16.80	—	底面わずか	灰	灰	良好	—	—	—	—	18
47	須恵器	杯	B地区	区画相	—	10.00	—	底面わずか	灰	良好	—	—	—	—	—	18
48	須恵器	皿	C地区	溝状遺跡	17.60	2.50	15.80	1/10	灰白	やや粗	難點少ない	—	—	—	—	18
49	須恵器	捏鉢	F地区	匂合層	25.00	—	—	口縁部欠か	灰	良好	難點少ない	—	—	—	—	18
50	須恵器	捏鉢	F地区	匂合層	24.40	—	—	口縁部欠か	灰	良好	難點少ない	—	—	—	—	18
51	須恵器	捏鉢	C地区	匂合層	26.00	—	—	口縁部欠か	灰	良好	—	—	—	—	18	
52	土師器	土鍋	F地区	匂合層	23.90	—	—	口縁部欠か	黄褐	良好	1m大的石窓・長石・クサで隕少結合	羽面形窓	—	—	—	18
53	青磁	碗	C地区	匂合層	—	—	—	底面欠か	灰	良好	—	—	—	—	—	18

第3章 調査の成果

4. 市教委（H・I・J地区）の調査

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序

H・I地区の基本層序は、旧耕土層・淡灰褐色砂質シルト・灰黄褐色砂質シルト（基盤層）で、基盤層はI地区からH地区に向かって次第に下り勾配を有する。J地区は、県教委調査区と同じである。

(2) 遺構と遺物

概要（写真図版18）

H・J地区で土坑・溝・柱穴などを検出した。いずれも中世の遺構と考えられる。

H地区の遺構（第62図）

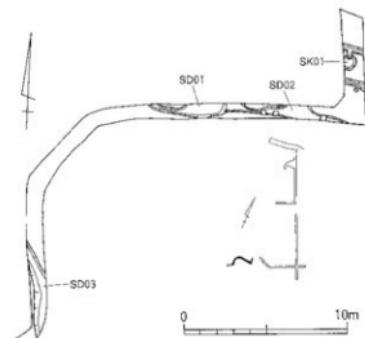
土坑（SK01・SK02）、柱穴等の遺構を検出した。SK01からは土師器の小片3片が出土した。SK02からは土師器・瓦器・黒色土器の小片合わせて6点出土した。

J地区の遺構（第60図）

土坑（SK01）、溝（SD01～03）、柱穴4基を検出した。いずれの遺構も調査区が狭小なため、規模は不明である。SK01からは土師器の小片4片、SD01からは土師器・瓦器十数点、SD02からは土師器2点、SD03からは須恵器・土師器・瓦器十数点が出土した。SD03出土土師器皿の底部に糸切り痕を有するものがある。

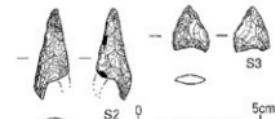
(3) その他

各地区包含層出土遺物は中世の土器片を主体とするが、いずれも小片で固化できるものは少ない。ここでは、H地区包含層出土の石器を図化した。

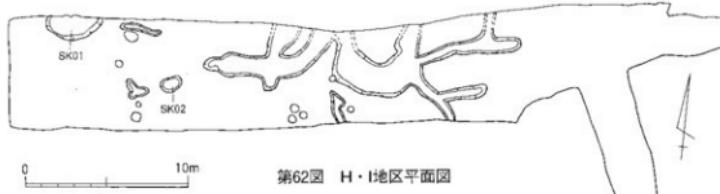


第60図 J地区平面図

石器は、サヌカイト製の打製石鎌（S2・S3）がある。S2は、基部中央を大きく抉る凹型式の石鎌で、基部の片方を欠く。全長3.7cm、最大幅1.3cm、重さ1.2gである。S3は基部中央をわずかに抉り、両端は丸みを帯びる。全長1.9cm、最大幅1.5cm、重さ0.8gの小型の石鎌である。いずれもH地区的遺物包含層から出土した。



第61図 H地区出土石器



第62図 H・I地区平面図

第3節 宇和田遺跡

1. 遺跡の概要

(1) 遺跡の位置

山田盆地の東側、山田川右岸に位置する（第5図）。白生遺跡の南側、狹間遺跡の東側にあたる。当遺跡東側の小谷から山田川に向ってのシートバー堆積により形成された、小扇状地上に立地している。

(2) 調査の概要

兵庫県教育委員会は、山田川改修に係る箇所（D地区）を、市教育委員会は水路工事に関わる箇所（A～C地区）を、調査対象とした（第63図）。県教委が調査した地区は、宇和田遺跡のなかでも南西端にあたる。市教委が調査した地区は、より遺跡の中心に近い場所である。

2. 県教委の調査

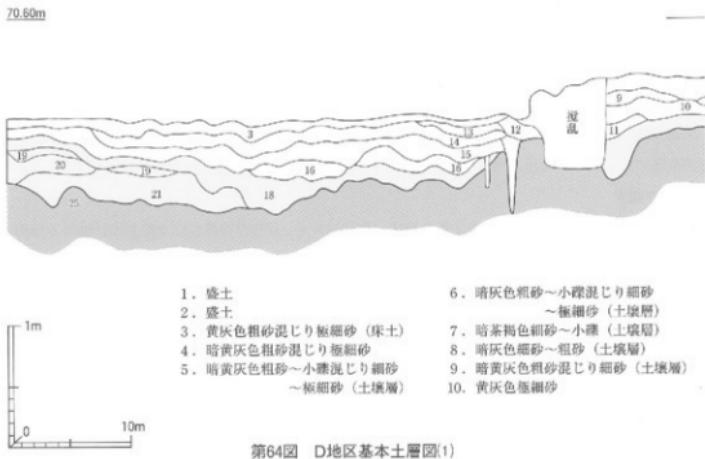
(1) 基本層序と構造の検出

基本層序

大きく、盛土層・床土層・洪水堆積層・顕著な土壤層・基盤層の層序が認められた（第64・66図）。



第63図 調査位置図



第64図 D地区基本土層図(1)

調査区は、東側から山田川に向って張出す小扇状地上に立地する。このため、基盤層は調査区中央やや東側が最も高く、その南側・北側へ傾斜している。また、床土層・洪水堆積層・包含層が北側・南側に大きく堆積していた。

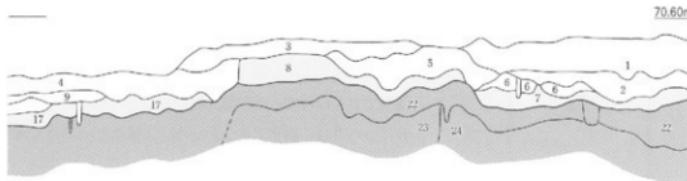
盛土層（1層・2層）は、調査区東側で認められた。堆積が十分でなく山田川に向って大きく落ち込んでいる地区を平坦化し、水田を造成するために埋め立てた層と考えられる。床土層（3層）は、調査区ほぼ全域で認められた。調査以前に耕作土を除去したため、当層が最上層となっている。洪水堆積層（4層～6層・9層～16層）は、東側に小谷からの土石流により堆積したものである。少なくとも5・6回の堆積が認められる。また、各層とも堆積後土壤化しており、各土石流が連続するものではなかつたと考えられる。顯著な土壤層（7層・8層・17層～21層）についても、基本的に洪水堆積層である。顯著に土壤化しており、この下面で遺構を検出した。調査では遺物包含層として扱った層である。基盤層（22層～25層）は、基本的に細砂・粗砂を基本とした真砂で構成される層である。

遺構の検出

遺構は、基盤層上面の1面で検出している。層位的には2面で遺構が認められるが、検出技術の問題から、1面で検出したものである。



第65図 SK01内土器検出作業



- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| 11. 黄灰色粗砂混じり細砂 | 19. 暗灰色棕細砂（土壤層） |
| 12. 盛土。 | 20. 暗灰色シルト質極細砂（土壤層） |
| 13. 黄灰色極細砂～細砂（土壤層） | 21. 黄灰色粗砂混じり細砂質シルト（土壤層） |
| 14. 暗黃灰色シルト～細砂（洪流水層） | 22. 淡黃灰色細砂～小礫混じり細砂（基盤層・洪流水層） |
| 15. 暗灰色小礫混じりシルト質極細砂（土壤層） | 23. 黄灰色小礫混じり細砂～粗砂（基盤層・洪流水層） |
| 16. 暗黃灰色シルト混じり細砂（洪流水層・土壤層） | 24. 黄灰色棕細砂（基盤層・洪流水層） |
| 17. 暗黃灰色細砂（土壤層） | 25. 明黃灰色中礫混じり細砂（基盤層） |
| 18. 暗灰色シルト混じり極細砂（土壤層） | |

第66図 D地区基本土層図(2)

(2) 検出遺構

概要 (写真図版19~21) 挖立柱建物跡・柱穴・土坑・溝を検出している (第68図)。

掘立柱建物跡 2棟検出した (SB01・SB02)。

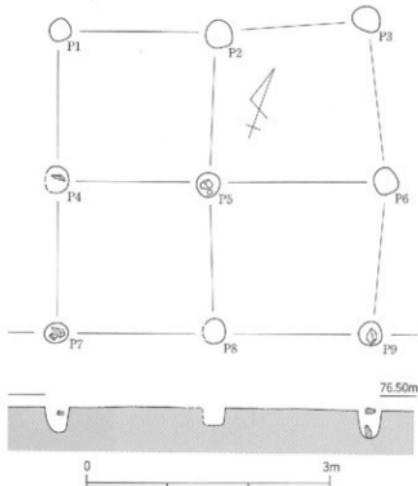
SB01 (写真図版22)

調査区北部で検出した (第68図)。2間×2間の純柱建物である (第67図)。建物の規模は、西側で3.75m、南側で3.90mを測り、これを基準とした面積は14.60 m²である。西側柱穴間の距離はP1-P4間で1.85m、P4-P7間で1.90mである。南側の柱穴間距離は、P7-P8間・P8-P9間ともに1.95mである。P1-P7を基準とした棟軸方向は、N20° 00' Wである。

柱穴の平面形は円形を基本とし、その径は25cm~32cmを測り、検出面からの深さは22cm~33cmである。いずれの柱穴においても柱痕を確認することはできなかったが、P4・P5・P7・P9で、柱抜き取り後に角礫が埋められていた。

遺物は、土師器・須恵器・瓦器の各器種が出土しているが、同化できたのは土師器に限られる (第76図)。須恵器は捏鉢と甕の小片が、瓦器は甕の小片が出土している。土師器は、壺・杯・皿が出土している。壺(1)は、三足壺の脚部が出土している。

杯も2の1個体が出土している。いずれも口径が8.5cm以下の小型に分類できるものである。磨滅が著しく、全体の調整等は



第67図 SB01



第68図 D地区平面図

観察できない。皿は3~7の5個体出土しているが、底部の切り離しがヘラ切りによるもの(3・7)と回転糸切りによるもの(4・5)とに分類できる。6については、ナデ調整痕を観察できるのみで、ヘラ切りによるのか回転糸切りによるのかについては、観察できなかった。口縁部はいずれも回転ナデ調整により仕上げられている。

他に、P3から皇宋通宝が1点(M8)出土している(第79図)。1039年初鑄の北宋銭で、字体は真書を用いたものである。

これらの土器から、中世Ⅱ期に位置付けられる。

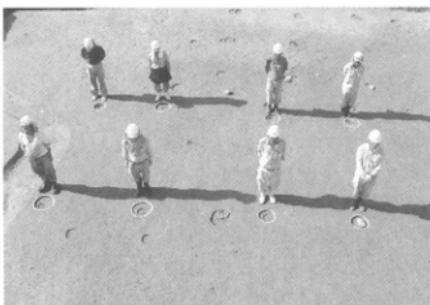
SB02 (写真図版22・23)

調査区北部で検出した(第68図)。SB01の南側に位置する。東西方向に棟軸方向をとる1間×3間の側柱建物である(第70図)。北桁行の柱並びがわずかに歪んでいる。

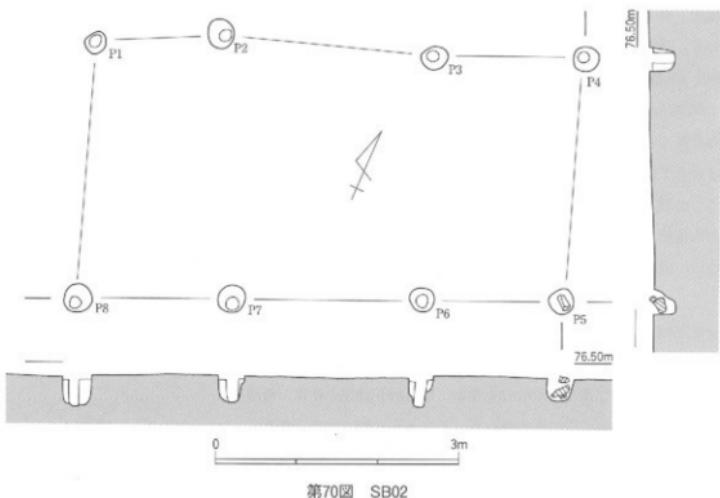
建物の規模は、南桁行で6.00m、東梁行で3.00mを測り、両者をもとにした平面積は18.00 m²である。南桁行における柱穴間の距離は、P5-P6間で1.70m、P6-P7間で2.35m、P7-P8間で1.95mである。P5-P8の直角方向を基準とした棟軸方向は、N23°00' Wである。

柱穴の平面形は円形を基本とし、その径は26cm~34cmを測り、検出面からの深さは28cm~36cmである。いずれの柱穴においても柱痕を確認することはできなかったが、P5を除いては柱痕を確認することができ、その径は12cm~15cmを測る。また、P5では柱抜き取り後に角礫が埋められていた。

遺物は、土師器の小皿の口縁部片と須恵器の壺の体部片が出土しているのみで、小片のため固化できなかった。これから時期の特定は困難であるが、SB01と棟軸方向を同じく



第69図 SB02近景



第70図 SB02

することから、中世Ⅱ期と考えられる。

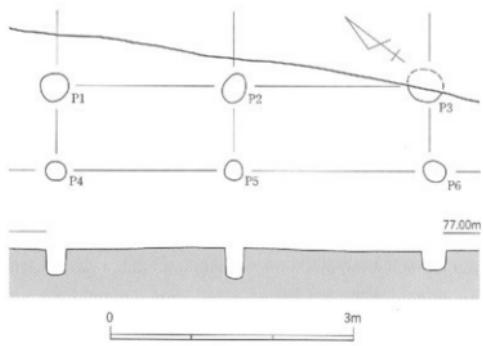
SB03（写真図版23）

調査区中央部東端で検出した（第68図）。SD02の南側に位置する。南北方向に棟軸方向をとる純柱建物で、1間×2間分を検出した（第71図）。

建物の大半は調査区東側に抜がっているものと考えられる。建物の規模は、西桁行で4.65mを測り、柱穴間の距離はP4-P5間で2.20m、P5-P6間で2.45mであるまた、梁行の柱穴間距離は、P1-P4間が11.05m、P3-P6間が1.00mと、桁行と比較して極端に短くなっている。P4-P6の直角方向を基準とした棟軸方向は、N37°00'Wを示す。

柱穴の平面形は円形を基本とし、その径は22cm～35cmを測り、検出面からの深さは23cm～39cmである。いずれの柱穴においても柱痕を確認することはできなかつた。

遺物は、土師器の小皿の口縁部片が出土しているのみで、小片のため図化できなかつた。この土器から、中世と考えられるが、時期の特定は困難である。



第71図 SB03

柱穴 約45穴検出した。このなかで、建物を構成する以外の柱穴で、良好な遺物が出土して柱穴について、遺物を中心に報告する。

P01 (写真図版23)

調査区北東隅に位置する（第68図）。土師器の杯が1点（8）出土している（第76図）。底部には高台が貼り付けられず、回転糸切りにより切り離されている。体部から口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。この土器から、中世Ⅱ期と考えられる。

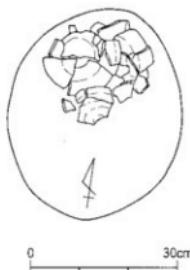
この他、鉄釘が4点（M1～M4）出土している（第80図）。いずれも断面方形をなす和釘である。その規模は3mm～5mmである。頭部が遺存するものに関しては、完全な頭巻形態をなすものは認められない。残存長は、M1が4.25cm、M2が4.20cm、M3が3.80cm、M4が3.80cmである。

土坑 10基以上検出したが、本項では遺物が出土した土坑（SK01～SK09）を中心に報告する。

SK01 (写真図版23)

当初柱穴として調査したのであるが、断ち割り調査の結果、検出面からの深さがわずかであったため、土坑として報告する。調査区北部で検出し、SB02の南桁行ライン上に位置する（第68図）。平面形は楕円形をなし、その規模は35cm×45cmを測る。検出面からの深さはわずか4cmである。

遺構内北側で土師器の杯が4個体（9～12：第76図）一括で出土している（第72図）。9を除いては底部が静止糸切りにより切り離されている。9については、ナデ調整により仕上げられているが、切り離し方法を確認することはできなかった。体部から口縁部にかけては、いずれも回転ナデ調整により仕上げられている。これらの土器から、中世Ⅱ期と考えられる。



第72図 SK01

SK02

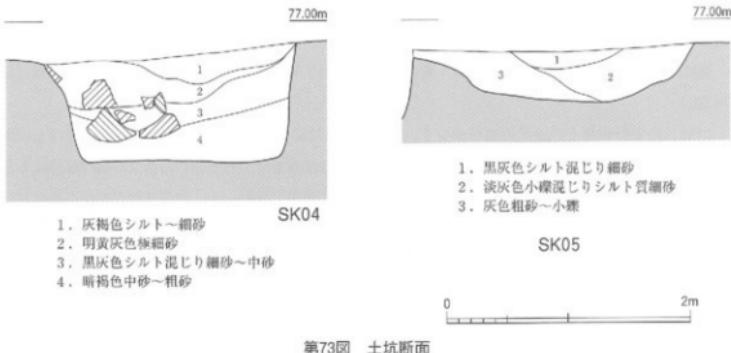
調査区中央部で検出した（第68図）。SD02の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。平面形は方形をなし、その規模は2m×1.75mを測る。横断面は箱形をなし、最深部における検出面からの深さは55cmである。埋土は、灰褐色シルト～粗砂が人為的に埋められていた。

遺構内からは、白磁の杯（13）が出土している（第76図）。斜めに立ち上がる体部から口縁は外反して開く。全体に器壁が薄く、墨付けは露胎である。肥前系で江戸時代後半（19世紀）のものと思われる。

SK03

調査区南部で検出した（第68図）。他の遺構との切り合い関係は認められない。平面形は円形をなし、その規模は1m×1.15mを測る。横断面は箱形をなし、最深部における検出面からの深さは30cmである。埋土は、灰褐色粗砂混じりシルトと灰色シルト混じり粗砂が人為的に埋められていた。底部に板が遺存し、断面にも板材の痕跡が認められたことから、埋め板と考えられる。

遺構内からは、白磁の杯（14）、染付磁器（15・16）、土師器小皿（17）、土師器焰烙（18）が出土している（第76図）。



第73図 土坑断面

14は、丸みを帯びて立ち上がる体部から口縁は外反して開く。全体に器壁が薄く、豊付けは露胎である。肥前系で江戸時代後半（19世紀前半）のものと考えられる。15は染付磁器の碗である。高い高台と斜めに伸びる体部を持つ廣東碗で、口縁端部は丸く、豊付けは露胎である。体部外面と内面見込み部に籠文を描き、内面見込み部と口縁部直下、外面体部下端に界線をめぐらせるが、呉須はにじんでいる。瀬戸美濃系で江戸時代後半（19世紀前半）のものと思われる。16は染付磁器の蓋である。体部は丸みを帯び、口縁端部は丸い。つまみ内側と体部外面に草花文を施し、天井部内面にも文様を施す。肥前系で江戸時代後半（18世紀後半から19世紀前半）のものと思われる。17は轆轤成形の土師小皿である。平底から斜めに開く口縁を持つ。底部は回転糸切りである。江戸時代後半（18世紀後半）以降のものと考えられる。18は浅い体部から屈曲して直立する口縁部を持つ土師質焰燭である。底部外面はヘラ削りを行っている。江戸時代後半（18世紀後半）のものと思われる。

これらの土器から、江戸時代後期と考えられる。

SK04

調査区南部で検出した（第68図）。SK05等と切り合い関係にあり、いずれの遺構をも切っている。平面形は円形をなし、その規模は径1.90mを測る。横断面は箱形をなし、最深部における検出面からの深さは96cmを測る。埋土は、4層からなるが（第73図）、いずれも人為的に埋め戻されたものである。

遺構内からは、染付磁器碗（20）、同筒形碗（21）が出土している（第76図）。20は、丸みを帯びて立ち上がる体部を持ち、口縁端部は丸い。体部外面に草花文を描き、高台側面に界線をめぐらせる。肥前系で江戸時代後半（18世紀後半）のものと思われる。21は、底部から直角に屈曲して立ち上がる体部を持ち、口縁端部は丸い。体部外面に草花文、底部外面も文様を描き、口縁部直下に界線をめぐらせる。肥前系で江戸時代後半（18世紀後半）のものと思われる。

これらの土器から、江戸時代後期と考えられる。

SK05

調査区南部で検出した（第68図）。SK04と切り合い関係にあり、SK04に切られている。平面形は方形をなし、その規模は一辺2.50mである。横断面は緩やかな逆台形をなし、最深部における検出面

第3章 調査の成果

からの深さは43cmを測る。埋土は、3層からなり（第73図）、最下層を除いては人為的に埋め戻されたものである。最下層は、洪水に起因する堆積である。

遺構内からは、無釉陶器の指鉢（19）・施釉陶器碗（22）・染付磁器碗（24・25）が出土している（第76図）。

19は、内面は体部と口縁部の境界がなく、口縁部中位で屈曲して上方に伸びる。口縁端部は上に面を持ち、そこに沈線を1条めぐらせ、幅広の側面にも2条沈線をめぐらせる。卸目は一部口縁部にも及び、6本単位で重なりを持って間隔なく引かれている。口縁部に回転ナデ、体部外面に回転ヘラケズリを施す。堺・明石産と考えられ、江戸時代後半（18世紀後半）のものである。

22は施釉陶器の碗である。丸みを帯びた体部を持ち、口縁部は微かに内彎する。上絵付けで籠文を描く。文様はほとんど剥落し、微かに緑色の釉が残っている。京焼系で江戸時代後半（19世紀）のものと思われる。

24は染付磁器の碗である。外側に踏ん張る高台を持ち、体部は丸みを帯びて立ち上がる。豊付けは薄く、露胎である。体部外面にはアジサイ、高台から底部外面に界線、内面には花菱文と界線を描く。肥前系で江戸時代後半（19世紀前半）のものと思われる。

25は染付磁器の碗である。外に踏ん張る高台を持ち、体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反気味に終わる。外面は底部付近の界線のほか、体部を4分割して文様を描き、残存部分には雨だれ文と草花文が施されている。内面には口縁部直下に界線を描き、見込み部にも界線と文様を描く。肥前系で江戸時代後半（19世紀前半）のものと思われる。

この土器から、江戸時代後期と考えられる。

SK06

調査区南部で検出した（第68図）。他の土坑と切り合い関係にあり、これに切られている。平面形は円形傾向の方形をなし、その規模は1.45m×1.40mを測る。横断面は箱形をなし、最深部における検出面からの深さは70cmである。埋土は、灰褐色シルト混じり粗砂と灰褐色粗砂混じりシルトが人為的に埋められていた。

遺構内からは、土製の焰烙（27）が出土している（第76図）。扁平で底部から垂直に体部が立ち上がる。口縁部から体部は横ナデ、底部外面はヘラケズリ、内面はナデを施している。江戸時代後半（18世紀後半）以降のものと考えられる。

この土器から、江戸時代後期と考えられる。

SK07

調査区南部で検出した（第68図）。他の土坑と切り合い関係にあり、これに切られている。平面形は円形をなし、その規模は径60cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは13cmである。埋土は、黒褐色粗砂混じり細砂が人為的に埋められていた。

遺構内からは、無釉陶器の壺（29）が出土している（第77図）。粘土紐を輪積し、外面は縱方向のナデ、内面は横方向のナデによって成形する。衛前焼で江戸時代のものと思われる。

この土器から、江戸時代と考えられる。

SK08

調査区南部で検出した（第68図）。他の土坑と切り合い関係にあるが、これを切っている。平面形は方形をなし、その規模は265m×315mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは23cmである。埋土は灰色粗砂混じりシルトが人為的に埋められていた。

遺構内からは、施釉陶器碗（23）・青磁香炉（26）が出土している（第76図）。23は施釉陶器碗である。高台内側も含め、全体に灰釉をかける。疊付けは露胎で砂が付着する。内面見込み部に蛇の目剥ぎがあり、それと重なるように砂目がある。唐津焼で江戸時代前半（17世紀後半から18世紀前半）のものと思われる。

26は青磁の香炉である。削り出し高台から屈曲して直立する体部を持ち、口縁部は内側に肥厚する。高台側面から口縁部内面まで施釉し、内面と底部外表面は露胎である。肥前系で18世紀代と思われる。これらの上器から、江戸時代後期と考えられる。

SK09

調査区南部で検出した（第68図）。他の土坑と切り合い関係にあるが、これを切っている。平面形は梢円形をなし、その規模は1.30m×1.60mを測る。横断面は箱形をなし、最深部における検出面からの深さは85cmである。埋土は、下から黒灰色シルト混じり黄灰色砂礫・灰色シルト混じり細砂・暗黃灰色シルト混じり細砂が人為的に埋められていた。断面観察の状況から、埋め桶と考えられる。

遺構内からは、無釉陶器の擂鉢（28）が出土している（第76図）。内面は体部と口縁部の境界に段があり、口縁部直下に沈線をめぐらせる。外面は口縁部下端を垂下させて幅広の面を作り、そこに沈線を2条めぐらせる。鉢目は8本単位で、一部を重複させて間隔なく引かれている。口縁部から体部にかけて回転ナデ調整を行う。堺・明石産と考えられ、江戸時代後半（19世紀前半）のものと思われる。

この土器から、江戸時代後期と考えられる。

SK10

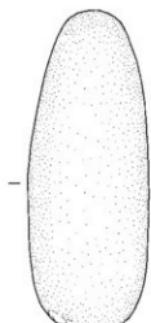
調査区南部で検出した（第68図）。SK03の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。平面形は円形をなし、その規模は径1.05mを測る。横断面は皿形をなし、検出面からの深さは14cmを測る。土坑内からは鉄釘が2点（M5・M6）出土している（第80図）。2点とも断面3mm～4mmの方形をなす和釘で、M5が4.30cm、M6が4.90cm残存する。いずれも頭部は遺存しない。土器が出土していないため、時期の特定は困難であるが、江戸時代と考えられる。

溝 9条検出しているが、ここでは遺物が出土した溝（SD01～SD03）を中心報告する。

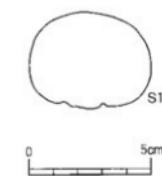
SD01

調査区北西部で検出した（第68図）。直線的にのびる溝であるが、く字形に屈曲している。北西端は調査区外へのび、他端は調査区内で収束している。検出した長さは、7.00mである。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは11cmである。底部の標高は75.28mで、ほぼ一定している。埋土は暗灰色細砂混じりシルト1層からなる。洪水により堆積し、土壤化した層と考えられる。

遺構内からは遺物が出土していない。このため時期の特定は困難である。



第74図 SD02出土石器



SD02

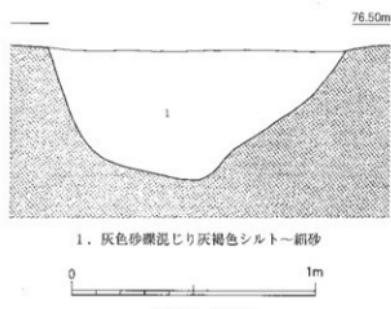
調査区中央部で検出した(第68図)。ほぼ直線的に東西方向にのびる溝で、両端とも調査区外へのびている。検出した長さは、14.50mである。横断面はやや歪んだ逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは55cmである。底部の標高は75.92m～75.66mで、西側へ傾斜している。埋土は1層からなり(第75図)。土石流に起因して埋没している。

遺構内からは無釉陶器の擂鉢(30)・半磁器(31)が出土している(第77図)。30は、内面は体部と口縁部の境界がなく、口縁部中位で屈曲して伸びる。口縁端部は内傾する面を持ち、そこに沈線を1条めぐらせ、幅広の側面にも2条沈線をめぐらせる。鉢目は一部口縁部に及び、6本単位で重なりを持つて間隔なく引かれている。口縁部に回転ナデ、体部外面に回転ヘラケズリを施す。堺・明石産と考えられ、江戸時代後半(18世紀後半)のものである。

31は半磁器である。全体に器壁が厚い作りで、高い高台を持つ。体部外面に文様を描き、口縁部直下及び高台側面に界線をめぐらせる。肥前系で江戸時代後半(18世紀後半)のものである。これらの土器から、江戸時代後期と考えられる。

この他、敲石(S1)が当遺構内から出土している(第74図)。棒状の亜円形を用いた敲石である。両端に敲打痕が明瞭に認められ、側面の一部に擦痕がある。全長13.15cm、幅4.98cm、厚さ4.25cmを測り、重量は282gである。ただし、この遺物に関しては、直接本遺構に伴うものではないものと考えられる。

第75図 SD02出土石器



1. 灰色砂礫混じり灰褐色シルト～細砂



第75図 SD02

からの深さは12cmである。底部の標高は76.29mで、ほぼ一定している。埋土は暗灰色シルト混じり極細砂～細砂1層からなり、層相から判断して人為的に埋められたものと考えられる。

遺構内からは遺物が出土していない。このため時期の特定は困難である。

(3) その他

当遺跡を検討する上で重要なと考えられる遺物が、いわゆる包含層から出土している(第77図・第78図)。主に、弥生時代・奈良時代・平安時代～鎌倉時代・江戸時代の土器が出土している。以下、その概要を時期ごとに報告する。

弥生時代の土器は、32の1個体に限られる。口縁部と体部の小片が出土しており、直接的な接合関

SD03

調査区中央部で検出した(第68図)。SD02の南側に位置する。ほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区外へのびている。検出した長さは、15.00mである。横断面は緩やかな逆台形をなし、最深部における検出面

係は認められないが、同一個体として報告する。

奈良時代の土器も、33の1個体に限られる。杯Bと考えられる。焼成が悪く、貼り付け高台で、体部は内縛気味に立ち上がる。体部外面は回転ヘラケズリのあと回転ナデ、内面は回転ナデを施す。奈良から平安時代のものと思われる。

平安時代～鎌倉時代の土器は、瓦器・土師器・須恵器が出土している。瓦器は、34の1個体である。和泉型の碗と考えられ、見込みにヘラミガキが施されている。また、断面台形をなす高台が貼り付けられている。土師器は皿と甕が出土している。皿は、35・36の2個体で、両個体とも静止糸切りにより切り離されている。甕は37の1個体で、長胴タイプに分類されるものと考えられる。内外面ともハケ調整により仕上げられている。須恵器は捏鉢が1個体(38)出土している。

江戸時代の土器は、擂鉢(39・40)・施釉陶器碗(41)・染付磁器碗(42・43)・青磁(44)・磁器猪口(45)・無釉陶器德利(46)が出土している。

39は無釉陶器の擂鉢である。口縁端部直下に1条の沈線と幅広のくぼみがある。外面は口縁部下端を肥厚させて幅広の面を作り、そこに沈線を2条めぐらせる。鉗目は11本単位で、一部を重複させて間隔なく引かれている。口縁部に回転ナデ、体部外面に回転ヘラケズリを施す。堺・明石産と考えられ、江戸時代後半(18世紀後半)のものである。

40は無釉陶器の擂鉢である。内面は体部と口縁部の境界に段がつき、口縁端部は内傾する面を持ち、そこに沈線を1条めぐらせる。幅広の口縁部側面に2条沈線をめぐらせる。鉗目は7本単位で重なりをもって間隔なく引かれている。堺・明石産で江戸時代後半(18世紀後半)のものと考えられる。

41は施釉陶器の碗である。体部内外面に灰緑色の釉が掛かる。内面見込み部に蛇の目釉剥ぎがあり、削り出し高台周辺は無釉である。京焼系で江戸時代後半(19世紀前半)のものと思われる。

42は陶胎染付の碗である。丸みを帯びたやや扁平な体部を持つ。内面見込み部に蛇の目釉剥ぎがあり、豊付けは露胎である。体部外面に呉須で草花文を描く。肥前(波佐見)産で江戸時代後半(18世紀後半)のものと考えられる。

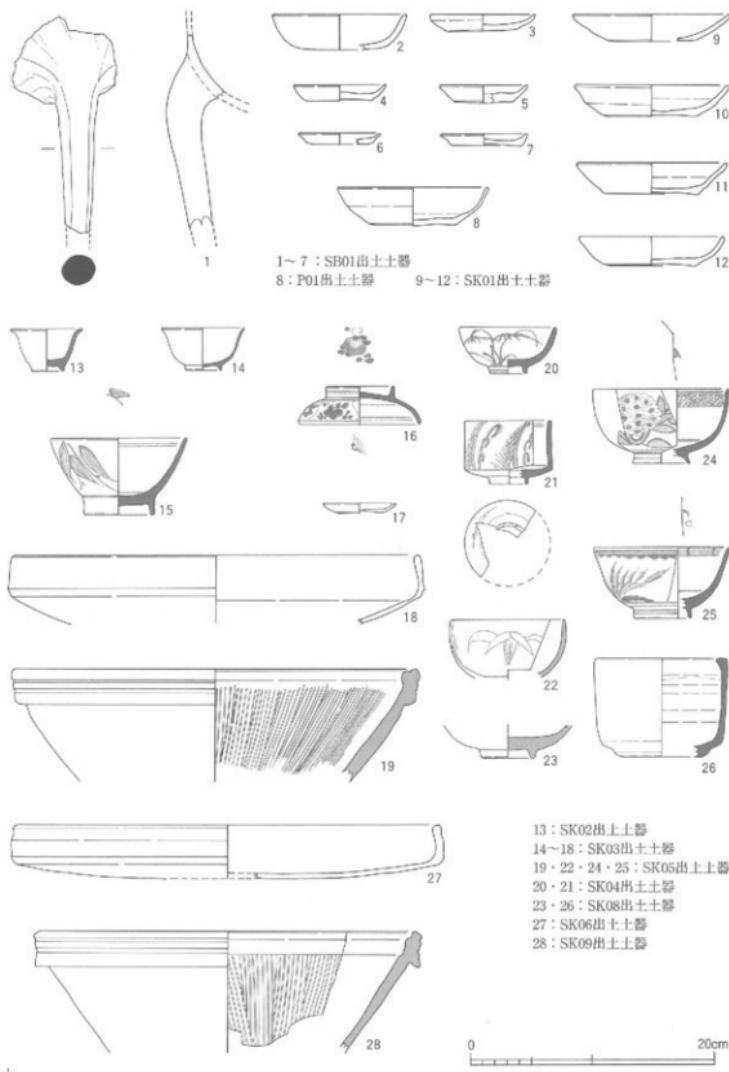
43は染付磁器の碗である。底部の器壁は厚く、体部は丸みを帯びて立ち上がる。口縁端部はとがり気味である。外面は体部に草花文、高台付近に界線をめぐらせ、内面見込み部には蛇の目状の文様を描く。肥前系で江戸時代後半(18世紀後半)のものと考えられる。

44は青磁碗の破片である。外面には蓮弁文を施している。瀬戸美濃産の龍泉窯写しで、室町時代後半(16世紀後半)のものと思われる。

45は染付青磁の猪口である。低い高台を持ち、体部は僅かに開きながら直立する。外面には青磁釉を施し、口縁部内面には花菱文を描き、見込み部には界線をめぐらせる。肥前系で江戸時代後半(18世紀後半)のものと考えられる。

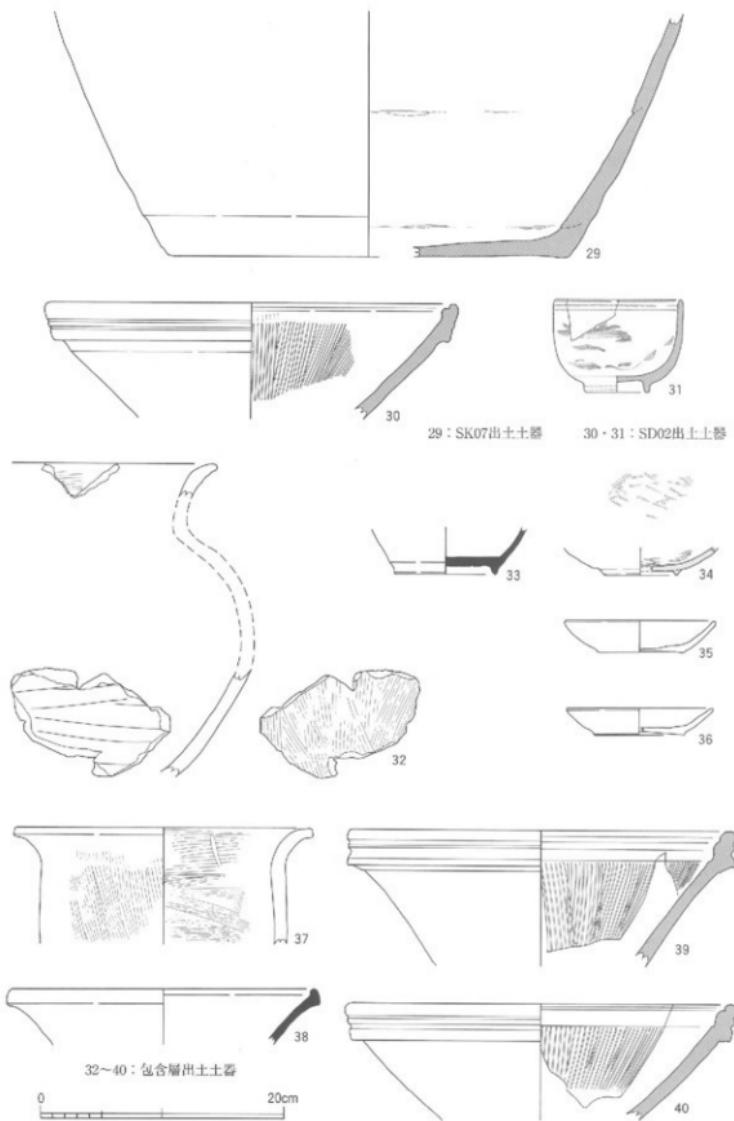
46は無釉陶器の德利である。平底から開いて立ち上がった体部中央を抑えてくぼませる。体部外面には鉄泥漿と塗布し、内面は露胎である。備前産で「べかんこ徳利」と呼ばれるもので、江戸時代後半(19世紀前半)のものと考えられる。

この他、鉄釘(M7)と寛永通宝(M9)が各1点出土している(第79図・第80図)。1636年初鑄の一文銭である。



第76図 D地区出土土器(1)

第3節 宇和田遺跡



第77図 D地区出土土器(2)

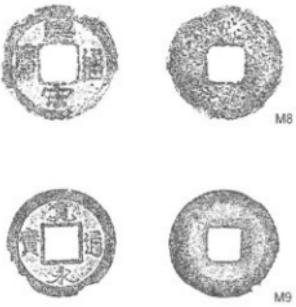


41~46：包含層出土土器

44

0 10cm

第78図 D地区出土土器(3)

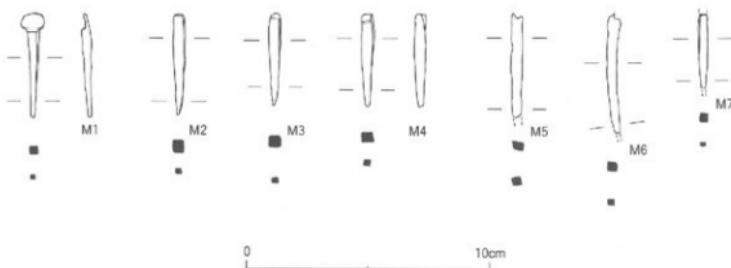


第79図 D地区出土銅銭

第9表 出土土器観察表(1)

No	種別	器種	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存状況	焼成
1	土師器	壺	SB01		17.56		足1本	
2	土師器	杯	SB01	10.80	2.95	6.40	1/4	
3	土師器	皿	SB01	8.50	1.40	5.90	1/2	
4	土師器	皿	SB01	7.50	1.30	5.40	口縁部1/4・底部3/4	
5	土師器	皿	SB01	7.10	1.45	4.90	1/2弱	
6	土師器	皿	SB01	6.70	0.90	4.55	1/6	
7	土師器	皿	SB01	6.90	1.00	5.90	口縁部1/8・底部1/4	
8	土師器	杯	P01	12.20	3.10	7.00	口縁部1/4・底部1/2	
9	土師器	杯	SK01	12.75	2.25	7.20	口縁部1/4・底部1/3	
10	土師器	杯	SK01	12.50	2.60	7.55	口縁部3/4・底部完存	
11	土師器	杯	SK01	12.20	2.55	7.80	口縁部2/5・底部完存	
12	土師器	杯	SK01	11.80	2.40	6.90	口縁部1/2弱・底部は完存	
13	白磁	杯	SK02	5.80	3.45	2.65	口縁部1/3・底部完存	
14	白磁	杯	SK03	6.75	3.50	2.95	口縁部2/5・底部完存	
15	染付磁器	碗	SK03	11.00	6.30	5.75	口縁部1/2弱・底部完存	
16	染付磁器	蓋	SK03	9.80	3.15		口縁部3/4・つまみ完存	

第3節 宇和田遺跡



第80図 D地区出土金属製品

色 調	胎 土	備 考	挿図	図版
にぶい黄橙	0.5~5mm人の石英・長石・クサリレキ含む		76	24
にぶい黄橙	0.5mm以下の長石・石英・クサリレキ・雲母含む		76	-
浅黄橙~にぶい橙	0.5~2mm大の長石・石英・チャート・クサリレキ多く含む	底部ヘラ切り	76	24
にぶい黄橙	0.5~1mm大の長石・石英・クサリレキ・雲母含む	底部回転糸切り	76	24
灰黄褐~にぶい橙	0.5~3mm大の長石・石英・雲母・クサリレキ多く含む	底部回転糸切り	76	24
明赤褐~浅黄橙	0.5~1.5mm大の長石・石英・チャート・クサリレキやや多く含む		76	-
浅黄橙	0.5~1mm大の長石・石英・クサリレキ含む	底部ヘラ切り	76	-
浅黄~灰	0.5~1.5mm大の長石・チャート・石英・雲母やや多く含む	底部回転糸切り	76	24
にぶい黄橙	0.5~1.5mm大の長石・クサリレキ・石英含む	化粧土塗布	76	-
にぶい黄橙~暗灰	0.5~3mm大の石英・長石・チャート・雲母含む	底部静止糸切り	76	24
にぶい黄橙	0.5~1mm大の長石・チャート・雲母含む	底部静止糸切り	76	24
にぶい黄橙	0.5~2mm大の長石・石英チャート・雲母多く含む	底部静止糸切り	76	25
灰白		高台高0.4cm	76	-
白		高台高0.45cm	76	25
白		高台高1.4cm	76	25
白			76	25

第10表 出土土器観察表(2)

No	種別	器種	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存状況	焼成
17	土師器	小皿	SK03	5.90	0.80	3.75	完存	
18	土師器	焙烙	SK03	33.00	5.60		口縁部1/5	
19	無釉陶器	擂鉢	SK05	33.10	9.30		口縁部1/4弱	
20	染付磁器	碗	SK04	7.80	3.75	3.00	口縁部2/5・底部1/2	
21	染付磁器	碗	SK04	6.95	5.15	3.20	口縁部1/2弱・底部わずか	
22	施釉陶器	碗	SK05	9.10	5.00		口縁部1/3	
23	施釉陶器	碗	SK08		2.80	4.40	底部完存	
24	染付磁器	碗	SK05	11.00	6.10	4.65	口縁部1/3・底部1/4	
25	染付磁器	碗	SK05	11.00	5.80	4.70	口縁部1/3・底部1/8	
26	青磁	香炉	SK08	10.20	8.10	7.80	口縁部1/6・底部1/3	
27	土師器	焙烙	SK06	34.40	4.40		口縁部1/6・底部わずか	
28	無釉陶器	擂鉢	SK09	30.80	10.00		口縁部1/5	
29	無釉陶器	甌	SK07		20.00	33.00	底部1/4	
30	無釉陶器	擂鉢	SD02	33.00	9.50		口縁部1/10	
31	半磁器	碗	SD02	10.15	7.60	5.25	口縁部1/2弱・底部完存	
32	弦生	甌	包含層	2.90			口縁部わずか・体部わずか	
33	須恵器	杯 B	包含層		3.80	8.45	底部完	やや不良
34	瓦器	椀	包含層		2.30	6.10	底部1/3	
35	土師器	皿	包含層	12.20	2.60	7.10	口縁部わずか・底部ほぼ完存	
36	土師器	皿	包含層	11.95	2.25	7.50	口縁部1/10・底部1/2弱	
37	土師器	甌	包含層	24.00	9.60		口縁部1/8	
38	須恵器	捏鉢	包含層	24.80	4.70		口縁部1/10	不良
39	無釉陶器	擂鉢	包含層	31.00	11.20		口縁部1/4弱	
40	無釉陶器	擂鉢	包含層	31.00	9.60		口縁部1/8	
41	施釉陶器	碗	包含層	12.40	4.45	4.40	口縁部1/10・底部1/3	
42	染付磁器	碗	包含層	11.10	4.70	4.70	口縁部1/6・底部ほぼ完存	
43	染付磁器	碗	包含層	10.20	5.20	4.25	口縁部1/4・底部完存	
44	青磁	碗	包含層		2.40		口縁部わずか	
45	染付磁器	猪口	包含層	8.00	6.20	5.50	口縁部1/6・底部1/4	
46	無釉陶器	德利	包含層		12.00	7.25	底部～体部1/4	

色調	胎土	備考	挿図	図版
にぶい橙～浅黄橙	0.5～1mm大の長石・チャート・クサリレキ含む		76	25
にぶい橙	0.5～1mm大の長石・石英・チャート・雲母含む		76	25
赤～橙		備前焼	76	—
白		高台高0.6cm	76	—
白		高台高0.5cm	76	25
灰白			76	—
灰・灰黄		高台高0.65cm	76	—
白		高台高0.85cm	76	—
白		高台高0.85cm	76	26
オリーブ灰			76	27
黒褐～灰黄褐			76	25
にぶい赤褐		堺・明石産	76	—
にぶい赤褐～褐灰		備前焼	77	—
灰褐		高台高0.7cm。堺・明石産	77	—
灰		高台高0.7cm	77	—
灰黄褐～にぶい黄 橙			77	27
灰		高台高0.7cm	77	27
淡黄～暗灰	0.5mm以下の石英・長石・チャート含む	外面暗文なし。高台高0.5mm	77	—
にぶい橙～黄灰	0.5～1.5mm大の石英・長石・チャート・雲母含む	底部静止糸切り	77	—
にぶい黄橙	0.5～3.5mm大の長石・チャート・石英・雲母含む	底部静止糸切り	77	—
にぶい橙		頸径20.0cm	77	—
灰白			77	—
にぶい赤褐～橙		堺・明石産	77	—
赤褐～にぶい赤橙		堺・明石産	77	26
灰オリーブ			78	26
灰～にぶい橙		高台高0.7cm	78	26
白			78	27
灰オリーブ			78	26
明緑灰			78	26
にぶい赤褐～にぶい 赤橙		腹径9.7cm・備前焼	78	26

3. 市教委（A・B地区）の調査

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序

調査区は、第51・52・53号水路が対象となる。第51・53号水路をA地区、第52号水路の内南北方向の調査区をB地区、東西方向の調査区をC地区とした。ここではA・B地区の調査について報告する。

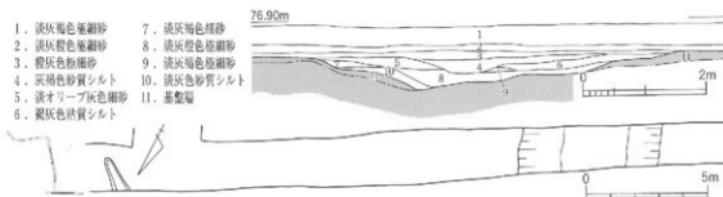
A地区の基本層序は、約40～50cmの旧耕作土層直下で基盤層である淡褐色細砂層を検出す。一方、B地区は約20～30cmの旧耕作土下に淡灰オリーブ色砂質シルト層・淡褐色細砂層の順となり、淡灰オリーブ色砂質シルトからは土器類などの遺物が出土する。

遺構の検出

A地区では中央部で調査区を横切る溝状の落ち込みを確認したほかは、遺構は検出できなかった。B地区では、中央部に遺構が集中する箇所を確認した。遺構は、淡灰オリーブ色砂質シルト層上面と淡褐色細砂層上面の2面で検出した。いずれも、中世以降の遺構である。



第81図 A・B地区平面図及びB地区西壁土層図



第82図 A地区平面図及びSD01土層図

(2) 遺構と遺物

概要

A地区で、溝状の落ち込み（SD01）、B地区で、土坑・溝・柱穴多数を検出したが、調査区が狭小なため遺構の全容は不明である。B地区の上層遺構として土坑1基（SK01）、溝9条（SD02～08）、柱穴約50基を検出した。一方、下層遺構としては溝3条・柱穴約60基を検出した。

溝 B地区を横切る形で検出した溝の大半は、いずれも北東から南西方向に伸びるほぼ同じ方位を示す。SD01（第82図）

検出面での最大幅が6.18mで、最深部における検出面からの深さは56cmを測る。両肩の落ちはながらかで、底の形状は不整形である。埋土は、粒子の細かい砂とシルトが堆積している。形状から、人為的な溝の可能性は低い。遺物はほとんど出土していない。

SD02（第84図）

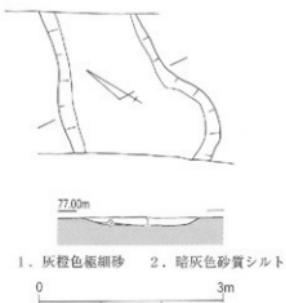
検出面での最大幅1.65m、最深部における検出面からの深さは39cmを測る。埋土は灰色シルトと暗灰色砂質シルトの2層に分かれている。

遺構内からは、土師器片などが出土したが、その数は少ない。

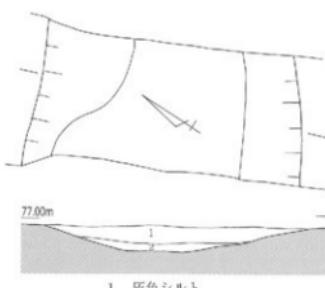
SD03（第83図）

やや不整形な形状を呈する溝で、検出面での幅は1.45m～2.34mを測る。最大深度は14cmで、底は平坦に近い。埋土は、底の一部に暗灰色砂質シルトの堆積を認めるが、大半は灰橙色極細砂である。

土師器片の皿や瓦器片などが出土した。内、土師器皿3点（47・48・51）を図化した（第86図）。

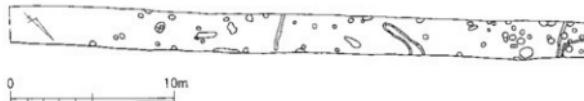


第83図 SD03



第84図 SD02

第3章 調査の成果



第85図 B地区下層遺構平面図

47・48は平底の比較的大きな底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。底部には糸切り痕が残る。51も平底の底部で、外面に糸切り痕が残る。いずれもロクロ成形による土師器皿である。

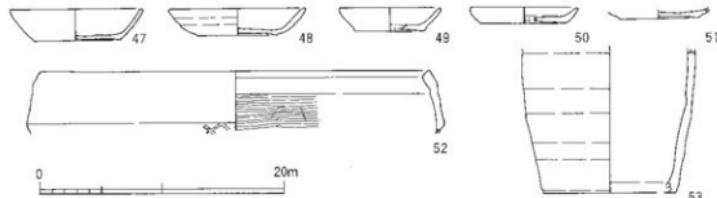
B地区下層遺構（第85図）

中世の遺物を含む淡灰オーリーブ色砂質シルト層下で検出した遺構で、溝・ビット約60基があるが、調査区が狭小なため、建物跡等の検出には至らなかった。これら遺構も中世の遺構と考えられる。

(3) その他

B地区の包含層などからは中世～近世の土器片が出土したが、小片化したものが多い。土師器・須恵器・瓦器・陶磁器類がある。その内、土師器4点（49・50・52・53）を図化した。

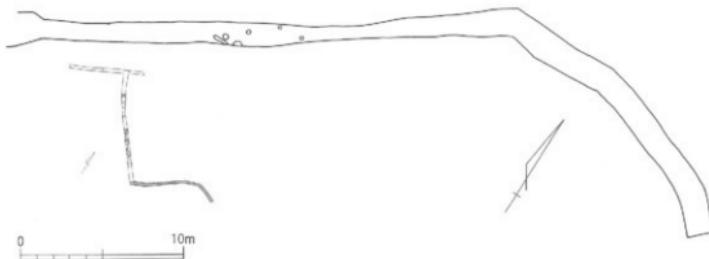
49は平底の底部から内湾気味に立ち上がる体部で、底部外面には糸切り痕を残す。口縁端部の一部にススの付着を認めることから、灯明皿として使用された可能性がある。50は平底の底部から短く立ち上がる口縁部を有する皿で、底部の切り離し痕跡は観察不能である。いずれもロクロ成形の土師器である。52は土築の口縁部で、やや内傾する口縁は内外面ヨコナナデ調整、体部内面には横方向のハケ調整、外面は粗い格子叩き目を残す。外面にはススが付着する。53は平底の底部から直角に屈曲し、内湾気味に立ち上がる体部を持つ壺である。内外面ともに回転ナナデ調整で、焼きは硬い。蛸壺の可能性がある。



第86図 B地区出土土器

第11表 出土土器観察表(3)

no	種別	器種	地区	遺構名	口径(cm)	基底(cm)	底径(cm)	現存状況	色 調	焼成	胎 土	参考	牌記	図版
47	土師器	皿	B地区	SD03	10.80	2.60	7.00	80%残存 に古い赤鉄	良好 良好	1mm大石英・黄石多量、赤青母少量 含む	脚止系切	86	28	
48	土師器	皿	B地区	SD03	11.20	2.20	6.50	80%残存 に古い赤鉄	良好	1mm大石英・黄石・金青母少量含む	脚止系切	86	28	
49	土師器	皿	B地区	包含層	8.40	1.90	7.80	40%残存 に古い粗	良好	浮軟少なく、金青母多量に含む	脚止系切、右 羽里?	86	28	
50	土師器	皿	B地区	P06	8.60	1.30	7.30	1/4残存 付	良好	浮軟少なく、金青母・クサリ繊少 量含む	86	28		
51	土師器	皿	B地区	SD03			6.40	底部70% に古い黄鉄	良好	1mmの石英・黄石、クサリ繊、金 青母少量	脚止系切	86	28	
52	土師器	土鍋	B地区	包含層	32.00			口縁辺わずか に古い粗	良好	クサリ繊多量含む	外腹ス付着	86	28	
53	土師器	壺	B地区	P01			10.80	削削1/4 洗痕	良好	3mm大チャート粒、黄石クサリ繊多 量含む	縦巻か?	86	28	



第87図 C地区平面図

4. 市教委（C地区）の調査

(1) 基本層序と遺構の検出

盛土・旧耕作土・黄灰色板細砂・浅黄色砂質シルト（基盤層）を基本とし、基本地形の微起伏に伴い各層位の厚さは地点によって異なる。黄灰色板細砂からは中世～近世の土器片が出土した。

(2) 遺構と遺物

概要

調査区中央部で、溝1条・柱穴7基を検出した。いずれも、中世～近世の遺構と考えられる。

溝

溝は、検出面での最大幅20.0cm、深さ7.2cmの小規模なもので、遺物は出土しなかった。

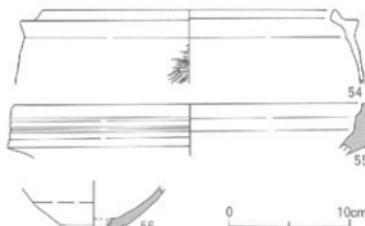
柱穴

検出した柱穴の平面形は円形を基本とし、直径は50cmを測る1基を除けば30cm以下の小規模なものが大半である。しかし、深さは30cm以上のしっかりと掘ったものが多く、柱痕は認められないが、建物柱穴の可能性もある。

(3) その他

包含層出土遺物は中世～近世の土器片を主体とするが、いずれも小片で図化できるものは少ない。ここで、土師器（54）・国産陶器（55）・施釉陶器（56）を図化した。

54は羽釜形の土鍋である。口縁部は内傾し、外面にナデによる断面三角形の鋤を形成する。内面はナデによる凹みが残り、体部外面には細い叩きが残る。55は備前焼の擂鉢の口縁部で、16世紀頃と想定できる。56は瀬戸の灰釉平底底部で、高台を浅く削り出す。体部過半以下は露台となる。15世紀後半頃の時期が与えられる。



第88図 C地区出土土器

第12表 出土土器観察表(4)

No.	種類	形様	地区	遺構名	口径(φ)×(底面)×(厚さ)(cm)	当面状況	色	質感	胎土	陶器	焼成	焼成
54	土鍋	口縁	C地区	跡山東上	24.00	口縁のみ露出	白	粗	火照	火照	85	95
55	備前焼	口縁	C地区	跡山東上	79.00	口縁のみ露出	灰	滑	火照	火照	85	25
56	施釉陶器	底	C地区	跡山東上	4.40	軋出	白	滑	火照	火照	85	95

第4節 大歳遺跡

1. 遺跡の概要

(1) 遺跡の位置

山田盆地の南側、山田川左岸に位置する（第5図）。狹間遺跡の南東側、宇和田遺跡の南側にあたる。当遺跡南側にある丘陵斜面から北側に張り出す微高地の先端部にかけて立地している。北側は山田川に向って大きく落ち込んでいる。

(2) 調査の概要（写真図版30）

兵庫県教育委員会は、水田造成のための削平地を対象とし、2地区（C地区・D地区）において調査を実施した。市教育委員会は水路掘削地（A地区・B地区）を、調査対象とした（第89図）。県教委調査のC地区は大歳遺跡の北端部、D地区は南端部にあたる。市教委が調査した地区は、南東部にあたる。県教育委員会の調査面積は828 m²、市教育委員会の調査面積は352 m²である。



第89図 調査位置図

2. 県教委の調査

I : C 地区の調査

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序

上から、耕作土・床土層・土壤層・基盤層の層序が認められた（第91図）。1層から3層までが床土層に相当するもので、耕作土が埋没後に床土層となるパターンを繰り返して形成された層である。1層については、明らかに整地により形成された層である。2層・3層については、南側から流れ込み堆積した層が水田化したものと考えられる。

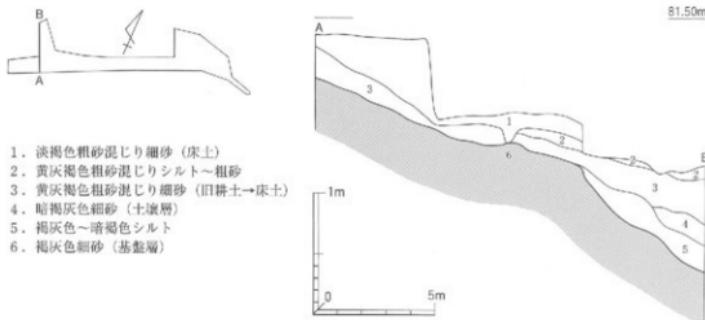
土壤層は4層と5層が該当する。両層は、山田川により段丘化した後に堆積した層と考えられる。このため、湿地性の堆積層となっている。具体的には、調査区南側からの流れ込みにより堆積している。わずかではあるが土器が包含されていた。6層が基盤層で、この上面で遺構を検出している。なお、3層・5層とも、6層が土壤化した層ではないものと判断している。

遺構の検出

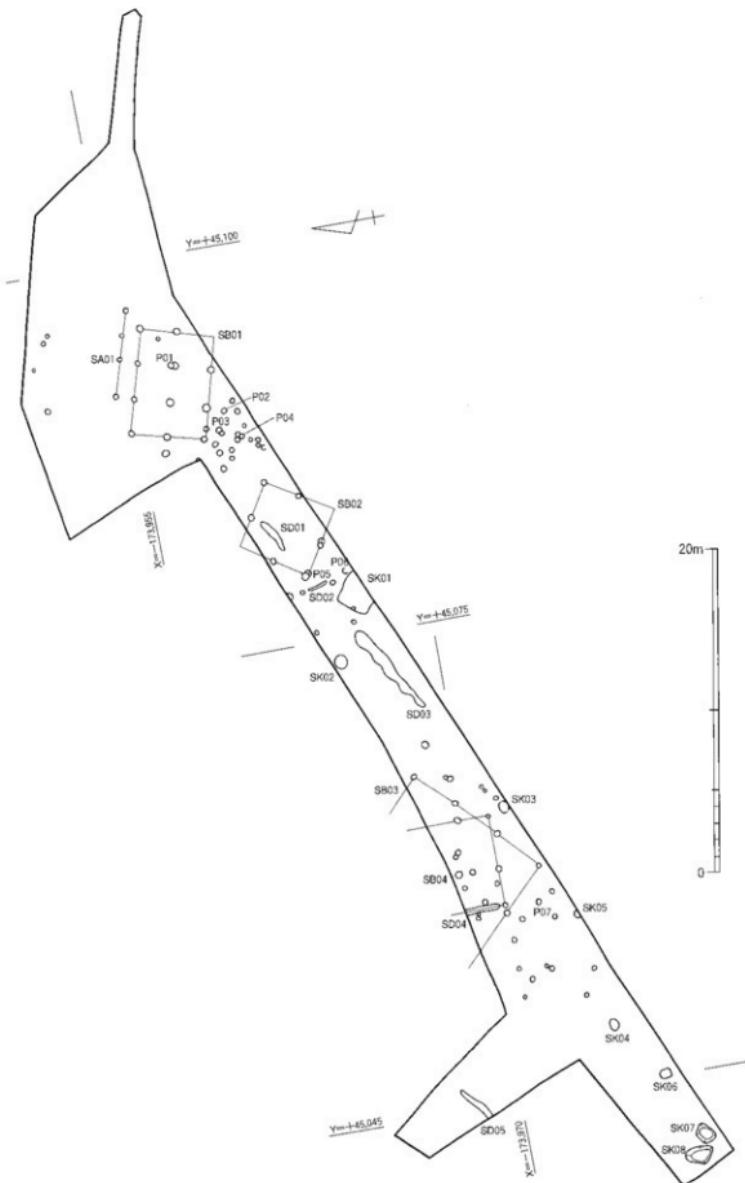
遺構は、6層上面の1面で検出している。遺構面は平坦ではなく、南から北方向に低くなっている。その標高は、南側で81.00m、北端部で77.30mと、南北間の比高が顕著である。



第90図 作業風景



第91図 C地区基本土層図



第92図 C地区平面図

(2) 遺構と遺物

概要(写真図版31・32) 挖立柱建物跡・柱穴・縫・土坑・溝を検出している(第92図)。

挖立柱建物跡 4棟検出した(SB01～SB04)。

SB01(写真図版33)

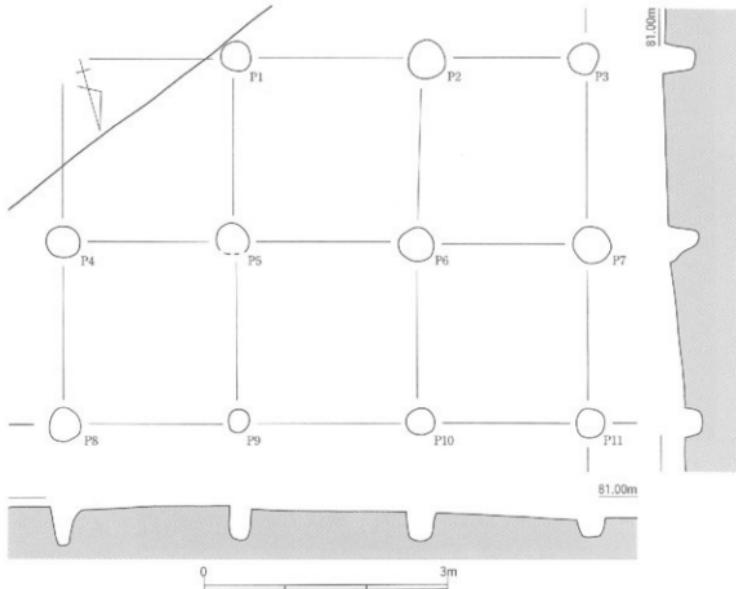
調査区東部で検出した(第92図)。SB02の東側に位置する。東西方向に3間、南北方向に2間の総柱建物である(第93図)。ただし、北西隅の1穴は調査区外にあたり未検出である。P5が柱穴に切られている以外は、他の遺構との切り合い関係は認められない。

建物の規模は、北桁行で6.50m、西梁行で4.45mを測り、復元される面積は28.92m²である。北桁行での柱穴間の距離は、P8-P9間で2.15m、P9-P10間で2.25m、P10-P11間で2.10mを測る。西梁行の柱穴間距離は、P3-P7間で2.30m、P7-P11間で2.15mを測る。また、P1-P9を基準とした棟軸方向は、N15°00' Eを示す。

柱穴の平面形は円形もしくは梢円形をなし、その径は23cm～44cmである。検出面からの深さは、23cm～48cmである。埋土は、いずれも暗灰褐色細砂と黄褐色細砂が入り混じった埋め土で、いずれの柱穴においても柱痕を確認することはできなかった。

遺物は、土師器・須恵器・瓦器・青磁・白磁の各器種が出土している。土師器は、P2・P4・P9から小皿が、P6から高台付の碗が出土している。このなかで図化できたのは、P4出土の小皿1点(4)である(第104図)。口縁部はヨコナデ調整により仕上げられている。

須恵器は、いわゆる東播系の須恵器が出土している。P2から壺の体部片が、P9から碗の口縁部片が



第93図 SB01

出土している。いずれも小片のため固化できなかった。

瓦器は、P1～P4・P6・P7から碗が出土している。このなかで固化できたのは、P2出土の1とP6出土の3の2点である。1は和泉型の瓦器碗で、底部に高さ2mmの高台が貼り付けられている。暗文は内面にわずかに認められるのみである。3も和泉型と考えられるが、暗文等は観察できない。他に、P4から出土した碗の内面には暗文が密に施されている。他の碗についても、暗文は内面のみである。

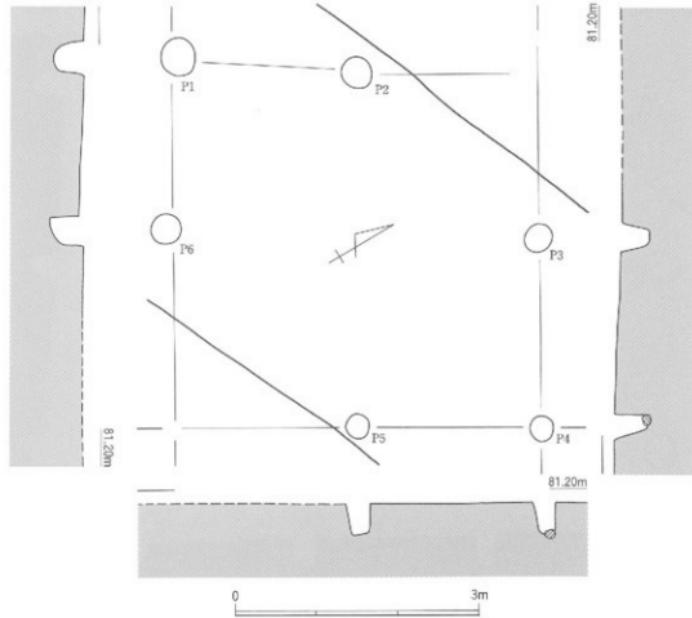
青磁は、P3から1点(2)出土している(第104図)。龍泉窯系の無文碗である。白磁は、P4から、IV類に分類される碗が出土している。

時期は、出土土器から中世I期と考えられる。

SB02(写真図版34)

調査区中央部で検出した(第92図)。SB01の西側に位置する。2間×2間の側柱建物である(第94図)。ただし、北隣と南隣の柱穴は調査区外にあたり未検出である。このため、建物の規模を確実に把握することは困難である。また、P1とP6が柱穴と切り合い関係にあるが、いずれも柱穴を切っている。

先述したように、完全に検出できた梁行・桁行はない。柱穴間の距離は、P1-P2間で2.25m、P3-P4間で2.35m、P4-P5間で2.30m、P1-P6間で2.20mを測る。これらの柱穴間距離から、約4.50m×4.50m、面積20.25m²の、梁行・桁行同規模の建物を復元することができる。P2-P5の直交方向を基準とした棟軸方向は、N31°00' Eを示す。



第94図 SB02

柱穴の平面形は円形もしくは梢円形をなし、その径は29cm~42cmである。検出面からの深さは、36cm~42cmである。埋土は、いずれも暗褐色粗砂混じり細砂が埋められており、いずれの柱穴においても柱痕を確認することはできなかった。なお、P4の底部には15cm大の円礫が置かれていた。

遺物は、土師器と瓦器が出土している(第104図)。土師器は、P1から杯(5)と小皿(7・8)が、P6から小皿が出土している。P6出土の小皿については小片のため図化できなかった。5の杯は、体部外面が指オサエの後ナデ調整により仕上げられ、口縁部内外面が弱いヨコナデ調整により仕上げられている。小皿の7と8は、いずれも手づくねにより成形され、最後に口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。また、8の内面には放射状の板ナデに伴う圧痕が認められ、粗い胎土である。

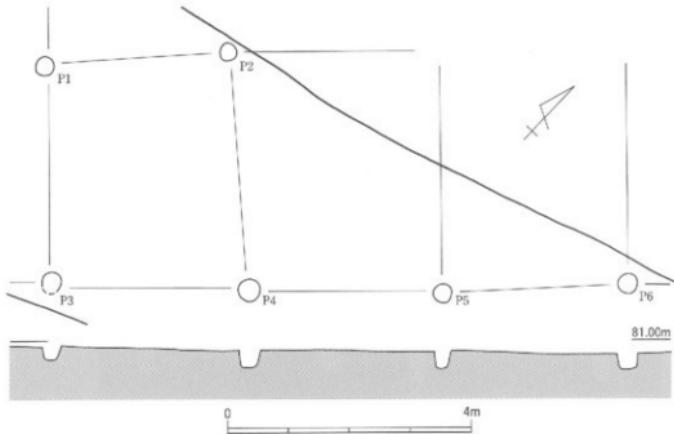
瓦器は、P1から椀と小皿が出土している。口縁部がヨコナデ調整により仕上げられているが、暗文を観察することはできなかった。椀については、内外面とも暗文が認められなかった。また、P5から椀(6)が出土している。体部をナデ調整後、口縁部内外面がヨコナデ調整により仕上げられている。体部内面にはナデ調整による凹線状の窪みが認められる。

時期は、出土土器から中世Ⅰ期と考えられる。

SB03(写真図版35)

調査区西部で検出した(第92図)。SB04と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。総柱建物で、北東-南西方向に3間、その直交方向に1間を検出した(第95図)。建物北部は調査区外にあたり、未検出である。さらに北西側に拡がっているものと考えられる。また、西側もしくは東側へ拡がる可能性も否定できない。P3-P6間を基準とした棟軸方向は、N45°30' Eを示す。

以上の状況から、建物全体の規模を把握することは困難である。北東-南西方向の規模は、P3-P4間で3.30m、P4-P5間で3.15m、P5-P6間で3.05mを測り、全体(P3-P6間)で9.50mである。また、P1-P3間の距離は3.50mである。



第95図 SB03

柱穴の平面形は円形を基本形とし、その径は30cm～35cmである。検出面からの深さは、20cm～30cmである。埋土は、いずれも暗褐色粗砂混じり細砂が埋められており、いずれの柱穴においても柱痕を確認することはできなかった。

遺物は、土師器と須恵器が出土している。土師器は、P5から小皿が、P6から壺の体部小片が出土しているが、図化できたのはP5出土の小皿2点(10・11)である(第104図)。2点とも輪轂を使用して仕上げられており、11の底部はヘラ起しにより切り離されている。10の底部はナデ調整が観察されるが、切り離し方法は観察できない。

須恵器は、P5から壺の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期は、出土土器から中世Ⅰ期と考えられる。

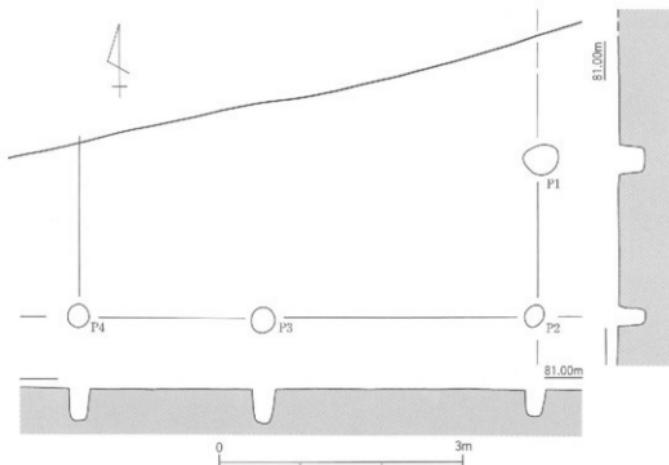
SB04(写真図版35)

調査区西部で検出した。SB03と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。側柱建物で、南北・東西両方向にそれぞれ2間検出した。建物の大半は調査区外にあたり、未検出である。P2-P4の直角方向を基準とした揃軸方向は、真北を示す。

建物の規模は、南辺で5.60mを測る。南辺の柱穴間の距離は、P2-P3間で3.30m、P3-P4間で2.30mである。また、P1-P2間の距離は1.90mである。

柱穴の平面形は円形を基本形とし、その径は21cm～37cmである。検出面からの深さは、30cm～41cmである。埋土は、いずれも暗褐色粗砂混じり細砂が埋められており、いずれの柱穴においても柱痕を確認することはできなかった。

遺物は、P3から小皿が1点(12)出土している(第104図)。底部は回転糸切りにより切り離され、口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。時期は出土土器から、中世Ⅰ期と考えられる。



第96図 SB04

柱穴 建物の一部として報告できなかった柱穴のなかに、当遺跡を考えるうえで良好な遺物が出土した柱穴がある。ここでは出土遺物を中心に、7穴（P01～P07）について報告する。

P01

調査区東部に位置する（第92図）。SB01～P5と切り合い関係にあり、これを切っている。瓦器の椀（17）が出土している（第104図）。口縁部のみの小片で、口縁部はヨコナデ調整により仕上げられている。時期は中世Ⅰ期と考えられる。

P02

調査区東部、SB01の南側、P03の東側に位置する（第92図）。土師器の小皿（13）が出土している（第104図）。体部はナデ調整、口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。時期は中世Ⅰ期と考えられる。

P03

調査区東部、SB01の南側、P02の西側に位置する（第92図）。土師器の皿の口縁部片と瓦器椀（18）が出土している（第104図）。瓦器椀は底部を中心に残存し、内面見込みに平行する暗文が認められる。高台は蒲鉾形をなすが、高台高が45mmと比較的のしっかりしている。時期は中世Ⅰ期と考えられる。

P04

調査区東部、SB01・P03の南側に位置する（第92図）。土師器と瓦器が出土している。土師器は小皿と大皿が出土しているが、図化できたのは小皿1点（14）である（第104図）。体部内外面をナデ調整後、口縁部内外面がヨコナデ調整により仕上げられている。大皿は、手づくねにより仕上げられている。瓦器は、椀の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。時期は中世Ⅰ期と考えられる。

P05

調査区中央部に位置する（第92図）。SB02～P1と切り合い関係にあり、これに切られている。土師器の小皿と瓦器椀が出土している。小皿（15）は、底部がナデ調整、口縁部内外面がヨコナデ調整により仕上げられている（第104図）。瓦器椀は、小片のため図化できなかったが、内外面とも暗文は認められない。時期は中世Ⅰ期と考えられる。

P06

調査区中央部に位置する（第92図）。SB02の南西側、SK01の北東側に位置する。土師器の鉢（19）と瓦器の小皿（16）が出土している（第104図）。

16は、体部を指オサエ後、口縁部内外面がヨコナデ調整により仕上げられている。内面に暗文が認められる。19は、形態的には瓦器椀に類似するが、土師器であることから鉢として報告する。体部外表面は指オサエの後ナデ調整により仕上げられ、最後に口縁部内外面がヨコナデ調整により仕上げられている。

時期は、出土土器から中世Ⅰ期と考えられる。

P07

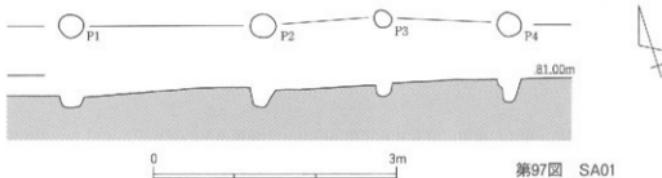
調査区西部に位置する（第92図）。SB03の南西側、SK05の北側に位置する。須恵器の碗と瓦器碗が各1点出土している（第104図）。須恵器碗（20）は、いわゆる東播系の典型的な碗である。瓦器碗（21）は、比較的深い碗であるが、高台が貼付けられていない点が大きな特徴である。高台の剥離痕も認められない。全体的に磨減が著しく調整・暗文の有無等を確認することはできない。

以上の出土土器の特徴から、中世Ⅰ期に位置付られる。

柵 1列（SA01） 検出した（第92図）。SB01の東側に位置し、その方向を同じくする。直列する4穴の柱穴（P1～P4）からなり、検出長は5.30mである。柱穴間の距離は、P1～P2間が2.30m、P2～P3間が1.50m、P3～P4間が1.50mである。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形をなし、その規模は30cmを測る。また、検出面からの深さは15cm～30cmである。柱穴内の埋土は、暗黄褐色粗砂混じり細砂1層で埋められており、断面・平面いずれにおいても柱痕を確認することはできなかった。

SB01とその方向性を同じくすることから、SB01とはほぼ同時期に機能していたものと考えられる。また、P3からは瓦器碗の小片が出土している。

以上から、中世Ⅰ期に位置付けられるものと考えられる。



第97図 SA01

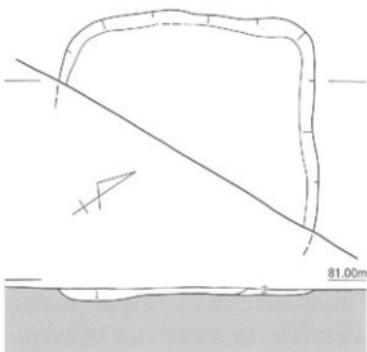
土坑 8基（SK01～SK08）検出した。

SK01（写真図版36）

調査区中央部で検出した（第92図）。SB02の西側に位置し、当遺構の主軸方向がその棟軸方向とはほぼ一致する。柱穴と切り合い関係にある以外は顕著な切り合い関係は認められないが、約1/2が調査区外に抜がっている。このため、検出できたのは全体の約1/2に限られる。

平面形は隅丸方形をなすものと考えられ、その規模は北東～南西方向で2.10mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは13cmを測る。埋土は2層からなり、粗砂が多く含まれている（第98図）。

遺物は、土師器と瓦器が出土している（第104図）。土師器は、杯・小皿・大皿（24）・片口鉢（22）が出土しているが、杯と小皿については小片のため図化できなかった。大皿は、口縁部を中心に残



1. 暗灰褐色粗砂混じりシルト～細砂
2. 灰褐色粗砂混じり細砂

0 2m

第98図 SK01

存し、回転ナデ調整により仕上げられている。片口鉢は、全体的に指オサエとナデ調整により仕上げられ、最後に口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。また、体部外面全面に被熱痕が認められる。

瓦器は、椀（26）と鉢（23）が出土している（第104図）。椀は底部を中心に残存し、断面三角形の高台が貼り付けられている。内外面とも暗文は認められない。鉢は口縁部を中心には存する。体部は内外面ともナデ調整により、口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。

時期は、出土土器から判断して、中世Ⅰ期と考えられる。

SK02（写真図版36）

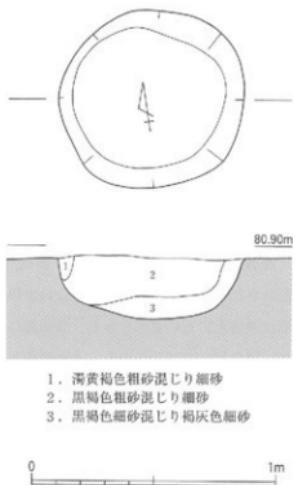
調査区中央部で検出した（第92図）。SK01の北西に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は円形に近く、その規模は75cm×73cmである。横断面は箱形に近い逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは25cmである。

埋土は大きく2層（第2層・第3層）からなり、いずれもその層相から判断して人為的に埋められたものと考えられる（第99図）。また、第2層には炭化物が多く含まれていた。第1層については、小規模な掘り返しの痕と考えられる。

遺物は、土師器と須恵器が出土している。土師器は小皿（25）と椀が出土している。小皿は、底部が回転糸切りにより切り離され、体部から口縁部が回転ナデ調整により仕上げられている。椀は、小片のため固化できなかったが、底部を中心には存し、回転糸切りにより切り離されている。

須恵器はいわゆる東播系の椀で、口縁部が出土しているが、小片のため固化できなかった。

時期は、出土土器から判断して、中世Ⅰ期と考えられる。



第99図 SK02

SK03

調査区中央部で検出した（第92図）。他の遺構との切り合い関係は認められない。本遺構の南半は調査区外に拡がっており、調査で検出できたのは約1/2に限られる。平面形は梢円形に近いものと考えられ、長軸方向で70cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは8cmである。埋土は褐色粗砂混じり細砂1層からなる。

遺物は、全く出土していない。このため、出土遺物からの時期の特定は困難である。

SK04（写真図版36）

調査区西部で検出した（第92図）。SK06の東に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は梢円形をなし、主軸方向で71cm、その直交方向で51cmを測る。横断面は緩やかなU字形をなし、最深部における検出面からの深さは14cmである。

埋土は暗褐色粗砂混じり細砂1層からなり、その層相から判断して人為的に埋められたものと考え

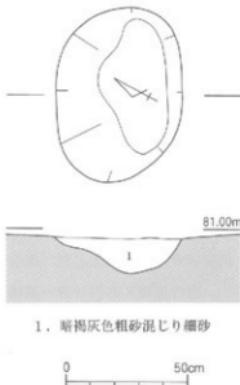
られる（第100図）。

遺物は、瓦器軸の体部片が出土している。小片のため図化できなかったが、暗文は認められない。時期は、出土土器から中世Ⅰ期と考えられる。

SK05

調査区中央部西側で検出した（第92図）。SK04の東に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、大半は調査区外へ拡がっている。平面形は梢円形をなすものと考えられ、長軸方向で50cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは5cmである。埋土は暗褐色粗砂混じり細砂1層からなる。

遺物は、土師器が出土している。小片のため器種の特定も困難である。ただし、その特徴から、中世のものと考えられる。



第100図 SK04

SK06（写真図版36）

調査区中央部西側で検出した（第92図）。SK04の南西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は長方形をなし、長軸方向で70cm、その直交方向で55cmを測る。横断面は逆台形に近い皿形をなし、最深部における検出面からの深さは8cmである。埋土は淡褐色細砂～暗灰褐色細砂1層からなり、その層相から判断して人為的に埋められたものと考えられる。

遺物は、全く出土していない。このため、出土遺物からの時期の特定は困難である。

SK07

調査区西部で検出した（第92図）。SK08の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形はやや歪んだ梢円形をなし、長軸方向で1.75m、その直交方向で1mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは90cmである。埋土は黄褐色シルトをブロック状に含む黄褐色粗砂混じり細砂1層からなり、その層相から判断して人為的に埋められたものと考えられる。

遺物は、全く出土していない。このため、時期の特定は困難である。

SK08

調査区西部で検出した（第92図）。SK07の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形はやや歪んだ長方形をなし、長軸方向で1.20m、その直交方向で90cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは20cmである。埋土は黄褐色粗砂をブロック状に含む灰色粗砂混じりシルト1層からなり、その層相から判断して人為的に埋められたものと考えられる。

遺物は、全く出土していない。このため、時期の特定は困難である。

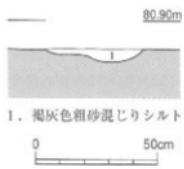
溝 5条（SD01～SD05）検出した。

SD01

調査区中央部東側で検出した（第92図）。SD02の東側に位置する。SB02と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかつた。南西—北東方向にはほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。検出長は2.25mで、検出面における幅は40～45cmである。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは5cmである。褐灰色粗砂混じりシルト1層からなる（第101図）。

遺物は、土師器の小片と瓦器碗が出土している。瓦器碗は、体部の小片が出土しているが、磨滅が著しく、暗文の有無を確認することはできない。

出土土器から、中世Ⅰ期に位置付けられる。

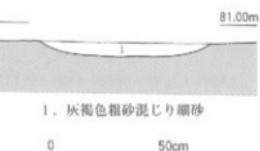


第101図 SD01

SD02

調査区中央部東側で検出した（第92図）。SD01の西側に位置する。南北方向にはほぼ直線的にのび、両端とも調査区内で収束している。検出長は1.15mで、検出面における幅は10cmである。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは4cmである。褐灰色粗砂混じり細砂1層からなる。

遺物は、全く出土していない。このため、時期の特定は困難である。



第102図 SD02

SD03

調査区中央部で検出した（第92図）。SD01・SD02の東側に位置し、SD01と方向を同じくし、その延長上にある。南北方向にはほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。検出長は6.25mで、検出面における幅は70cmである。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは6cmである。灰褐色粗砂混じり細砂1層からなる。

遺物は、土師器・須恵器・瓦器・白磁が出土しているが、いずれも小片のため同化できなかつた。土師器は器種の特定できない小片が出土している。須恵器はいわゆる東播系の捏鉢が出土している。内面の使用痕が顕著である。瓦器は碗の体部片が出土しているが、磨滅が著しく暗文の観察は困難である。白磁は、IV類碗の口縁部片が出土している。

時期は、出土土器から判断して中世Ⅰ期と考えられる。

SD04

調査区中央部西側で検出した（第92図）。SB04と平面的に重複し、その西側ラインと一致する。ただし、調査ではSB04との前後関係を明らかにすることはできなかつた。南北方向にはほぼ直線的にのびる溝で、南端部は調査区内で収束し、北端部は調査区外に伸びている。検出長は1.85mで、検出面における幅は30cmである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは8cmである。暗灰褐色粗砂混じり細砂1層からなる。

遺物は、全く出土していないが、SB04西行と同方向であることから、中世Ⅰ期に位置付けられる。

SD05

調査区北西部で検出した（第92図）。他の遺構との切り合い関係は認められない。南西-北東方向には直線的にのびる溝で、北東端は調査区内で収束し、南西は調査区外にのびている。検出長は2.45mで、検出面における幅は55cmである。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さはわずか2cmである。褐灰色粗砂混じり細砂1層からなる。

遺物は、土師器・須恵器・瓦器が出土している。いずれも小片のため、図化できなかった。土師器は器種を特定できない小片が出土している。須恵器は東播系の椀の体部片が出土している。瓦器は椀の口縁部片が出土しているが、内外面とも暗文は認められない。

出土土器から、中世Ⅰ期に位置付けられる。

(3) その他

当遺跡を検討する上で重要なと考えられる遺物が、いわゆる包含層から出土している。以下、その概要を報告する。

土師器・瓦器・青磁・白磁・天目茶碗の各器種と金属製品が出土している（第103図・第104図）。土師器は、小皿を3点（30～32）図化することができた。底部をヘラにより切り離す32と、全体を手づくねにより成形する30・31とに分類することができる。いずれも、最後に口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。また、32の内面には放射状の工具痕が認められる。

瓦器は、椀（27・28）と鉢（29）を図化することができた。椀は、2個体とも比較的良好に残存する。27は、型押し成形後、口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。器高に対して比較的口径が大きく、底部には断面三角形の高台が貼り付けられている。内面見込みにはジグザグ状の、体部から口縁部にかけては圓錐状の暗文が比較的密に施されている。外面には暗文は認められない。また、胎土が粗い点が一つの特徴である。28は、27と同様の成形方法であるが、全体的に器壁が厚い特徴が認められる。内面に比較的密な暗文が施されている。外面には暗文は認められない。鉢の29は、体部外面を指オサエ、内面をヘラナデ調整後、口縁部が横ナデ調整により仕上げられている。内外面とも暗文は認められない。

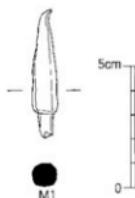
青磁（34）は、同安窯系碗の口縁部片が出土している。白磁（35）は、壺の体部片（35）と碗の底部片（36）が出土している。35は、梅瓶の体部下半部の可能性が考えられ、外面全面に施釉が認められる。36は、

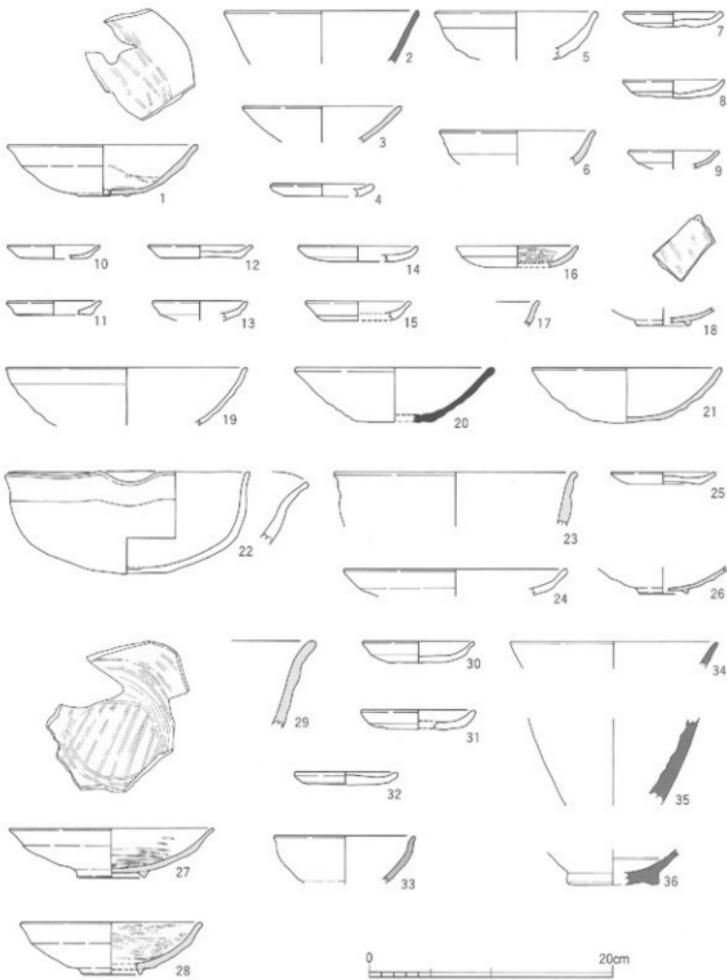
IV類碗の底部と考えられる。

天目茶碗は33の1点である。体部外面の下半一部に露胎が認められる以外は、ほぼ全面に施釉が認められる。胎土は灰色系で、緻密である。

金属製品は、鐵鎌が1点（M1）出土している（第103図）。鎌身を中心にして残存し、残存長は5.3cmである。鎌身は円錐気味の多角錐で、先端部はやや歪んでいる。その長さは4.2cm、断面の規模は関部付近で1.1cm×9.5mmを測る。関部は1cm残存し、その断面は径5mmを測る。木質痕は認められなかった。

第103図 M1





1~4 : SB01出土土器 5~9 : SB02出土土器 10・11 : SB03出土土器 12 : SB04出土土器
 13 : P02出土土器 14 : P04出土土器 15・19 : P05出土土器 16・18 : P06出土土器 17 : P01出土土器
 18 : P03出土土器 20・21 : P07出土土器 22~24・26 : SK01出土土器 25 : SK02出土土器
 27~36 : 包含層出土土器

第104図 C地区出土土器

II:D地区区の調査

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序

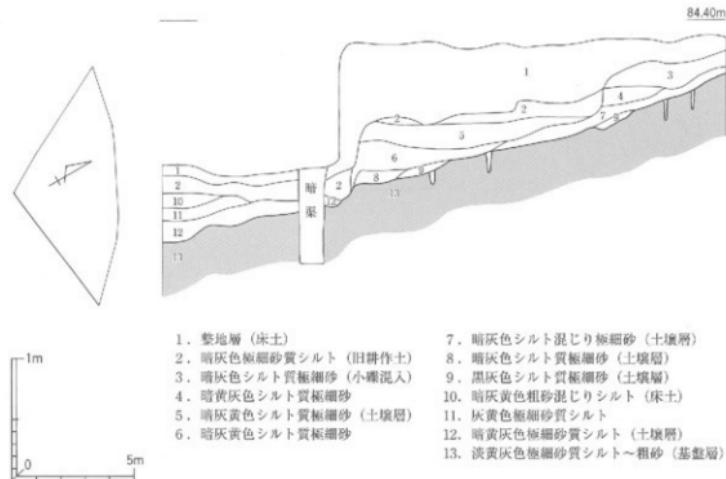
丘陵斜面の立地であることから、層厚の差が顕著で、なつかつ大規模な整地作業が数度にわたり行われている。上から、整地層・土壤層・基盤層の層序が認められた(第106図)。整地層は、第1層～第6層・第10層・第11層が該当する。基本的に水田造成のために整地がなされ、その上面が耕作土・床土として利用されている。土壤層は、第7層～第9層・第12層が該当する。基盤層が土壤化した層である。この層の上面あたりで遺物が出土している。基盤層は第13層で、この層の上面で遺構を検出している。第13層自体は花崗岩が軟化した層で、真砂層化している。

遺構の検出

遺構は、第13層上面の1面で検出している。先述したように遺構面の標高差が顕著で、南から北方向に低くなっている。その標高は、南側で83.95m、北端部で82.60mである。



第105図 D地区遺構検出作業



第106図 D地区基本土層図



第107図 D地区平面図

(2) 遺構と遺物

概要（写真図版36） 挖立柱建物跡・柱穴・土坑を検出している（第107図）

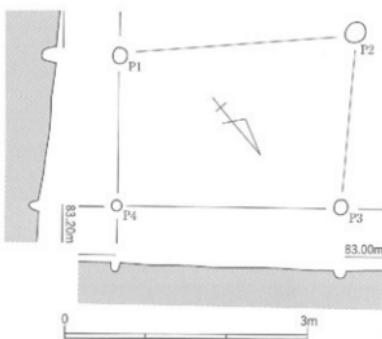
掘立柱建物跡 1棟検出した（SB05）。

SB05

調査区東部で検出した（第107図）。1間×1間の側柱建物である（第108図）。他の遺構との切り合い関係は認められない。

建物の規模は、北東桁行で2.75m、南東梁行で1.85mを測り、両者を基準とした面積は5.08m²である。また、P3-P4を基準とした棟軸方向は、N49°30'Wを示す。また、この方向は、遺跡の立地する傾斜地の等高線にはほぼ平行する。

柱穴の平面形は円形を基本形とし、その径は23cm～44cmである。検出面からの深さは、



第108図 SB05

第3章 調査の成果

13 cm～24 cmである。埋土は、いずれも暗灰色粗砂混じりシルトで、いずれの柱穴においても柱痕を確認することはできなかった。

遺物は、全く出土していない。時期の特定は困難であるが、中世の範疇で理解できるものと考えられる。
その他

他に柱穴と土坑を検出している。柱穴に関しては50穴ほど検出しているが、SB01以外は建物を復元することはできなかった。また、どの柱穴からも遺物は出土していない。ただし、埋土がほぼ同じであることから、ほぼ同時期に位置付けられるものと考えられる。包含層から出土した土器から、中世Ⅰ期を中心とした時期に位置付けられるものと考えられる。

土坑に関しても数基検出したが、遺物を伴うものはなく、詳細な検討は困難である。

(3) その他

構造には伴わないが、包含層から土器が数点出土している。図化できた3点について報告する（第109図）。図化できたのは、須恵器の羽釜（37）・須恵器甕（38）・青磁碗（39）である。

37は、回転ナデ調整により鶴が貼付けられ、口縁部とともに回転ナデ調整により仕上げられている。体部内外面はナデ調整により仕上げられている。38は口縁部の小片で、体部外面を平行叩きによる成形後、口縁部内外面が回転ナデ調整により仕上げられている。39は、青磁碗の底部片である。分厚い削り出し高台の部分はまだらに釉がかかる。見込み部に割花文を描く。龍泉窯系の製品で、南宋のものと思われる。

第13表 出土土器観察表(1)

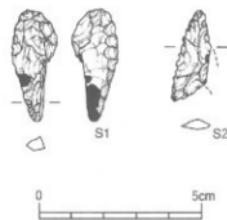
No	種別	器種	地区	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存状況	焼成
1	瓦器	甕	C地区	SB01-P2	15.40	4.20	4.20	口縁部1/6・底部2/5	
2	青磁	甕	C地区	SB01-P3	15.80	4.40		口縁部1/7	
3	瓦器	甕	C地区	SB01-P6	13.00	3.00		口縁部1/8	
4	土師器	小皿	C地区	SB01-P4	8.00	1.00	6.40	口縁部1/6・底部わずか	
5	土師器	杯	C地区	SB02-P1	13.00	4.00		口縁部1/6	
6	瓦器	甕	C地区	SB02-P5	12.70	2.80		口縁部1/10	
7	土師器	小皿	C地区	SB02-P1	7.80	1.30		口縁部1/8・底部1/4	
8	土師器	小皿	C地区	SB02-P1	8.20	1.50	5.70	口縁部3/5・底部完存	
9	瓦器	小皿	C地区	SB02-P1	7.40	1.45		口縁部1/6	
10	土師器	小皿	C地区	SB03-P5	7.40	1.15	5.60	口縁部1/5・底部1/6	
11	土師器	小皿	C地区	SB03-P5	7.50	1.10	6.25	口縁部1/7	
12	土師器	小皿	C地区	SB04-P3	8.40	1.10	6.50	口縁部2/5・底部3/4	
13	土師器	小皿	C地区	P02	7.65	1.60		口縁部1/7	



第109図 D地区出土土器

この他、サヌカイト製打製石器が2点(S1・S2)出土している(第110図)。

S1は石錐ではなく完存する。頭部と錐部の境界が明瞭で、細長い錐部の先端は丸みを帯びている。全長33.9mm、幅13.9mm、厚さ8.8mm、重さ2.9gを測る。S2は凹基式の石錐で、約1/3を欠く。刃部には鋸歯状の微細な剥離が認められる。全長17.6mm、厚さ5mm、重さ1.0gを測る。



第110図 D地区出土石器

色調	胎 土	備 考	挿図	図版
灰白～黄灰	0.5～1.5mmの大長石含む	外面磨文なし。炭素吸着不十分。高台高2mm。	104	—
オリーブ灰～浅黄		龍泉窯系無紋碗。全面灰被り。	104	37
灰～灰白	0.5mm以下の長石含む	炭素の吸着不十分	104	—
にぶい黄橙～灰黄褐	0.5mm以下の長石・クサリレキ・石英含む		104	—
にぶい黄橙～暗灰黄	0.5mm以下の長石・雲母・クサリレキ含む		104	37
黒褐	0.5～1.5mmの大長石・石英含む		104	—
にぶい黄橙～明赤褐	0.5～4.5mmの大石英・長石・雲母含む	手づくね整形	104	—
浅黄橙～にぶい黄橙	1～5mmの大石英・長石・クサリレキ・チャート含む	手づくね整形	104	37
にぶい橙～にぶい黄	0.5～2mmの大長石・チャート・石英含む	暗文なし	104	—
灰白	0.5mm以下の長石・雲母含む	手づくね整形	104	—
浅黄橙	0.5～1.5mmの大石英・長石・チャート・雲母・クサリレキ含む	底部ヘラ起こし	104	—
にぶい橙	0.5～3mmの大石英・チャート・長石・クサリレキ含む	底部回転糸切り	104	37
橙	0.5～2mmの大石英・長石・クサリレキ含む		104	—

第14表 出土土器観察表(2)

No	種別	器種	地区	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存状況	焼成
14	土師器	皿	C地区	P04	9.50	1.25		1/4弱	
15	土師器	小皿	C地区	P05	8.50	1.60	5.60	口縁部1/8	
16	瓦器	小皿	C地区	P06	9.90	1.80		口縁部1/8	
17	瓦器	椀	C地区	P01		2.00		口縁部わずか	
18	瓦器	椀	C地区	P03		1.50	4.40	底部1/3	
19	土師器	鉢	C地区	P06	9.80	4.80		口縁部1/12	
20	須恵器	椀	C地区	P07	16.00	4.55	6.10	口縁部1/4・底部1/3	不良
21	瓦器	椀	C地区	P07	15.40	4.65		口縁部1/7・底部1/4	
22	土師器	鉢	C地区	SK01	19.90	8.40		口縁部2/3・底部完存	
23	瓦器	鉢	C地区	SK01	19.60	4.50		口縁部1/8	
24	土師器	皿	C地区	SK01	18.00	2.20		口縁部1/12	
25	土師器	小皿	C地区	SK02	8.40	1.00	6.00	口縁部1/6・底部1/3	
26	瓦器	椀	C地区	SK01		2.20	4.00	底部1/4	
27	瓦器	椀	C地区	包含層	16.70	4.10	5.65	口縁部わずか・底部完存	
28	瓦器	椀	C地区	包含層	14.70	4.25	5.00	1/4	
29	瓦器	鉢	C地区	包含層		7.10		口縁部わずか	
30	土師器	小皿	C地区	包含層	8.90	1.75	4.20	口縁部1/12・底部1/2強	
31	土師器	小皿	C地区	包含層	9.20	1.60	4.00	1/3	
32	土師器	小皿	C地区	包含層	8.20	1.05	5.90	口縁部3/4・底部完存	
33	陶器	碗	C地区	包含層	11.50	2.90		口縁部わずか・体部1/6	
34	青磁	碗	C地区	包含層	16.90	2.20		口縁部1/12	
35	白磁	壺	C地区	包含層		7.20		体部1/8	
36	白磁	碗	C地区	包含層		2.90	7.55	底部1/4	
37	須恵器	羽釜	D地区	包含層	34.00	6.40		口縁部わずか・頸部1/6	良好
38	須恵器	壺	D地区	包含層		5.50		口縁部わずか	やや不良
39	青磁	碗	D地区	包含層		2.20	5.95	底部2/7	

色 調	胎 土	備 考	挿図	図版
にぶい橙	0.5~1mm大の石英・長石・クサリレキ含む	手づくね整形。	104	-
橙	0.5~2mm大の石英・長石・チャート・雲母・クサリレキ含む		104	-
灰		外面に暗文なし。	104	-
灰			104	-
オリーブ黒	0.5~3mm大の石英・長石含む	内面暗文有り。 高台高4.5mm。	104	-
にぶい褐~明褐	0.5~2mm大の長石・石英・クサリレキ・雲母含む		104	-
灰白	0.5~4.5mm大の長石・石英・チャート・雲母含む		104	37
浅黄~淡黄	0.5~3.5mm大の石英・長石・チャート含む	高台なし。	104	-
にぶい褐~にぶい橙	1~4mm大の長石・石英含む		104	38
灰			104	37
にぶい橙	0.5~1mm大の長石・雲母・石英・クサリレキ含む		104	-
浅黄橙	0.5~1.5mm大の石英・長石・チャート・クサリレキ含む	底部回転糸切り。	104	37
明黄褐~灰黄	0.5~2mm大の砂含む	炭素の吸着不十分。 高台高4.5mm。	104	-
灰	0.5~3.5mm大の長石・石英含む	炭素の吸着やや不十分。 外面暗文なし。	104	37
灰	1~6mm大の長石・石英・チャート含む	炭素の吸着不十分。 外面暗文なし。	104	-
灰	0.5~5mm大の石英・長石含む		104	39
灰	1~3mm大の長石・クサリレキ含む		104	-
にぶい橙	0.5~3mm大の長石・石英・クサリレキ含む		104	37
橙~にぶい橙	0.5~3mm大の長石・石英・チャート・クサリレキ含む	底部ヘラ切り。	104	37
褐~黄灰		天目茶碗。	104	-
灰オリーブ		同安窯系。	104	-
灰白			104	-
灰白		高台高9.5mm。	104	-
灰	0.5~4.5mm大の長石・石英含む		109	39
灰~灰白			109	39
灰オリーブ		高台高9mm。	109	39

3. 市教委（A 地区）の調査

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序 調査区は、第25号水路とその延長部、および70号田の一部が対象となる。第52号水路とその延長部をA地区、70号田の一部をB地区とした。ここではまずA地区的調査について報告する。基本層序は、旧耕作土・暗褐色砂質シルト・褐灰色細砂・黄褐色砂質シルト（基盤層）を基本とし、地形の微起伏に伴い各層位の厚さは地点によって異なる。暗褐色砂質シルトからは平安時代から中世にかけての遺物が出土し、その下層で多くの遺構を検出した。また、褐灰色細砂からも量は少ないが、土師質の土器片が出土した。詳細な時期を判断できる土器は無いが、古墳時代以前に遡るような時期の土器ではない。

(2) 遺構と遺物

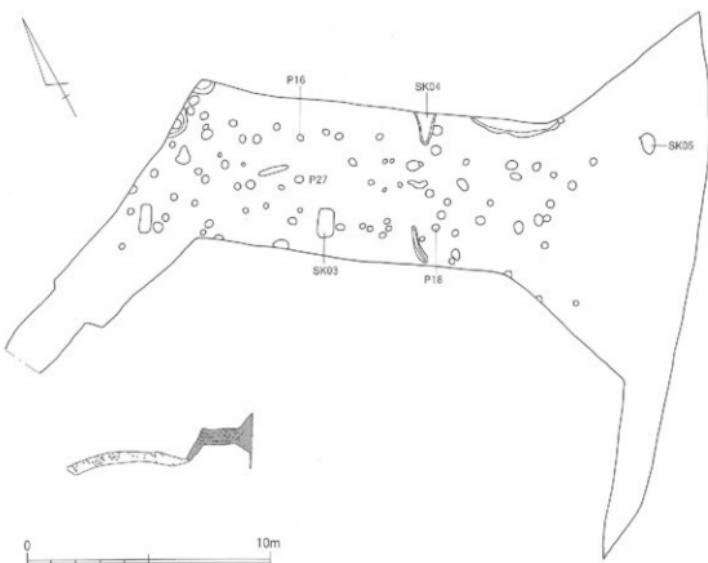
概要

検出した遺構は、ほぼ調査区全体に広がる。土坑・溝・柱穴などがある。100基近い数の柱穴を検出したが、建物跡は確認できなかった。また、溝は短く、小規模なものがほとんどである。

土坑 3基の土坑を検出した（SK03～SK05）。その内、SK03は中世墓の可能性がある土坑である。

SK03（第112図）

調査区ほぼ中央南よりで検出した土坑である。他の遺構との切り合い関係はなく、全容が完存する。平面形は長方形で、その規模は長径が1.22m、短径が0.73mを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは、45cmである。埋土は、上層：暗褐色細砂と下層：暗黃褐色極細砂



第111図 A地区平面図

からなり、下層には黄色粘質土ブロックを含む。これらの堆積状況から、人為的に埋められた可能性が強い。

遺物は、瓦器皿(45～48)4枚が、下層埋土から出土した。45・46・47の3枚は完形品で、48も口縁の一部が欠けている程度で、ほぼ完形に近い形状で出土している。口縁部はナデ調整で仕上げ、底部はやや丸みを帯びた平底で、外面は指押さえによる凹凸を残す。口縁部と底部との境は明瞭である。いずれもほぼ同じ大きさで、口径8.2cm～8.7cm、器高1.3cm～1.6cmである。土坑北隅の一角に上向きでまとまっており、土坑を埋める際、人為的に埋納した可能性が強い。

このほか、サスカイト製の楔形石器(S3)も出土した(第114図)。二次的に混入したものと考えられる。

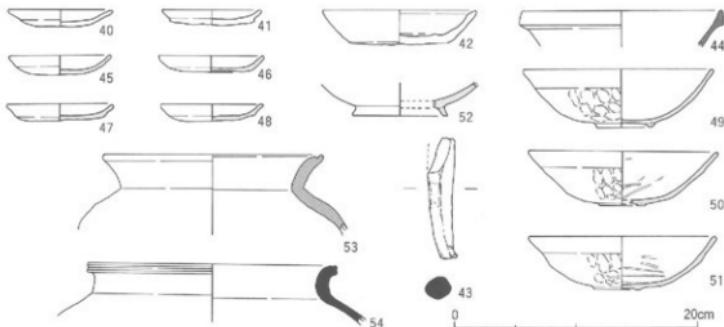
柱穴 調査区中央部を中心に約100基近い数の柱穴を検出したが、建物跡の存在は確認できなかった。ここでは、良好な遺物が出土した遺構について、出土遺物を中心報告する。

P16

調査区中央部やや北寄りで検出した遺構で、平面形は円形を呈し、直径28.0cmを測る。遺構内から、瓦器皿(51)や土師器片などが出土した。51は、口縁部をヨコナデ調整、体部下面に指押さえによる凹凸が明瞭に残る。体部内面に粗い平行ミガキを施し、底部外面には低い高台を貼り付ける。いわゆる和泉型瓦器皿尾上分類III-3～IV-1期に相当する時期のものである。13世紀前半から中頃に比定される。

P18

調査区中央やや南よりで検出した遺構で、平面形は円形を呈し、直径24.0cmを測る。遺構内から完形の土師器皿1点(40)や瓦器片などが出土した。成形にはロクロを用いず、口縁部をヨコナデで調整し、端部は丸く收める。底部外面には指押さえによる凹凸および指掌紋が残る。内面の半分および口縁部外面の一部に煤の付着を認める灯明皿と考えられる土器である。



第112図 SK03

第113図 A地区出土土器

P27

調査区ほぼ中央で検出した遺構で、平面形は円形を呈し、直径30.0cmを測る。サスカイト製の打製石錐1点(S4)が出土した。基部中央を抉る凹式の石錐で、基部の片方を欠く。基部先端は丸みを帯びる。全長2.4cm、最大幅1.9cm、厚さ0.3cm、重さ1.2gである。

(3) その他

遺物包含層からは、奈良～平安時代・中世・近世の土器、弥生時代の石器が出土したが、量的には中世の土器が最も多い。

奈良～平安時代の土器には須恵器・土師器・黒色土器(52)などがある。52は椀底部の破片で、外方に踏ん張る高台を持つ。内面にのみ炭素を付着させた黒色土器A類である。

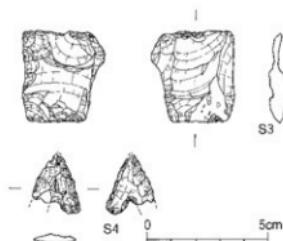
中世の土器には、須恵器(54)・土師器(41～43)・瓦器(49・50)・輸入陶器(44)などがある。

54は壺の口縁部で、短く外反し、端部に幅広の凹線1条を施す面を有する。体部外面は細い叩きが残る。東播系の須恵器壺とみられる。

41はやや丸みを帯びる底部から短く立ち上がる口縁部を持つ皿である。口縁部のみヨコナデで調整する非クロコ土師器である。42はロクロ成形の土師器で、平坦な底部から斜め上方へ直線的に開き、口縁端部内面に外傾する面をもつ。43は土鍋の脚で、先端部がわずかに屈曲する。

49・50は和泉型の瓦器椀で、底部には断面三角形の低い高台を貼り付ける。50は炭素の吸着が悪く、口縁部が赤褐色を呈する。III-3期に相当する瓦器椀で、13世紀前半の時期を与えることができる。

44は白磁碗の口縁部で、縁部は玉縁状を呈し、外面下部は露台となる。森田分類IV類に分類できる。53は甕口縁部で、体部との境は屈曲し、短く外反する。端部は丸く收め、内面に1条の沈線を有する。体部外面には備前焼に似た自然釉がかかる。



第114図 A地区出土石器

第15表 出土土器観察表(3)

No.	種別	番号	地区	遺構名	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	現存状況	色 調	焼成	油 土	参考	測定	測定	
40	土師器	Ⅲ	A地区	P18	4.40	1.40		完存	に赤い斑	良好	鉛灰少。クサリ無含む	灯明駅	113	40	
41	土師器	Ⅲ	A地区	包含層	8.00	1.30	7.00	25%	青黄	良好	鉛灰少。クサリ無含む		113	41	
42	土師器	Ⅲ	A地区	包含層	12.60	2.70	8.00	37%	明茶褐	良好	1m大の石英・長石含む。	瓦城ヘラ松	113	40	
43	土師器		上網跡	A地区	包含層				薄朱褐	に赤い斑	良好	1～3cm大の石英・長石含む。		113	41
44	白磁	碗	A地区	包含層	16.40				口縁部わずか	灰白	良好	玉縁	玉縁	113	41
45	瓦器	Ⅲ	A地区	SK03	8.20	1.60		完存	灰	良好	1m大の石英・長石を少量含む。		113	40	
46	瓦器	Ⅲ	A地区	SK03	8.70	1.30		完存	灰	良好	1m大の石英・長石を少量含む。		113	40	
47	瓦器	Ⅲ	A地区	SK03	8.50	1.40		完存	灰	良好	1m大の石英・長石を少量含む。		113	40	
48	瓦器	Ⅲ	A地区	SK03	8.40	1.40		90%	灰	良好	1m大の石英・長石を少量含む。		113	40	
49	瓦器	碗	A地区	包含層	15.50	4.75	4.70	80%	灰	やや茶	砂粒少なし。	山陰御用蓄糸 桑小原	113	40	
50	瓦器	碗	A地区	包含層	15.40	4.50	3.80	50%	灰	良好	砂粒少なし。	全体的に赤茶 付着不規	113	—	
51	瓦器	碗	A地区	P16	15.40	4.30	3.80	80%	灰	良好	2～5mmの砂粒含む。	全体的に灰黒 付着不規	113	40	
52	黑色土器	碗	A地区	包含層	18.00				口縁部わずか	灰	良好	1m大の石英・長石、クサリ無少量 含む。	黒色土器A	113	41
53	同逆側面	碗	A地区	包含層	20.40				口縁部わずか	灰	良好	1～2mm大の長石含む。	外輪自然堆	113	41
54	同逆器	碗	A地区	包含層					口縁部わずか	灰	良好			113	41

4. 市教委（B地区）の調査

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序

B地区は元の道路下が対象範囲となる調査区で、道路建設時に地形の改変を受けた可能性が強く、遺構を検出したした基礎層直上まで盛土・擾乱土が覆っており、遺物包含層等は既に削平された状態であった。

遺構の検出

遺構を検出した面は1面である。

(2) 遺構と遺物

概要

A地区では、土坑や溝、柱穴などの遺構を検出した。柱穴は総数39基を数えるが、建物跡は確認できなかった。遺構の時期は、奈良～平安時代・中世・近世の遺構が存在するものと考えられるが、時期を特定できる遺物が出土した遺構は少なく、時期不明の遺構が多い。

柱穴 多数検出した柱穴の中で、本調査区の遺構の年代等を考える上で参考となる遺物が出土した柱穴がある。

P03

調査区の東端、壁際で検出した柱穴である。平面形は円形で、直径が28.0cm、深さ19.8cmを測る。土師器・瓦器などの土器片が少量出土した。55は、時期を想定できる瓦器底の底部で、断面が半円形を呈する薄く退化した高台が貼り付く。尾上分類のIV-3期に相当する瓦器底で、13世紀後半から14世紀初頭頃の年代が与えられる。

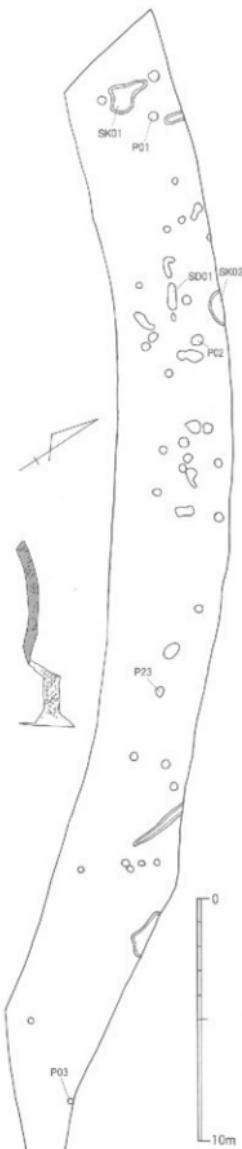
その他の遺構

図化できる遺物はなかったが、土坑SK01からは土師器片、SK02からは土師器・瓦器片、P01からは土師器片、P02からは瓦器片が出土した。いずれも、中世の遺構と想定できる。

第16表 出土土器観察表(4)

No.	種別	器種	地区	遺構名	口径 (cm)	基高 (cm)	遺徴
55	瓦器	底	B地区	P02		4.00	
55	残存状況	色調	焼成	胎 土	備考	神田	鑑定
	底部のみ	灰白	良好	胎土少ない	武藏村山市立	115	41

第115図 B地区
出土土器



第116図 B地区平面図

第5節 五反田遺跡

1. 遺跡の概要

(1) 遺跡の位置

山田盆地の西側、山田川右岸に位置する（第5図）。七反田遺跡とは山田川を挟んだ北東側、白生遺跡の北側にあたる。

(2) 調査の概要

兵庫県教育委員会は、水田造成のための削平地（C地区）を、市教育委員会は水路掘削予定地（A地区・B地区）を、それぞれ調査対象とした（第117図）。県教育委員会の調査地区は本遺跡の南西部に、市教育委員会の調査地は西部にあたる。県教育委員会の調査面積は587m²、市教育委員会の調査面積は109m²である。



第117図 調査位置図

2. 県教委の調査

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序

上から、耕作土・床土層・土壤層・基盤層の層序が認められた(第119図)。床土層は、暗黃灰色シルト混じり極細砂・暗灰色シルト混じり極細砂・灰黄色シルト混じり極細砂・暗灰黄色シルト質極細砂・暗黃灰色シルト混じり極細砂～細砂からなり、耕作土～床土を繰り返して形成された層である。

土壤層は、黒灰色シルト質極細砂

1層からなり、いわゆる基盤層が

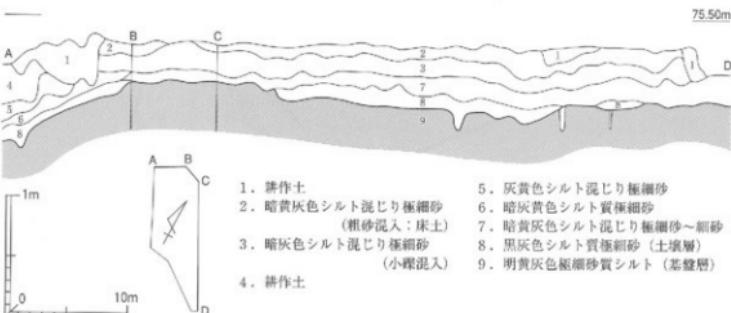
土壤化した層である。この層は、調査区全域で検出されたものではなく、標高の高い北部では削平を受け、認められなかった。基盤層は、明黃灰色極細砂質シルト1層である。基本的にシルトからなるが、南西部の一部には真砂(粗砂～小砾)が露出していた。

遺構の検出

遺構は、第9層上面の1面で検出している。遺構面は平坦ではなく、北東から南西方向に低くなっている。その標高は、北隅で74.96m、南隅で74.46mである。



第118図 C地区調査風景

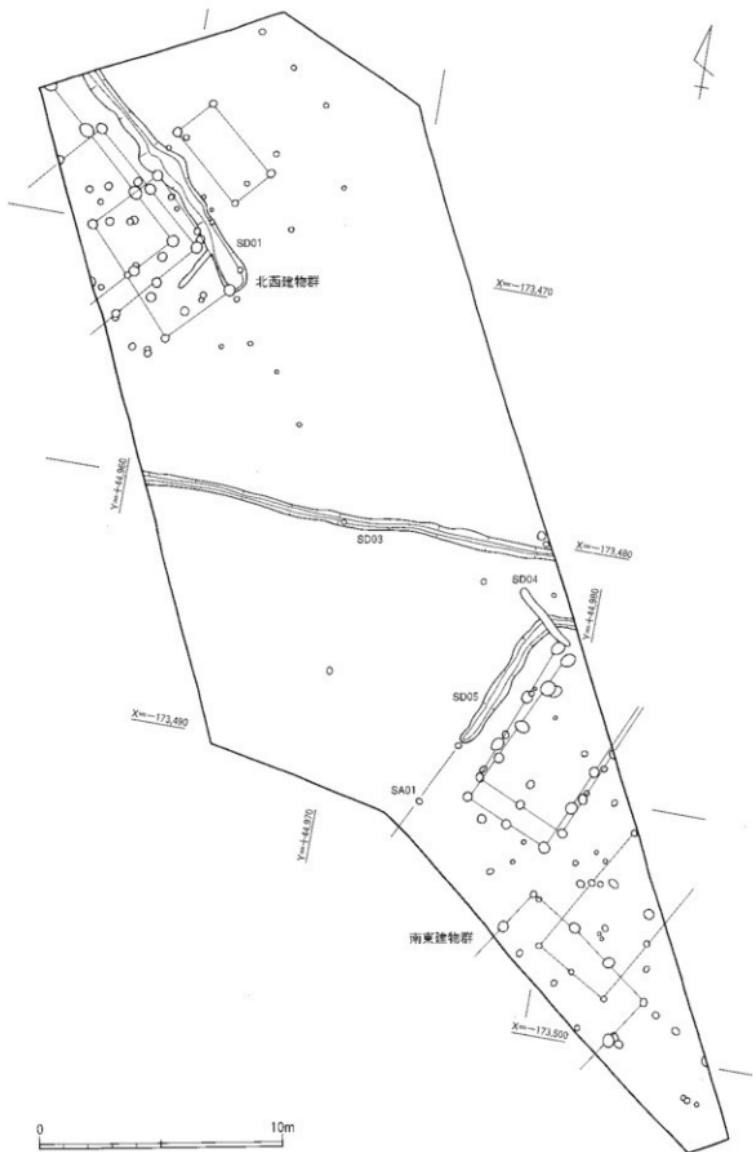


第119図 C地区基本土層図

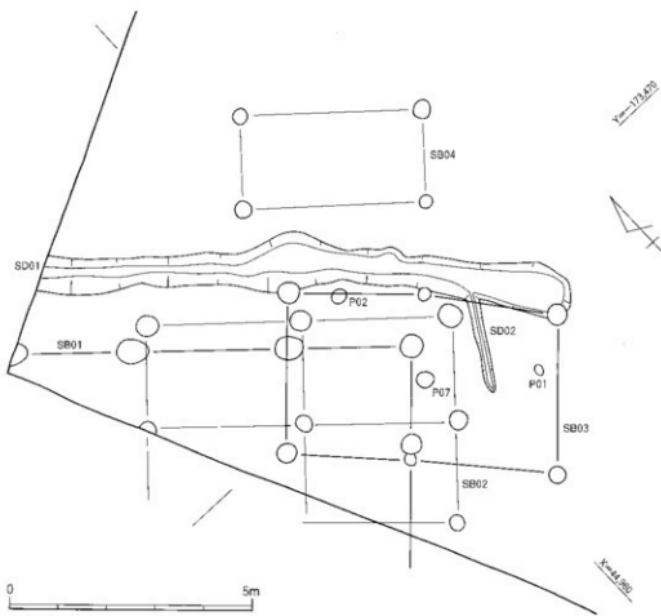
(2) 遺構と遺物

概要 (写真図版42・43)

掘立柱建物跡・柱穴・溝・橋を検出している(第120図)。遺構は、調査区北西部と南東部の2個所に集中(北西建物群・南東建物群)し、それぞれ掘立柱建物跡と溝から構成されている。調査区の中央部には1条の溝(SD03)が東西方向に検出されている。



第120図 C地区平面図



第121図 C地区北西建物群

掘立柱建物跡（写真図版44）8棟検出した（SB01～SB08）。これらの建物は、大きく調査区北西部（北西建物群：第121図）と南東部（南東建物群：第126図）の2箇所に集中して検出されている。北西建物群においては、SD01とSD02が、南東建物群においてはSD05が、それぞれ建物の棟軸方向とほぼ一致することから、両者が一体となって機能していたものと考えられる。さらに、SD05の延長上にあら2穴（SA01）についても、SD05の延長として機能していたものと考えられる。また、各建物群内において、建物が平面的に重複して検出されていることから、数期に分けることが可能である。

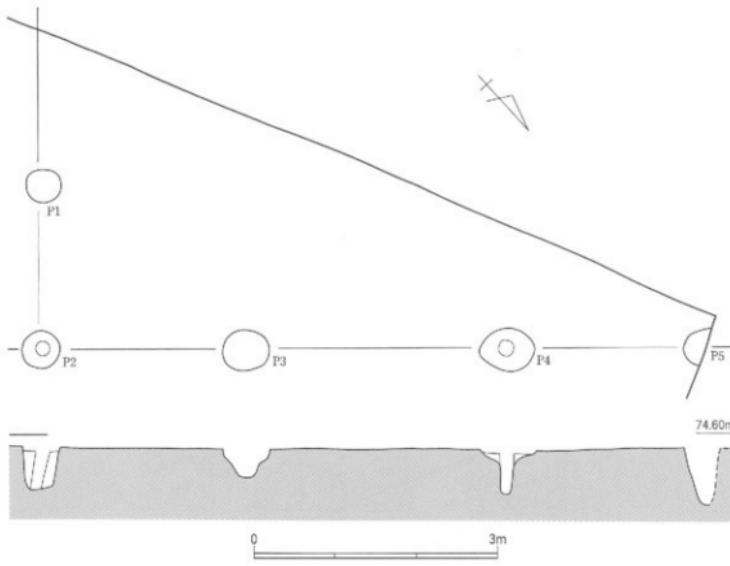
SB01

北西建物群に位置する（第121図）。側柱建物で、東西方向に1間、南北方向に3間分を検出した（第122図）が、さらに調査区北西側へ拡がる可能性が考えられる。また、SB02・SB03と平面的に重複し、P1がSB03-P5を切っている。ただし、SB02とは調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。

建物の規模は、北東桁行方向で8.10mを測り、それぞれの柱穴間の距離は、P2-P3間で2.50m、P3-P4間で3.20m、P4-P5間で2.40mを測る。P1-P2間の柱穴間距離は、2.00mである。また、P2-P5を基準とした棟軸方向は、N48°00'Wを示す。柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形をなし、その径は43cm～53cmである。検出面からの深さは、35cm～72cmである。

埋土は、いずれも黄褐色シルトと黒灰色シルトからなる埋め土で、P2とP3で柱痕を確認することができた。いずれも、柱穴断面の観察で確認できたものである。その径は17cmである。

なお、本建物はSD01の北西側に位置し、棟軸方向とほぼ平行することから、SD01とセットで機能



第122図 SB01

していたものと考えられる。

遺物は、土師器と瓦器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。土師器は、P3から小皿の体部片が出土している。瓦器は、P2とP3から椀が出土している。いずれも内面に比較的密にヘラミガキが施されている。

時期は、中世Ⅰ期に位置付けられる。

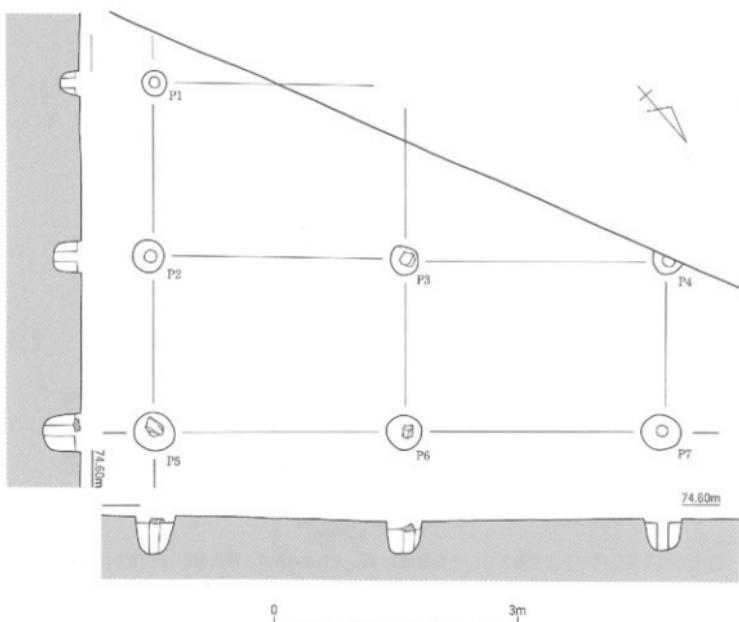
SB02（写真図版44）

北西建物群に位置する（第121図）。総柱建物で、桁行・梁行各2間分を検出した（第123図）が、さらに調査区北西側へ擴がる可能性が考えられる。また、SB01・SB03と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。

建物の規模は、桁行方向（P5-P7間）で6.25mを測り、柱穴間の距離は、P5-P6間で3.10m、P6-P7間で3.15mを測る。梁行方向（P1-P5間）で4.30mを測り、柱穴間の距離はP1-P2間・P2-P5間共に2.15mを測る。また、P5-P7を基準とした棟軸方向は、N49°00'Wを示す。

柱穴の平面形は円形を基本形とし、その径は31cm～50cmである。検出面からの深さは、23cm～45cmである。埋土は、いずれも黄褐色シルトと黒灰色シルトからなる埋め土で、全ての柱穴で柱痕を確認することができた。いずれも、柱穴断面の観察で確認できたものである。その径は12cm～14cmである。また、P3・P5・P6においては、柱抜き取り後に20cm大の角礫が置かれていた。

遺物は、土師器・須恵器・瓦器が出土している（第142図）。土師器は、P2・P6・P7から小皿の小片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。



第123図 SB02

須恵器は、P7から捏鉢の口縁部片（3）と底部片（4）が出土している。4の底部は回転糸切りにより切り離されている。3と4は直接接合関係はないが、同一個体の可能性が考えられる。

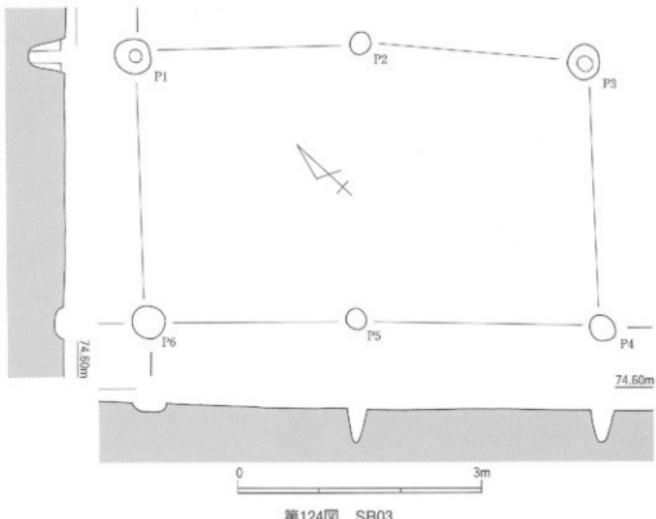
瓦器は、P3から小皿（2）が、P6から椀（1）が出土している。2は、手づくねによる成形後、口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。内外面とも暗文は認められず、全体的に炭素の吸着が不十分である。1も小皿同様、手づくね成形後口縁部が横ナデ調整により仕上げられている。内面にわずかに暗文が認められるが、外面には認められない。底部には、断面蒲鉾形の高台がわずかに貼り付けられている。

時期は、中世Ⅰ期に位置付けられる。

SB03

北西建物群に位置する（第121図）。1間×2間からなる側柱建物である（第124図）。SB01・SB02と平面的に重複し、P5がSB01-P1に切られている。ただし、SB02との関係は調査では明らかにできなかった。

建物の規模は、南西桁行方向（P4-P6間）で5.60mを測り、柱穴間の距離は、P4-P5間で3.00m、P5-P6間で2.60mを測る。北西梁行方向（P1-P6間）で3.30mを測る。南西桁行と北西梁行を基準とした建物の面積は、18.48m²である。また、P4-P6を基準とした棟軸方向は、N42°00'Wを示している。



第124図 SB03

柱穴の平面形は円形を基本形とし、その径は 25 cm ~ 43 cm である。検出面からの深さは、10 cm ~ 45 cm である。埋土は、いずれも黄褐色シルトと黒灰色シルトからなる埋め土で、P1 と P3 で柱痕を確認することができた。いずれも、柱穴断面の観察で確認できたものである。その径は 13 cm ~ 14 cm である。

遺物は、土師器・須恵器・瓦器が出土している（第 142 図）。土師器は、P4 から壺の体部片が出土しているが、小片のため同化できなかった。須恵器は、P5 から壺の体部片が出土している。

瓦器は、P5 と P6 から出土しているが、同化できたのは P6 出土の 7 の 1 個体に限られる。手づくね成形後口縁部が横ナデ調整により仕上げられている。内面に細筋の暗文が比較的密に施されているが、外面上には認められない。炭素の吸着は不十分である。

時期は、出土土器から判断して、中世Ⅰ期に位置付けられる。

SB04

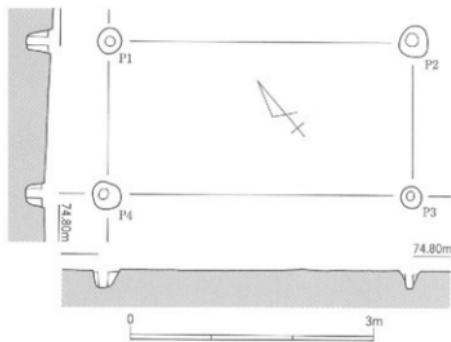
北西建物群に位置する（第 121 図）。1 間 × 1 間からなる側柱建物である（第 125 図）。SD01 の北東側に位置し、他の遺構との切り合い関係は認められない。

建物の規模は、南西桁行方向（P3 - P4 間）で 3.80 m、北西梁行方向（P1 - P4 間）で 1.85 m を測り、両者を基準とした建物の面積は、7.03 m² である。また、P3 - P4 を基準とした棟軸方向は、N50° 00' W を示している。

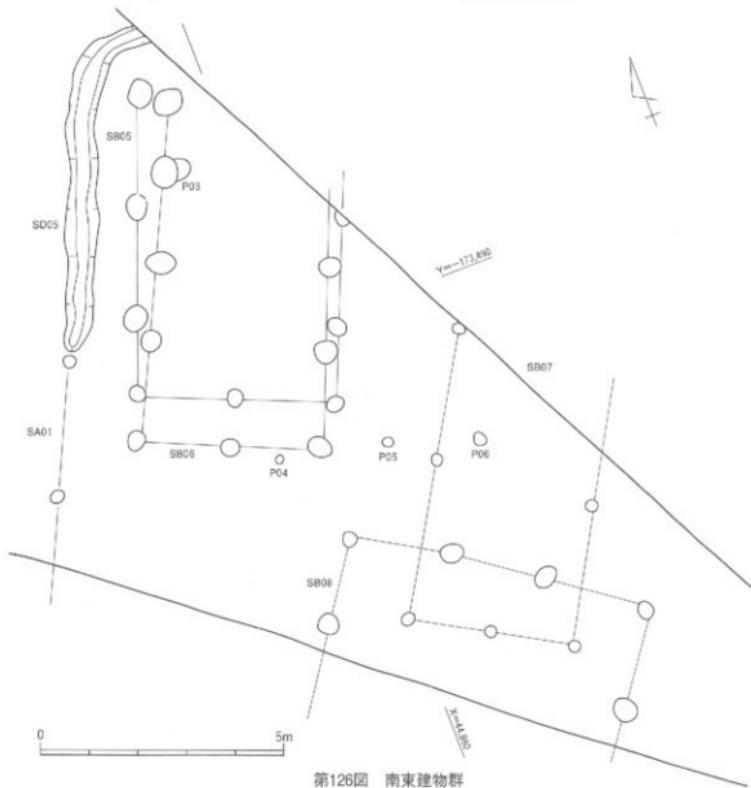
柱穴の平面形は円形を基本形とし、その径は 25 cm ~ 35 cm である。検出面からの深さは、23 cm ~ 32 cm である。埋土は、いずれも黄褐色シルトと黒灰色シルトからなる埋め土で、全ての柱穴において柱痕を確認することができた。いずれも、柱穴断面の観察で確認できたものである。その径は 10 cm ~ 14 cm である。

遺物は、いずれの柱穴からも出土していない。当建物の時期については、出土遺物からの時期の特定

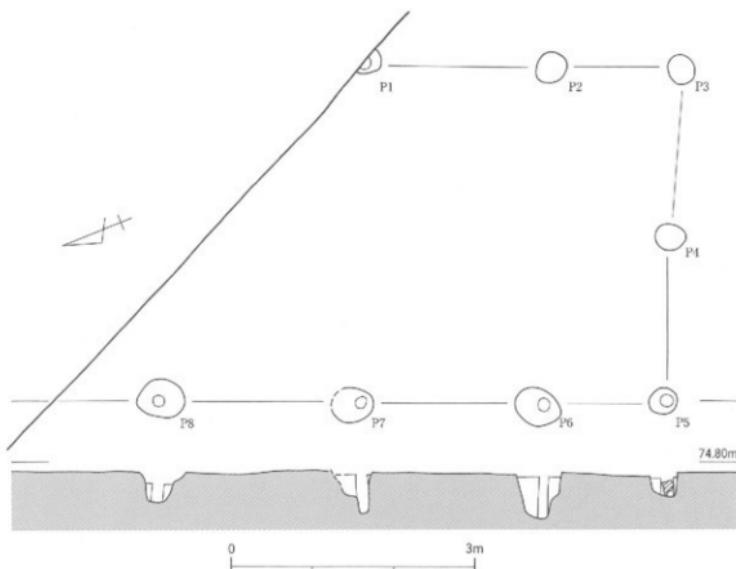
は困難であるが、北西建物群と棟軸方向を同じくすることから中世1期と考えられる。



第125図 SB04



第126図 南東建物群



第127図 SB05

SB05

南東建物群に位置する（第126図）。側柱建物で、北西側桁行で3間、南西側梁行で2間検出した（第127図）。桁行については、さらに北東側調査区外に拡がる可能性が考えられる。SB06とは棟軸方向をほぼ同じくし、平面的に重複する。調査では、両者の関係を明らかにすることはできなかった。

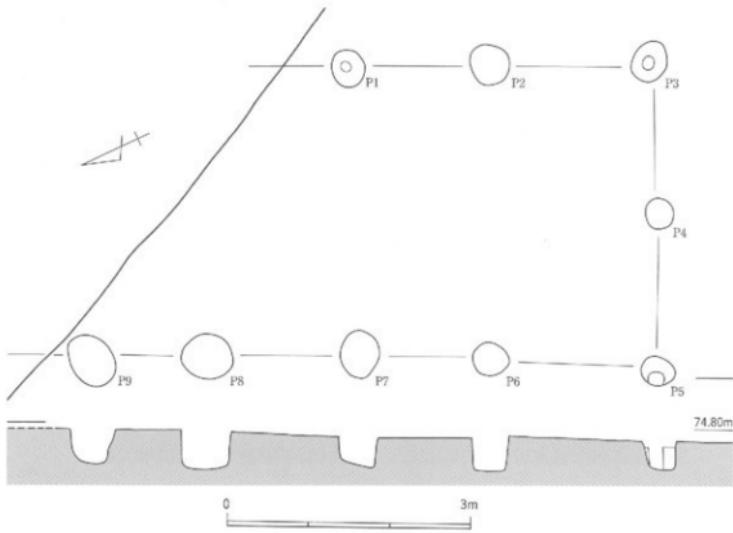
建物の規模は、北西桁行（P5～P8間）で6.25mを測る。各柱穴間の距離は、P5～P6間が1.50m、P6～P7間が2.25m、P7～P8間が2.50mである。また南東桁行の柱穴間距離は、P1～P2間が2.30m、P2～P3間が1.60mである。南西梁行の規模は4.00mを測り、柱穴間の距離は、P3～P4間・P4～P5ともに2.00mである。また、P5～P8を基準とした棟軸方向は、N21°30'Wを示している。

柱穴の平面形は円形もしくは橢円形をなし、その径は33cm～48cmである。検出面からの深さは、28cm～55cmである。埋土は、いずれも黄褐色シルトと黒灰色シルトからなる埋め土で、P2～P4において柱痕を確認することができた。いずれも、柱穴断面の観察で確認できたものである。その径は12cm～15cmである。また、P5においては、柱抜き取り後に角礫が埋められている様子を観察することができた。

遺物は、P8から土師器の杯の小片が出土している。出土土器からの時期の特定は困難であるが、SB06との関連から、古代Ⅱ期と考えられる。

SB06（写真図版45）

南東建物群に位置する（第126図）。側柱建物で、北西側桁行で4間、南西側梁行で2間検出した（第128図）。4間×2間の建物である可能性が十分考えられるが、桁行がさらに北側調査区外に拡がる可



第128図 SB06

能性も否定しきれない。SB05とは棟軸方向をほぼ同じくし、平面的に重複する。調査では、両者の関係を明らかにすることはできなかった。

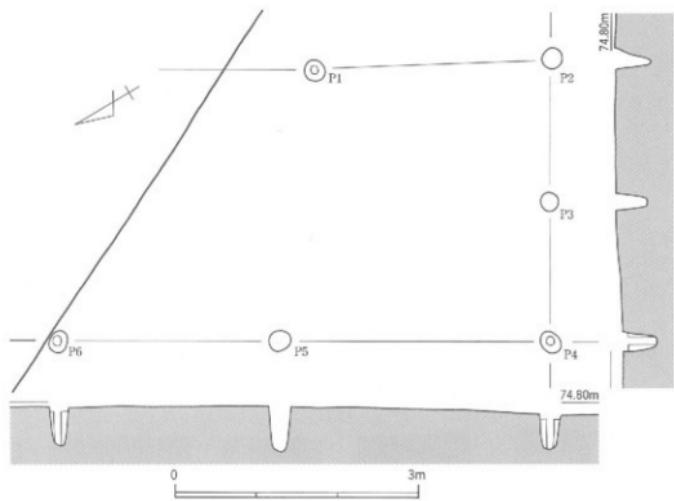
建物の規模は、北西桁行（P5～P9間）で7.00 mを測る。各柱穴間の距離は、P5～P6間が2.05 m、P6～P7間が1.65 m、P7～P8間が1.90 m、P8～P9間が1.40 mである。また、南東桁行の柱穴間距離は、P1～P2間が1.75 m、P2～P3間が2.00 mである。南西梁行の規模は3.80 mを測り、柱穴間の距離は、P3～P4間が1.80 m、P4～P5間が2.00 mである。また、P1～P3を基準とした棟軸方向は、N24°30' Eを示している。当建物が4間×2間の建物であるとすると、その面積は、北西桁行と南西梁行を基準として、26.60 m²である。

柱穴の平面形は梢円形をなし、その規模は35 cm～64 cmである。検出面からの深さは、34 cm～48 cmである。埋土は、いずれも黄褐色シルトと黒灰色シルトからなる埋め土で、P1・P3・P5において柱痕を確認することができた。いずれも、柱穴断面の観察で確認できたものである。その径は9 cm～15 cmである。

遺物は、土師器と須恵器が出土している。土師器はP1から甕の体部片が出土しているが、小片のため同化できなかった。須恵器は、P9から杯Aが2点（5・6）出土している（第142図）。5は、完形に復元でき、底部はヘラ切りの後ナデ調整により仕上げられている。6の底部の切り離しは観察できない。以上から、当建物の時期は古代II期に位置付けられる。

SB07（写真図版45）

南東建物群に位置する（第126図）。SB08と一部平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。側柱建物で、北西側桁行で2間、南西側梁行で2間検出した（第129図）。



第129図 SB07

2間×2間の建物である可能性が十分考えられるが、桁行がさらに北側調査区外に拡がる可能性も否定しきれない。

建物の規模は、北西桁行（P4～P6間）で6.05mを測る。各柱穴間の距離は、P4～P5間が3.30m、P5～P6間が2.75mである。また、南東桁行P1～P2間の柱穴間距離は、2.90mである。南西梁行の規模は3.45mを測り、柱穴間の距離は、P2～P3間が1.75m、P3～P4間が1.70mである。また、P4～P6を基準とした棟軸方向は、N30°00' Eを示している。当建物が2間×2間の建物であるとすると、その面積は、北西桁行と南西梁行を基準として、20.87m²となる。

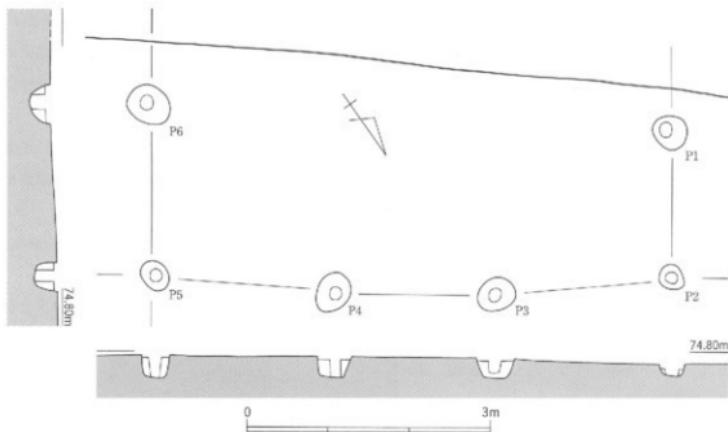
柱穴の平面形は円形を基本とし、その径は21cm～25cmを測る。検出面からの深さは、38cm～55cmである。埋土は、いずれも黄褐色シルトと黒灰色シルトからなる埋め土で、P1・P4・P6において柱痕を確認することができた。いずれも、柱穴断面の観察で確認できたものである。その径は10cmである。

遺物は、P4から土器の杯の底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。これから時期の特定は困難であるが、側柱建物であり、SB05・SB06と棟軸方向がほぼ同方向であることから、古代II期に位置付けられる。

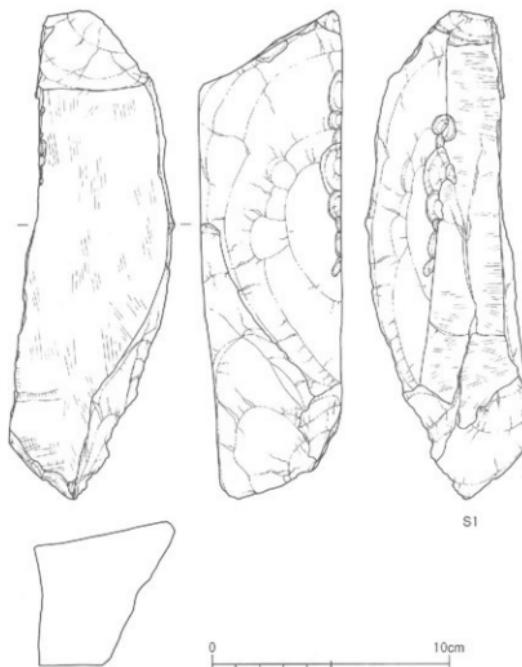
SB08（写真図版46）

南東建物群に位置する（第126図）。SB07と一部平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。側柱建物で、北東側桁行で3間、梁行で各1間検出した（第130図）。梁行方向について、調査区外に拡がる可能性が考えられる。

建物の規模は、桁行（P2～P5間）で6.35mを測る。柱穴間の距離は、P2～P3間が2.15m、P3～P4間が1.95m、P4～P5間が2.25mである。また、梁行については、P1～P2間が1.80m、P5～P6間が2.10mである。また、P5～P6を基準とした棟軸方向は、N34°30' Eを示している。



第130図 SB08



第131図 SB08出土石器

第3章 調査の成果

柱穴の平面形は円形もしくは楕円形をなし、その規模は30cm～40cmを測る。検出面からの深さは、15cm～28cmである。埋土は、いずれも黄褐色シルトと黒灰色シルトからなる埋め土で、全ての柱穴において柱痕を確認することができた。いずれも、柱穴断面の観察で確認できたものである。その径は10cm～15cmである。

遺物は、各柱穴から器種の特定できない土師器の小片が出土している。またP5から砥石（S1）が出土している（第131図）。長軸方向の側面に研磨面を作り出すとともに、その裏面にも狭小な研磨面を作り、計2面の研磨面を持つ。長さ20.42cm、幅6.95cm、厚さ6.05cm、重さ1.0kgを測る。

遺物から時期の特定は困難であるが、SB07と棟軸方向が同じであることから、古代Ⅱ期と考えられる。

柱穴 建物の一部として報告できなかった柱穴のなかに、当遺跡を検討するうえで良好な遺物が出土した柱穴がある。ここでは出土遺物を中心、
6穴（P01～P06：第121図・第126図）について報告する。

P01

北西建物群内に位置する（第121図）。SB03 北東梁行付近に位置する。須恵器の蓋（8）が出土している（第142図）。復元される口径が12.00cmと小型の蓋である。平たい天井部から口縁部は外彎気味に開き、端部を直角に垂下させる。天井部には回転ヘラケズり、内面には回転ナデを施す。

時期は古代Ⅱ期と考えられる。



第132図 P02内土器の検出作業

P02（写真図版46）

北西建物群内に位置する（第121図）。SB03 北隅付近に位置する。瓦器楕（12）が出土している（第142図）。手づくね成形後口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。内面にヘラミガキが粗く施されている。外面には暗文は認められない。炭素の吸着が不十分である。

時期は中世Ⅰ期と考えられる。

P03

南東建物群内に位置する（第126図）。SB06～P8と切り合い関係があり、これに切られている。須恵器の壺の口縁部片（9）が出土している（第142図）。斜めに開く頸部に屈曲して開く口縁部が付き、端部を上方に引き上げる。壺Lの口縁部と考えられる。

時期は古代Ⅱ期と考えられる。

P04

南東建物群内に位置する（第126図）。SB06 南東隅付近に位置する。須恵器の杯A（10）が出土している（第142図）。底部はナデ調整により仕上げられている。時期は古代II期と考えられる。



第133図 柱穴断面の観察

P05（写真図版46）

南東建物群内に位置する（第126図）。SB06とSB07の中間に位置する。須恵器の杯A（11）が出土している（第142図）。底部は、ヘラ切り後ナデ調整により仕上げられている。時期は古代II期と考えられる。

P06

南東建物群内に位置する（第126図）。SB07の北西部に位置する。土師器の碗もしくは杯の口縁部片（13）が出土している（第142図）。回転ナデ調整により仕上げられている。時期は古代II期と考えられる。

P07

北西建物群内に位置する（第121図）。SB01 東隅付近に位置する。須恵器の杯B蓋が出土している。古代II期と考えられる。

溝 4条（SD01～SD04）検出した（第120図）。

SD01

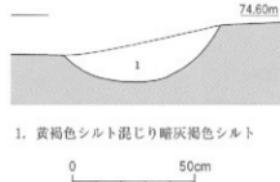
北西建物群の中央部に位置する（第121図）。数穴の柱穴と切り合い関係にあるが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。また、SD02との関係についても同様である。北西～南東方向にはば直線的にのびる溝で、北西側は調査区外に延び、南東端は調査区内で収束している。

検出長は10.80mで、検出面における幅は60cm～70cmである。横断面は緩やかなU字形をなす。最深部における深さは、北東側肩部から23cm、北西側肩部から10cmと、当溝を境に両側のレベルに顕著な差が認められる。

埋土は、黄褐色シルト混じり暗灰褐色シルト1層からなり（第134図）、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

遺物は、土師器・瓦器・白磁が出土している（第142図）。土師器は、小皿が2点（22・23）出土している。22は、底部をヘラ切り後ナデ調整により仕上げられ、口縁部が横ナデ調整により仕上げられている。23は手づくね成形後口縁部を中心にヨコナデ調整により仕上げられている。

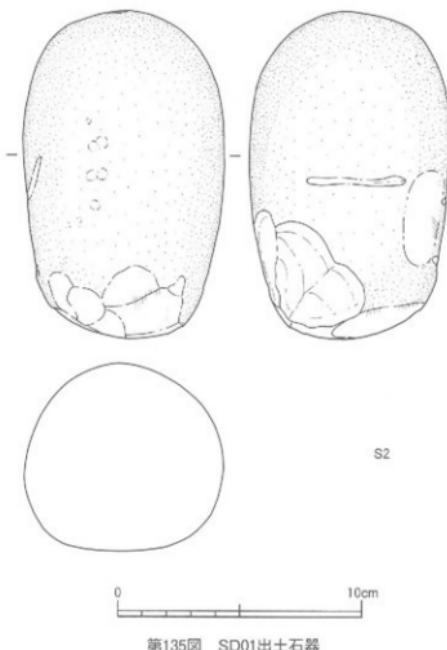
瓦器は、碗と小皿が出土している。碗は7点（14～20）出土している。20を除いては、手づくね成形後口縁部をヨコナデ調整により仕上げるタイプである。いずれも炭素の吸着が不十分である。暗文が



1. 黄褐色シルト混じり暗灰褐色シルト

0 50cm

第134図 SD01



第135図 SD01出土石器

13.31 cm、幅 8.2 cm、厚さ 8.6 cm、重さ 1.269g を測る。ただし、この遺物は当遺構の時期を反映したものではないと考えられる。

SD02

北西建物群の中央部に位置する（第121図）。SD01と直交する関係にあるが、調査では両者の前後関係を明らかにすることはできなかった。北東－南西方向にはほぼ直線的にのびる溝で、南西端は調査区内で収束している。検出長は3.20 mで、検出面における幅は35 cmである。横断面はU字形をなす。最深部における検出面からの深さは、5 cmである。

埋土は黄褐色シルトをブロック状に含む暗黒褐色シルト1層からなり、その層相から判断して人为的に埋められたものと考えられる。

遺物は、出土していない。遺物から時期を特定することはできないが、建物との関連から、中世Ⅰ期と考えられる。



第136図 SD03の検出作業

残存するものについては、内面のみで、外面には認められない。このなかで19の暗文は、他より細筋で密に施されている。また18の見込みには、二方向の平行暗文が施されている。一方20は、小片であるが、口縁部内端部が強いヨコナデにより沈線状をなしている。全体的に器壁が薄く、胎土も異なる。内外面とも暗文は認められず、炭素の吸着も不十分である。

小皿は21の1点で、手づくね成形後口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。

白磁は、IV類碗が1点（24）出土している。

この他、当遺構内からは敲石が1点（S2）出土している（第135図）。亜円礫を用いたものである。長軸方向の両端に敲打痕が残り、側面には擦痕が認められる。長さ

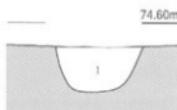
SD03（写真図版46）

調査区中央部で検出した（第120図）。北西建物群と南西建物群の中間に位置するが、両者とは方向性を異にする。東西方向にはほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区外にのびている。検出長は16.70mで、検出面における幅は36cmである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは18cmである。

埋土は黄褐色シルトをブロック状に含む暗黒褐色シルト1層からなり、その層相から判断して人為的に埋められたものと考えられる。

遺物は、製塩土器の焼塩壺が2点（25・26）出土している（第142図）。いずれも手づくねにより成形されている。25は、器壁は厚く、体部外面は横方向、内面は縱方向のナデを施している。26、器壁は厚く、口縁端部を内側に少し折り曲げる。外面ともナデ調整で、外面には指頭圧痕がある。奈良時代のものと思われる。

時期は、古代II期と考えられる。



1. 黄褐色シルト混じり
暗黒褐色シルト



第137図 SD03

SD04（写真図版46）

南西建物群の北部に位置する。SD05と切り合い関係にあり、SD05を切っている。北西～南東方向にはほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。検出長は3.10mで、検出面における幅は36cmである。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは5cmである。

埋土は明黄褐色シルト混じり灰褐色細砂1層からなり、その層相から判断して人為的に埋められたものと考えられる。

遺物は、土師器の小片が出土しているが、時期の特定は困難である。SD01と同方向であることから、中世I期と考えられる。

SD05

南西建物群の北西部に位置する。東西方向から南北方向に縫形に屈曲する溝で、北東端は調査区外にのび、南西端は調査区内で収束している。南西端の延長上には樋（SA01）がのびている。SD04と切り合い関係にあり、これに切られている。検出長は7.00mで、検出面における幅は60cmである。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さはわずか5cmである。

埋土は黄褐色シルトをブロック状に含む黄褐色細砂～シルト1層からなり、その層相から判断して人為的に埋められたものと考えられる。

また当溝は、SB05・SB06とその方向を同じくすることから、同時に機能していたものと考えられる。

遺物は、須恵器の小片が出土しているが、時期の特定は困難である。このため、遺物からの時期の特定は困難であるが、建物群との関係から古代II期と考えられる。



1. 黄褐色シルト混じり
灰褐色細砂～シルト



第138図 SD05

第3章 調査の成果

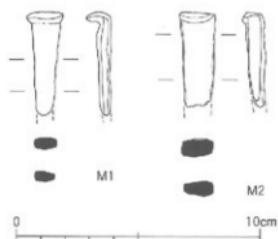
柵 1条 (SA01) 検出した (第120図・第126図)。南東SB群の北西側、SD05の延長線上に位置する。2穴の柱穴がSD05の延長線上に直列して検出されたことから、柵と判断したものである。2穴の柱穴間の距離は2.80mである。

遺物は、全く出土していないため、出土遺物からの時期の特定は困難である。ただし、SD05の延長と考えられることから、古代II期と考えられる。

(3) その他

当遺跡を検討する上で重要と考えられる遺物が、いわゆる包含層から出土している。以下、その概要を報告する。

包含層からは、土師器・須恵器・瓦器・綠釉陶器・施釉陶器・金属製品が出土している (第139図・第142図)。土師器は、高台付椀の高台部 (33) が出土している。高台高は1.20cmを測る。



第139図 C地区出土金属製品

されるものと考えられる。

瓦器は、椀 (31) と小皿 (32) が出土している。椀は底部を中心で残存し、見込みに不定方向の暗文が施されている。小皿は、手づくね成形後口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。内外面とも暗文は認められない。

綠釉陶器は29の1点のみである。須恵質の胎土で全面に釉が認められる。ただし、高台付から内側にかけては拭き取られている。東海系のもので、平安時代 (10世紀後半) と考えられる。

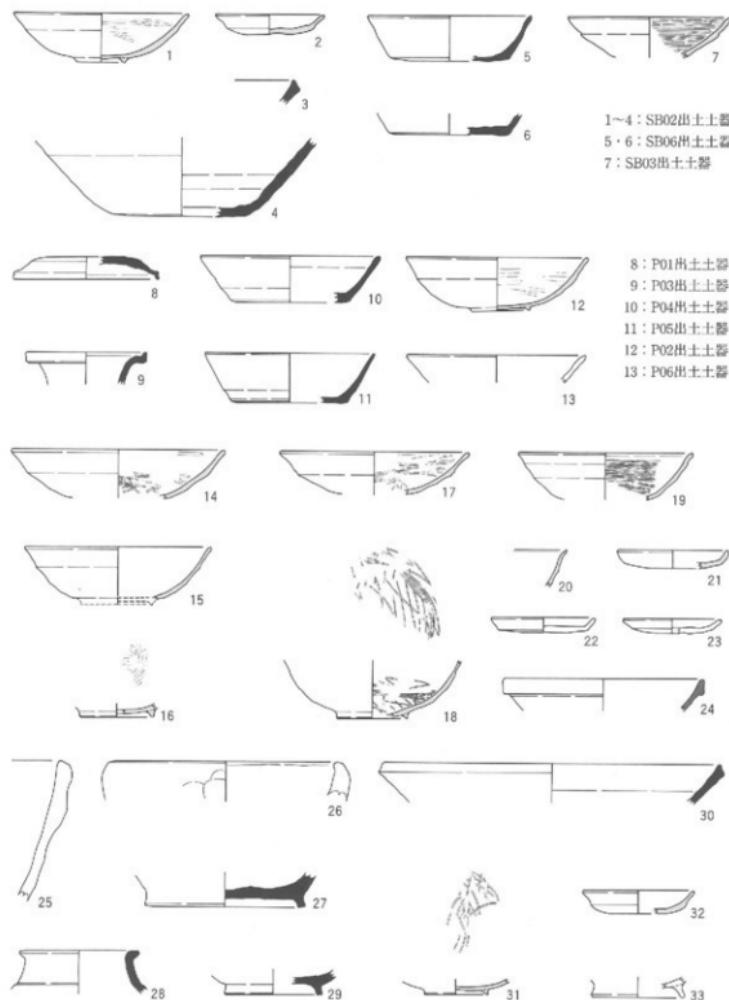
金属製品は、折れ釘が2点 (M1・M2) 出土している (第139図)。同タイプの釘で、断面長方形をなす。規模は、M1が1cm×5mm、M2が1.3cm×6.5mmである。M1が4.3cm、M2が3.9cm残存する。



第140図 山田小学校体験発掘



第141図 尾崎小学校体験発掘



第142図 C地区出土土器

第17表 出土土器観察表(1)

No	種別	器種	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存状況	焼成
1	瓦器	椀	SB02-P6	14.00	4.05	4.00	口縁部1/4・底部1/3	
2	瓦器	小皿	SB02-P3	8.90	1.70	4.00	1/2	
3	須恵器	捏鉢	SB02-P7		2.00		口縁部わずか	良好
4	須恵器	捏鉢	SB02-P7		6.40	10.15	底部1/2	良好
5	須恵器	杯	SB06-P9	13.40	3.70	9.80	1/3	やや不良
6	須恵器	杯	SB06-P9		1.80	9.80	底部2/5	不良
7	瓦器	椀	SB03-P6	13.30	3.35		口縁部1/7	
8	須恵器	蓋	P01	12.00	1.85		口縁部わずか・体部1/10	良好
9	須恵器	蓋	P03	9.70	2.70		口縁部わずか・頭部1/4	良好
10	須恵器	杯	P04	14.60	3.85	9.80	1/8	不良
11	須恵器	杯	P05	13.90	4.10	9.50	口縁部1/6	不良
12	瓦器	椀	P02	14.90	4.50	4.90	口縁部1/3・底部完存	
13	土師器	椀	P06	14.70	2.30		口縁部1/12	
14	瓦器	椀	SD01	17.20	4.00		口縁部1/6・体部1/4	
15	瓦器	椀	SD01	15.20	4.30		口縁部1/6	
16	瓦器	椀	SD01		1.10		底部1/6	
17	瓦器	椀	SD01	15.20	3.50		口縁部1/6	
18	瓦器	椀	SD01		4.80		底部1/3	
19	瓦器	椀	SD01	14.10	3.80		口縁部1/8	
20	瓦器	椀	SD01		3.05		口縁部わずか	
21	瓦器	小皿	SD01	9.00	1.45	5.70	1/4弱	
22	土師器	小皿	SD01	8.40	1.25	7.30	1/3	
23	土師器	小皿	SD01	7.90	1.20	4.80	1/2	
24	白磁	碗	SD01	16.20	2.60		口縁部1/6	
25	製塙土器	焼塙壺	SD03		11.60		口縁部～体部わずか	
26	製塙土器	焼塙壺	SD03	18.00	3.20		口縁部1/10	
27	須恵器	底部	包含層		2.90	13.20	底部完存	良好
28	施釉陶器	壺	包含層	9.70	3.60		口縁部1/6・頸部1/4	良好
29	緑釉陶器	底部	包含層		2.10	8.00	底部1/4	良好
30	須恵器	捏鉢	包含層	27.40	3.25		口縁部1/8	良好
31	瓦器	椀	包含層		1.30	5.35	底部1/3	
32	瓦器	小皿	包含層	9.00	1.90	4.60	1/4	
33	土師器	椀	包含層		1.70	7.60	底部1/4	

色 調	胎 土	備 考	挿図	図版
灰～暗灰	0.5～2.5mm大の長石含む	外面暗文無し。 高台高4mm。	142	47
暗灰～灰	0.5～1mm大のチャート・長石含む	炭素吸着不十分。内外面暗文無し。	142	47
灰			142	—
灰	8mm以下のチャート含む	内面使用痕不明瞭	142	—
灰～灰白		底部ヘラ切り	142	47
灰白			142	—
灰	0.5～2.5mm大の長石含む	外面暗文無し。炭素吸着不十分。	142	—
灰			142	—
灰白～灰			142	—
灰白			142	—
灰白～灰			142	—
灰～灰白	0.5～2mm大のチャート・長石・石英やや多く含む	高台高3mm。炭素吸着不十分。外面暗文なし。	142	47
灰白	0.5mm大の長石・チャート含む		142	—
灰～灰白	0.5mm以下の長石わずかに含む	炭素の吸着不十分。 外面暗文無し。	142	—
	0.5～1.5mm大のチャート・長石含む	炭素吸着不十分。 外面暗文無し。	142	—
灰	0.5～1mm大のチャート・長石・雲母含む	高台高7mm。	142	—
灰～灰白	0.5～1.5mm大の長石・チャート含む	炭素の吸着不十分。 外面暗文なし。	142	—
灰	0.5～1.5mm大の雲母・長石わずかに含む	外面暗文なし。	142	—
灰	0.5mm以下の長石わずかに含む	外面暗文なし。	142	—
灰白	1～8mm大の長石・チャート多く含む	炭素の吸着不十分。内外面暗文なし。	142	—
灰	0.5mm以下の長石わずかに含む	暗文なし。	142	—
にぶい黄橙～灰黄	0.5～4mm大の長石・チャート・石英含む	底部ヘラ切り。	142	47
にぶい橙	0.5～5mm大の長石・石英・クサリレキ含む		142	47
灰白			142	—
にぶい黄橙～にぶい橙	1～5mm大の石英・長石・チャート・クサリレキ含む		142	47
にぶい橙	1～4.5mmの長石・石英・クサリレキ非常に多く含む		142	47
灰		高台高1.0cm。	142	47
灰オリーブ～にぶい黄橙		頭径8.85cm。	142	47
灰・オリーブ灰	須恵質	高台高0.8cm。	142	47
灰	4mm以下のチャート含む		142	—
黄灰～暗灰	0.5～1.5mm大の長石・チャート含む	炭素の吸着不十分。外面暗文なし。	142	—
灰白～灰	0.5mm以下の長石含む	炭素吸着不十分。外外面暗文無し。	142	—
にぶい黄橙～にぶい黄褐	0.5mm以下の長石含む	高台高1.20cm。	142	—

3. 市教委（A 地区）の調査

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序と調査区の概要

調査区は、第60号水路を対象とし、南からA・B地区に分けた（第144図）。まず、A地区の調査について報告する。

A地区における基本層序は、旧耕作土・暗褐色砂質シルト・明黄褐色細砂の順で、これら各層はほぼ水平に堆積する。旧耕作土は6層に分かれ、約90cmの厚さを有する。暗褐色砂質シルト層からは平安時代～中世にかけての土器が出土した。これら土器の出土する範囲は、調査区南半に集中する。

遺構の検出

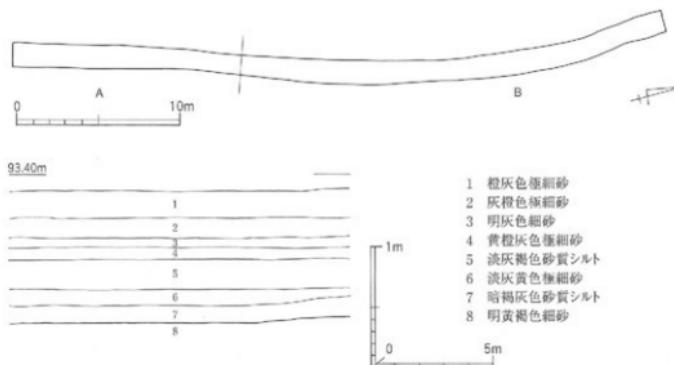
遺構は検出できなかった。

(2) その他

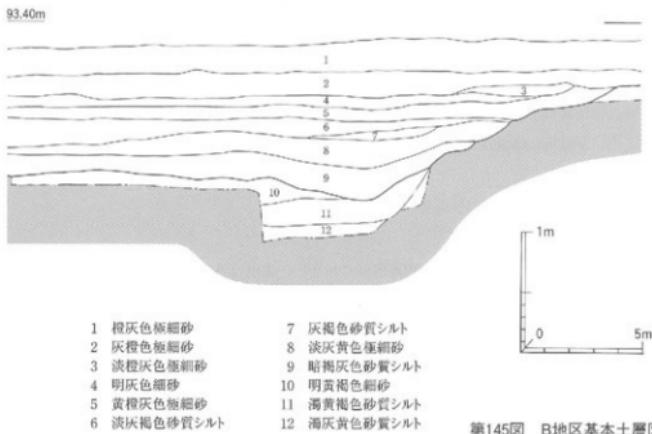
遺物包含層からは、須恵器・土師器・黒色土器・瓦器などの土器片が出土した。出土した土器の破片は小さく、量的にも少ない。固化できる遺物は無かった。



第143図 調査風景



第144図 A地区基本土層図



4. 市教委（B地区）の調査

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序

B地区における基本層序は、旧耕作土・暗褐色砂質シルト・明黄褐色細砂・濁黄褐色砂質シルト・濁灰黄色砂質シルト・基盤層の順である。基盤層は、北から南に向かって下っており、調査区北端では基盤層上に旧耕作土が堆積する状況である。暗褐色砂質シルト層からは平安時代～中世にかけての土器が、濁黄褐色砂質シルト層からは平安時代の土器が出土した。

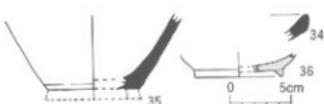
遺構の検出

遺構は検出できなかった。

(2) その他

暗褐色砂質シルト層からは須恵器・土師器・黒色土器・瓦器など、濁黄褐色砂質シルト層からは須恵器・土師器・黒色土器などの土器片が出土したが、量は少ない。その内、暗褐色砂質シルト層から出土した土器3点を図化した（第146図）。

34は東播系須恵器の捏鉢口縁部で、端部が丸みを帯びる。13～14世紀前半の土器である。35は須恵器壺の底部であるが、高台を欠損する。36は黒色土器底部で、内面に炭素を吸着させたA類であるが、炭素の付着が不十分である。



第146図 B地区出土土器

第18表 出土土器観察表(2)

No.	埋別	基種	地区	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	裏性 (cm)	保存状況	色 説	焼成	論 土	備考	持込	正版
34	渠跡	江跡	B地区	試合窯				口縁わずか	灰	良好	砂粒少ない。		146	49
35	須恵器	壺	B地区	試合窯		7.50		底邊わずか	灰	良好	砂粒少ない。クリヤリ難含む。		146	49
36	黒色土器	瓶	B地区	試合窯		7.30		底邊わずか	赤灰	良好	1mm大長石少量含む		146	49

第6節 七反田遺跡

1. 遺跡の概要

遺跡は、山田盆地最北端、山田川の左岸に位置する（第5図）。調査は、第49号水路部分を対象として実施した。全体調査面積は198 m²である。調査区は、南から順にA・B・C地区とした（第148図）。

2. 市教委（A・C地区）の調査

基本層序と調査区の概要

A・C地区は調査地北および南半の低地部分に相当し、遺構は検出できなかった。

A地区における基本層序は、約50cmの盛土下で砂層とシルト層が堆積し、地表下1.5mで淡灰白色粗砂に至る。その地点では湧水が激しい。本地区では、遺物包含層および遺構は検出できなかった。

C地区の基本層序は、盛土（約40cm厚）・旧耕作土（約60cm厚）・暗灰色砂質シルト（5.0～10.0cm厚）・淡黄灰色砂質シルトとなる。基盤層は南方方向へ次第に浅くなる。部分的に湧水が激しい地点が存在する。暗灰色砂質シルト層からは須恵器・土師器・瓦器などの土器片が少量出土した。



第147図 調査位置図

3. 市教委（B地区）の調査

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序

基本層序は、旧耕土・暗灰色砂質シルト・淡黃灰色砂質シルトで、暗灰色砂質シルト層は部分的に存在する。調査区北半は微高地を形成し、旧耕土の厚みは20.0cm程度と薄いが、南半の低地部では3層以上の堆積で、80.0cm以上の厚みを有する。暗灰色砂質シルト層からは、弥生土器・須恵器・土師器・黑色土器・瓦器など、弥生時代から中世にかけての土器や石器等の遺物が出土した。

遺構の検出

遺構は調査区北半の微高地部を中心に検出した。検出した面は1面である。

(2) 遺構と遺物

概要

溝3条、柱穴12基を検出した。調査区が狭小なため、遺構の性格などは不明である。

SD01

調査区南半で検出した溝で、ほぼ東西方向に伸びる。検出面での最大幅1.15m、深さ10cmの浅い溝で、弥生土器等が出土した。

柱穴

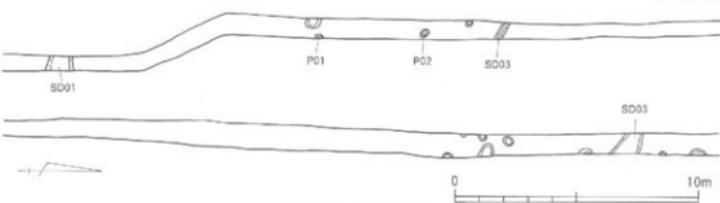
P01・P02は平面形が円形を呈する柱穴で、直径が32.0cmおよび30.0cmを測る。中世の土師器片が出土した。

(3) その他

包含層から出土した土器の内、弥生土器3点(1～3)を図化した(第150図)。1は甕の底部で、底部外面中央がわずかに窪むドーナツ状を呈し、体部外面に叩きを有する。

2は有孔鉢底部で、底部ほぼ中央に直径8cmの円孔を穿つ。体部外面には叩きを有する。

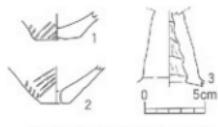
3は高脚底部で、中空の脚柱部内側に螺旋状に巻き上げた粘土紐の痕跡を認める。いずれも調査区北半の包含層から出土した。

第148図
地区割図

第149図 B地区平面図

第19表 出土土器観察表

No.	種類	断面	地層	測定値 (cm)	断面 (cm)	剖面記述	色調	焼成	施	土	参考	備註
1	弥生土器	甕	B地区 底層	3.80	底盤	底盤灰	底盤	底盤多く含む		130	50	
2	弥生土器	有孔鉢	B地区 底層	2.40	底盤	底盤	底盤	底盤多く含む	孔径 8cm	150	50	
3	弥生土器	高脚	B地区 底層			津屋	褐	高脚	長石多く含む	150	50	



第150図 B地区出土土器

第7節 狹間遺跡

1. 遺跡の概要

(1) 遺跡の位置

遺跡は、山田盆地南端、山田川左岸の低位段丘上に位置する（第5図）。西方から山田川に向かって伸びる2本の谷状地形に挟まれた微高地が遺跡の範囲である。谷状地形を隔てた北側の微高地上に筒井遺跡、南側に大歳遺跡、山田川を隔てた東対岸に宇和田遺跡が存在する。

(2) 調査の概要

調査は、第39-1号水路・第39号水路・第37号水路を対象として実施した。全体の調査面積は230m²である。調査区は、第39-1号水路を中心とした範囲をA地区、第39号水路を中心とした範囲をB地区、これらからはやや南に離れた第37号水路を中心とした範囲をC地区とした。

2. 市教委（A地区）の調査

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序



第151図 調査位置図

A 地区の基本層序は、旧耕土・黄灰色砂質シルト・明黄褐色土（基盤層）となり、黄灰色砂質シルト層が遺物包含層を形成する（第152図）。本調査区は、遺跡が立地する微高地北側縁辺部に位置するため、基盤層は谷部に向かって北側へ傾斜している。そのため、遺物包含層は調査区北半の斜面下方を中心に存在し、南半では後世の削平を受け、基盤層上に旧耕作土が堆積する。なお、二次堆積ではあるが、旧耕土層からも土器を中心とした遺物が出土した。

遺構の検出

遺構は、基盤層を形成する明黄褐色土層上面で検出した。遺構を検出した面は1面である。

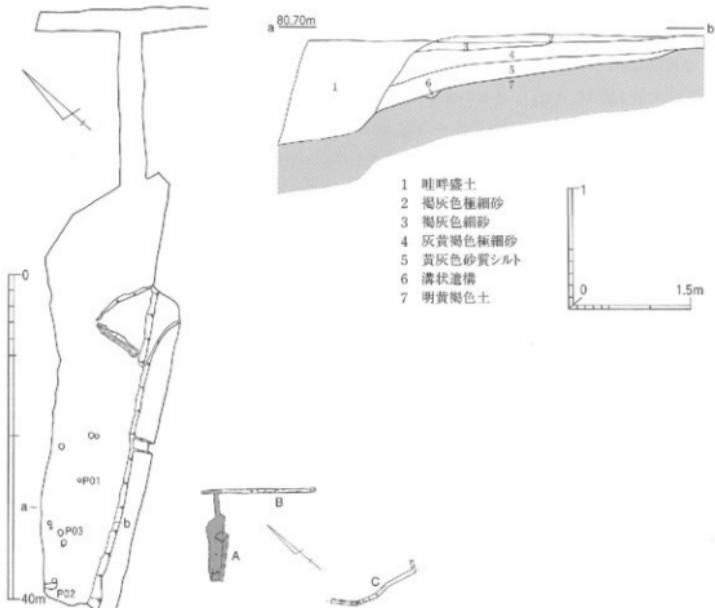
(2) 遺構と遺物

概要

溝・柱穴などの遺構を検出したが、遺構の数は少ない。遺構の中心は、本調査区南の微高地上にあるものと想定できる。

柱穴

約10基の柱穴を検出したが、建物の柱穴の可能性のある遺構は確認できなかった。その内、P01からは須恵器・土師器、P02からは須恵器が出土した。いずれも平安期の遺構である可能性が強い。一方、P03からは須恵器・土師器・瓦器が出土した。こちらは中世の遺構と考えられる。しかし、いずれの遺構からも岡化しうる土器は出土しておらず、詳細な時期は不明である。



第152図 A地区基本土層図および平面図

(3) その他

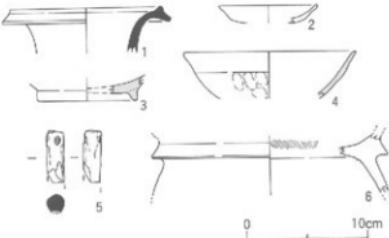
包含層から出土した遺物には、須恵器・土師器・黒色土器・瓦器などの土器類と金属製品、石器などがある。出土土器の内、図化できたのは、須恵器の壺(1)・土師器の皿(2)・棒状土錘(5)・用途不明の土器(6)・黒色土器の椀(3)・瓦器の椀(4)の6点である。

1は口縁部の破片で、内外面ともに回転ナデ調整により、端部を上下に拡張する。2も

口縁部の破片である。成形にはロクロを用いず、口縁部をヨコナデで調整し、端部は丸く取める。底部はやや丸みを帯びる。5は土師質の棒状土錘である。両端に小さな円孔を穿つものと考えられるが、一端を折損する。中央部の直径が1.40 cm、残存長4.30 cm、重さは10.7 gを測る。6は用途不明の土師器である。上下の体部を丸く。肩曲部外面に断面三角形の凸帯を貼り付ける。上部内面は中心から外に向かって放射状のハケ調整を認め、下部内面は横方向のハケあるいは板ナデ調整を施す。外面は観察困難であるが、凸帯部分は横方向のナデ調整である。3は椀底部の破片である。外面に断面三角形の高台を貼り付ける。内面のみ炭素を付着させた黒色土器A類である。4は口縁部の破片である。口縁部をヨコナデで調整し、端部は丸く取める。体部外面下半には指押さえによる凹凸を明瞭に残す。いわゆる和泉型の瓦器碗である。以上のように、包含層から出土した土器には、平安期を中心とした時期の土器と、中世の土器とが認められる。

金属製品としては、銅鏡(M1)1点がある。直径が2.30 cmで、厚さ1 mmに満たない薄い鏡で、両面ともに文字は読み取れない。あるいは無文鏡の可能性もある。遺物包含層から出土した。

石器は、石鎚(S1)とスクレイパー(S2)がある。いずれもサスカイト製の石器である。S1は、基部を深く抉る凹基式の石鎚で、基部先端は丸みを帯びる。全長2.80 cm、厚さ0.35 cm、重さは1.20 gで、左右の基部の長さが異なる。S2は剥片表面の一側縁にのみ刃部を設ける。全長3.50 cm、幅2.50 cm、厚さ0.70 cm、重さ5.6 gである。



第153図 A地区出土土器



第154図 出土銅鏡

第155図 出土石器

第20表 出土土器観察表(1)

No.	種別	器種	地区	通鑑名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	保存状況	色	質	地紋	胎土	参考	津田	固様
1	須恵器	壺	A地区	混含層	17.20			口縁部わずか	灰	良好	1mm大穴含む		153	51	
2	土師器	皿	A地区	混含層	8.00			口縁部わずか	灰	良好	砂粒少ない、クリヤリ混含む。		153	51	
3	黒色土器	椀	A地区	包含層			8.00	底端わずか 内:黒	灰好	砂粒少ない、クリヤリ混含む。			153	51	
4	瓦器	碗	A地区	混含層	16.00			口縁部わずか	灰好	良好	砂粒少ない%		153	51	
5	土師器	棒状土錘	A地区	混含層				50%	灰白	良好	1mm大の方底、底多く、金属 溶け少含む		153	51	
6	土師器		A地区	混含層				浅黄褐	良好	1~2mm入の石英、黄石、クリヤリ 混含む。		153	51		

3. 市教委(B・C地区)の調査

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序は、A地区に準ずる。遺物包含層からは、律令期から中世にかけての土器や弥生時代の石器等が出土した。遺構は基盤層上面の1面で検出した。律令期と中世の2時期の遺構が存在する。

(2) 遺構と遺物

土坑・溝・柱穴等を検出した。

その内、B地区中央部に柱穴が集中する箇所を認める。40cm以上深いを有する柱穴と考えられる遺構も存在するが、調査区が狭小なため、建物跡を確認するには至らなかった。

これら、柱穴内から出土した遺物には、須恵器・土師器など律令期のものと、それに瓦器を加えた中世のものが存在する。これらの土器から詳細な時期を確定することは困難であるが、おおむね律令期は10~11世紀頃、中世は13~14世紀頃を中心と考えられる。8の土師器皿はP07、9の土師器甕はP10、10の瓦器碗はP11出土の土器であるが、いずれも中世の土器である。

また、土坑からも須恵器・土師器・瓦器などの土器片が出土した。大半は中世の土器であるが、SK02からは平安時代の遺物が出土しており、当該期の遺構と考えられる。出土遺物の中に製塙土器(11)がある。厚さが1.1cmの厚手の製塙土器で、二次焼成を受けており、使用後の土器と考えられる。また、7はSD01から出土した須恵器の皿である。

(3) その他

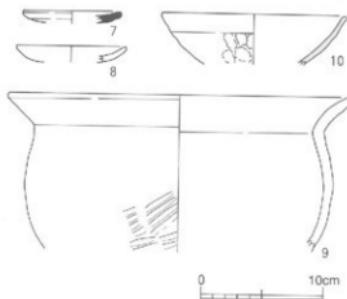
包含層からも土器を中心とした遺物が出土した。須恵器・土師器・黒色土器・瓦器など、律令期から中世にかけての土器片が大半を占める。いずれも細片化しており、同化できる土器はほとんど存在しない状態であった。

第21表 出土土器観察表(2)

No	種別	番号	地区	遺構名	口径(cm)	脚高(cm)	底径(cm)	保存状況	色 調	焼成	胎 土	備考	津田	因縁
7	須恵器	II	C地区	SD01	8.00			口縁部わずか	灰白	良好	「灰人」黄石少量含む。		157	51
8	土師器	II	B地区	P07	9.00			口縁部わずか	に赤い	良好	「灰人」黄石多く含む		157	51
9	土師器	II	B地区	P10	28.00			1/4	に赤い	良好	「灰人」黄石多く含む		157	51
10	瓦器	II	B地区	P11	15.00			口縁一部鉢	灰	良好	砂粒少なし。		157	51
11	製塙土器		C地区	SK02				口縁一部鉢	須多層	良好	2~3mm大石英・黄石を多量に 含む。	二次焼成有 り。	-	51



第156図 B・C地区平面図



第157図 B・C地区出土土器

第4章　まとめ

第1節　遺物

1. はじめに

前章において、7遺跡の調査成果について報告してきた。この結果、これらの遺跡において、弥生時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代の遺構・遺物が明らかとなった。

ところで、上記7遺跡は、位置的に近接するものであり、互いに密接に関係していたものと考えられる。そこで、今回の調査で明らかとなった遺物について、時代ごとに7遺跡を一括してまとめていくことにしたい。そのうえで、7遺跡の関係について検討する材料としたい。なお、時代区分であるが、平安時代に関しては、前半については奈良時代と、後半については鎌倉時代と合わせてまとめていくこととする。また、本節では、土器を検討の主対象とする。

なお、遺物番号は遺跡単位で付けている。そこで、本節では混乱を避けるため、「白○」「宇○」のように、挿図を中心に、遺物番号の前に各遺跡名の頭の文字を付けている。

2. 弥生時代

当該期の土器は、いずれも包含層から出土したもので、遺構に伴うものは認められない。出土したのは、白生遺跡・宇和田遺跡・七反田遺跡の3遺跡に限られる。いずれも、弥生時代後期に位置付けられるものである。ただし、数量的にわずかであり、小片での出土であるため、詳細な検討は困難である。少なくとも、当地における歴史が当該期まで遡ることを示す資料として、位置付けたい。

3. 奈良時代～平安時代前期

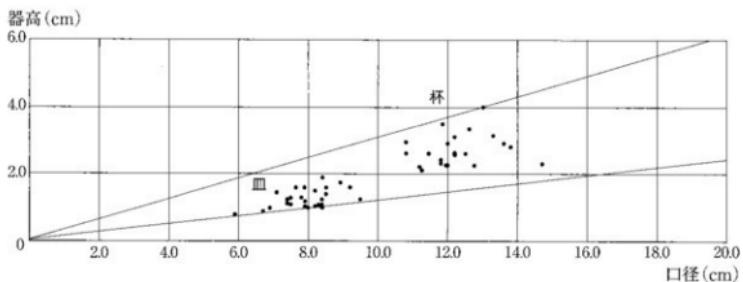
当該期の遺物は、白生遺跡・筒井遺跡・宇和田遺跡・大歳遺跡・五反田遺跡・狹間遺跡から出土している。しかし、一部を除いては遺構に伴うものではなく、包含層からの出土である。上記3遺跡のなかでは、白生遺跡と五反田遺跡でややまとまって当該期の土器が出土している。ここでは、両遺跡出土土器を中心におく。

白生遺跡では、須恵器と土師器が出土している。須恵器では、杯A(7・8)・杯B蓋(9・10)・杯B(11～14・30)・皿(15・31)・鉢(16)・壺(17～19)が出土している。土師器では、杯A(22・23)と壺(24・25)が出土している。また、製塙土器(20・21)についても当該期に位置付けられるものと考えられる。以上の白生遺跡出土土器のなかで、10の土師器杯B蓋は奈良時代後半に、20・21の土師器杯Aは奈良時代中頃に、それぞれ位置付けられるものと考えられる。

五反田遺跡では、須恵器が出土している。器種としては杯A(5・6・10・11)・蓋(8)・壺(9)が出土している。杯Aと壺については、9世紀末～10世紀初頭とされる喜住西遺跡(洲本市:旧津名郡五色町)溝11出土資料⁽¹⁾に類例を求めることができる。

このほか、筒井遺跡では、須恵器の杯B(46・47)と皿(48)が出土している。宇和田遺跡では杯Bが1点(33)出土している。

さらに、黒色土器碗が3個体(大歳遺跡52・五反田遺跡36・狹間遺跡3)出土しているが、いずれもA類(内黒タイプ)に分類されるものである。喜住西遺跡溝11出土資料から、9世紀末～10世紀



第158図 土師器皿・杯の法量分布

初頭に位置付けられる。

以上から、当該期の遺物は、8世紀～9世紀を中心とした時期(古代Ⅰ期)と9世紀末～10世紀初頭(古代Ⅱ期)の2時期に区分することができる。

4. 鎌倉・室町時代

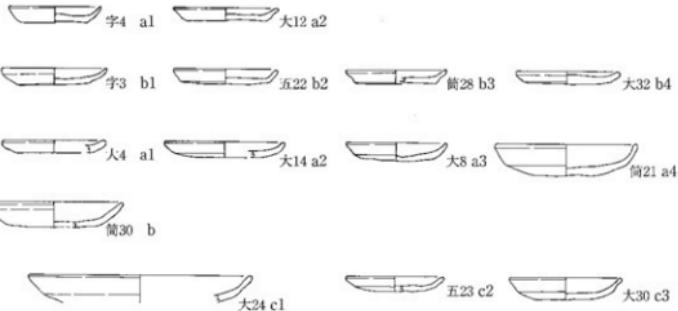
(1) 出土器種の分類

土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・青磁・白磁・陶器の各器種が出土している。なお、当該期の土器の検討においては、量的にまとまって出土している県教育委員会の調査に伴う成果を中心にまとめていくこととする。

土師器 皿・杯・碗・鉢・壺が出土している。

皿類と杯類については、一見したところ分別が困難な点も認められる。そこで、まず両者の分類を行う。第158図が皿および杯に分類される土師器の法量分布である。これによると、①口径10cm・器高2cm以下のグループと、②口径10cm・器高2cm以上のグループに、大きく分類できる。さらに、両者に分類される個体をみると、一般的に①が皿、②が杯と称されているものである。そこで、本報告では、①を皿、②を杯と分類・呼称することにする。ただし、大歳遺跡24については、法量からみると杯に

皿A



第159図 土師器皿の分類

分類されるが、その形態的特徴から本報告では皿に分類する。

皿は、その製作にあたって輪轂を使用するもの（皿A）と使用しないもの（皿B）に大きく分類することができる（第159図）。

皿Aについては、底部を回転糸切りに切り離すタイプ(a)・ヘラ切りにより切り離すタイプ(b)、とに細分することができる。Aaについては、さらに口径に対して器高が高いもの(a1:宇和田遺跡4・5)、口径に対して器高の低いタイプ(a2:大歳遺跡12・25)に細分できる。また、Abについては、口縁部がヨコナデにより内湾気味に立ち上がるタイプ(b1:宇和田遺跡3)、口縁部がヨコナデにわずかに直線的に立ち上がるタイプ(b2:五反田遺跡22)、口縁部が短く直線的に立ち上がり、底部から口縁部にかけての内面変換部が不明瞭なタイプ(b3:筒井遺跡28・大歳遺跡11・宇和田遺跡7)、口縁部が短く、立ち上がりが極わずかなタイプ(b4:大歳遺跡32)、に細分できる。

皿Bについては、輪轂を使用せず、手づくね成形を基本とするものである。ただし、その仕上げ方法により、3タイプ(a・b・c)に細分できる。

Baは、体部から口縁部にかけて均等なヨコナデ調整により仕上げられ、口縁部が内湾傾向にあるものである。底部から口縁部にかけての器壁に顕著な差が認められない点が一つの特徴である。さらに、口縁部が短く、その立ち上がりがわずかなタイプ(a1:大歳遺跡4・筒井遺跡6)、a1より口縁部が長く、立ち上がりも明確なタイプ(a2:大歳遺跡7・14)、a2よりさらに立ち上がりが顕著で指一版分あるタイプ(a3:大歳遺跡8・31・筒井遺跡23)、口径・器高ともに大型でいわゆる大皿と称されるタイプ(a4:筒井遺跡21)、の4タイプに細分できる。

Bbは、口縁部付近を特に強いヨコナデ調整により仕上げるもので、筒井遺跡30の1個体が該当する。

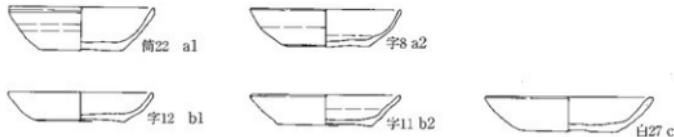
Bcは、口縁部が体部に対して特に強いヨコナデ調整により仕上げられ、底部に対して口縁部の器壁が顕著に薄いものである。口縁部が直線的もしくは外反傾向にある点が一つの特徴である。さらに、口径・器高が大型でいわゆる大皿に分類されるタイプ(c1:大歳遺跡24)、Bcのなかでは比較的ヨコナデが弱いタイプ(c2:五反田遺跡23)、体部に対して口縁部が顕著に強いヨコナデ調整が加えられ、体部との境に顕著な段もしくは稜が認められ、体部に対して口縁部が薄く仕上げられるタイプ(c3:大歳遺跡13・15・30・筒井遺跡24・25)、c3に対して口縁部の立ち上がりがわずかで口縁部が極端に薄いタイプ(c4:宇和田遺跡6)、の4タイプに細分できる。c3がBcタイプの典型例と考えている。

杯は、皿同様、その製作にあたって輪轂を使用するもの（杯A）と使用しないもの（杯B）に大きく分類できる（第160図）。

杯Aについては、底部の切り離しが回転糸切りによるもの(a)、静止糸切りによるもの(b)、ヘラ切りによるもの(c)、の3タイプに細分できる。aについては、口径に対して器高の深いタイプ(a1:筒井遺跡22)と浅いタイプに細分できる(a2:宇和田遺跡8)。bについても、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるタイプ(b1:宇和田遺跡12)と口縁部が直線的にのびるタイプ(b2:宇和田遺跡10・11・35・36)に細分できる。cタイプについては白生遺跡27の1点が該当する。

杯Bについては、口径に対して器高の高いタイプ(a)と、浅いタイプ(b)に細分できる。aタイプについては、さらに全体的に器壁が薄く仕上げられるタイプ(a1:筒井遺跡31)と、器壁が厚く粗く仕上げられるタイプ(a2:大歳遺跡5)に細分できる。bタイプについては、底部から口縁部にかけての変換部が明瞭なタイプ(b1:筒井遺跡3・32)と、不明瞭なタイプ(b2:宇和田遺跡2)に細分できる。b1については、法量によりさらに細分可能である。

杯A



第160図 土器器杯の分類

以上のはか、字和田遺跡9と五反田遺跡13については、残存状況が良好でないため、上記の細分に当てはめることはできなかった。ただし、字和田遺跡9については、その形状から杯Aに分類できるものと考えられる。

椀は、五反田遺跡出土の33の高台付椀1個体である。底部のみの残存で、外方に踏ん張る高台が貼り付けられている。

鉢は、半球形をなすタイプ（杯A）と壠形で片口を有するタイプ（杯B）の2タイプが認められる。杯Aは大歳遺跡出土19、杯Bは同じく大歳遺跡出土22の、各1個体である。

壠は、白生遺跡で体部から口縁部にかけての小片（29）が、字和田遺跡と筒井遺跡から三足の足が出土している。白生遺跡出土例についても、三足壠の一部と考えられる。また、字和田遺跡と筒井遺跡において、羽釜形の壠（字和田遺跡54・筒井遺跡52）が出土している。

須恵器 挿・捏鉢・壠・羽釜が出土している。いずれも東播系須恵器と称されるものである。

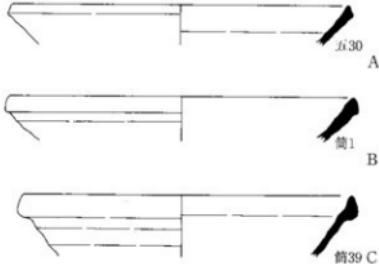
椀は、3個体（大歳遺跡20・白生遺跡26・筒井遺跡4）出土しているが、いずれも同タイプに分類されるもので、12世紀後半～13世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

捏鉢は、口縁部を中心に分類すると、端部の拡張が上方に意識されたタイプ（A）、下方に意識されたタイプ（B）、端部を大きく拡張するとともに内上方へのつまみ出しを意識したタイプ（C）の3タイプに分類できる（第161図）。Aタイプは

五反田遺跡30と筒井遺跡18が該当し、12世紀前半～中頃に位置付けられる。Bタイプは筒井遺跡1と同38が該当し、12世紀後半に位置付けられる。Cタイプは筒井遺跡38・同39が該当し、14世紀前半に位置付けられる。壠は、1個体（大歳遺跡38）のみ出土している。羽釜は、1個体（大歳遺跡37）のみ出土している。

瓦器 挿・小皿・鉢が出土している。

椀は、大きく2タイプに分類できる（第



第161図 須恵器捏鉢の分類

162図)。一つは、いわゆる和泉型瓦器椀に分類されるもの(椀A)である。もう一タイプは、形態的には杯形をなし底部に高台が貼り付けられないタイプ(椀B)である。ただし、いわゆる和泉型瓦器椀の高台のない終末期のタイプとは異なるものである。

椀Aについては、法量および製作技法から9タイプ(a~i)に細分できる。いずれも炭素の吸着が不十分である特徴が共通して認められる。

aは、完形に復元できるものはないが、椀Aのなかでは最も深い椀形を呈するものである。五反田遺跡15及び五反田遺跡18が該当する。残存状況から、外面の暗文の有無は判断できないが、内面は比較的密に施されている。高台は断面三角形を呈する。

bは、aと口径はほぼ同じであるが、やや器高が低くなるものである。五反田遺跡12・大歳遺跡1を典型例とし、他に五反田遺跡1・大歳遺跡28が該当する。また大歳遺跡26についても当タイプに分類される可能性が高い。径高指数は27~30である。外面に暗文が施されたものではなく、高台は断面三角形を呈する。

cは、法量的にはbと大差ないものであるが、口縁部が2段のヨコナデ調整が施され、内面の暗文が細筋である点が特徴的である。外面に暗文は施されていない。

dもbタイプと特徴をほぼ同じくするが、法量が全体的に小型化したものである。径高指数は26である。内面の暗文がやや粗くなる傾向が認められる。筒井遺跡14を典型例とし、他に筒井遺跡12・筒井遺跡13・大歳遺跡3が該当する。ただし、筒井遺跡14は杯形を呈することから、さらに細分される可能性も考えられる。

eは、口径が15cm以上と大型であるが、口径に対して器高が顕著に低いタイプである。径高指数は24である。外面に暗文は施されず、高台は断面三角形を呈する。

fは、口径が13cm以下と小型の椀である。底部まで残存するものは認められないが、径高指数はeタイプより大きいものと推測される。内面の暗文はかなり密に施されている。五反田遺跡7と筒井遺跡9が該当する。

gも小型の椀で、fより浅くなるタイプである。径高指数は27である。筒井遺跡15が該当する。

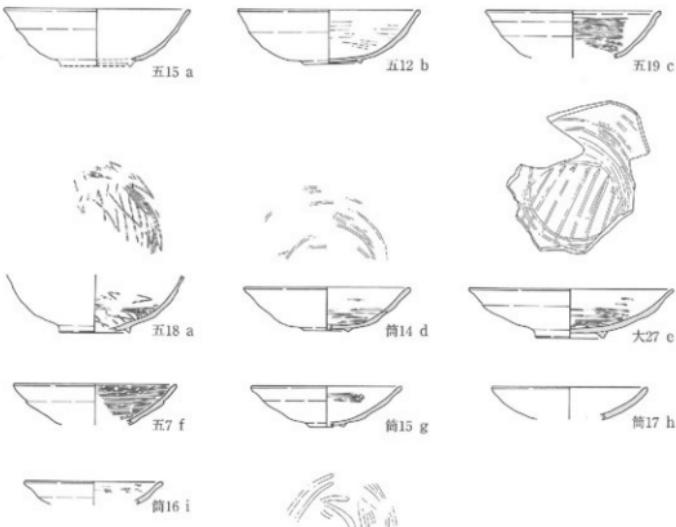
hは、全体的に皿状をなすタイプである。底部まで残存するものがいため明確にはできないが、高台が消滅している可能性も考えられる。筒井遺跡8と筒井遺跡17が該当する。

iもh同様の形態的特徴を有し、より小型化したものである。筒井遺跡16が該当する。

椀Aの時期については、法量・製作技法等をもとに尾上編年に対応させると、椀AbがⅢ-3期(13世紀前半~中葉)に、椀Af・同AgがⅣ-2期に、椀AhがⅣ-3期に位置付けられる。また、椀Aa・Ad・Aeについては、五反田遺跡SD01で椀Abと共に伴っている。したがって、これらについても椀Abと同様のⅢ-3期を中心とした時期に位置付けられるものと考えられる。ただし、椀Aeについては法量的に新しい傾向にあることから、Ⅳ-1期に近いものと考えられる。また、椀Aiについても、筒井遺跡P08で椀Agと共に伴していることから、Ⅳ-2期(14世紀前半~中葉)に位置付けられる。

椀Bについては、形態的に和泉型をはじめとした一般的な瓦器椀の範疇では理解できないものである。しかし、焼成によること、暗文が内面に認められることなどから、瓦器として理解できるものである。Bタイプは、いわゆる杯形を呈するタイプ(a)と、椀形に近いタイプ(b)に細分できる。さらに、aについては、法量から、深いタイプ(a1:白生遺跡28)と浅いタイプ(a2:筒井遺跡2・11・33・34)に分類できる。bタイプについては、大歳遺跡21の1個体である。

椀A



第162図 瓦器椀の分類

椀Bの時期については、まず椀Bbが大歳遺跡P07において東播系須恵器椀と共に作っている。よって12世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。椀Ba2については、共伴例とまではいかないが、筒井遺跡SB01において、同じ建物を構成する柱穴内から東播系の須恵器碗が出土している。よって、当型式についても12世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。このほか、Balについても13世紀前半を中心とした時期に位置付けられるものと考えられる。

なお、小片ではあるが、五反田遺跡において、口縁端部内面がわずかに沈線状を呈するタイプが出土している（五反田遺跡20）。このタイプについては、本来は椀A・椀Bとは別のタイプに分類される可能性が考えられる。

小皿は、5個体出土している。個体数が少ないため、分類は控えるが、法量的に小型の大歳遺跡9と大型の大歳遺跡16・五反田遺跡2・五反田遺跡21・五反田遺跡32が認められる。また、暗文が認められるのは大歳遺跡16に限られ、内面に施されている。いずれも、13世紀前半に位置付けられる。

鉢は、大歳遺跡23と大歳遺跡29の2個体である。小片での出土であるため詳細な検討は困難であるが、2個体ともほぼ同タイプに分類できるものと考えられる。

このほか、瓦質の鍋が1点（筒井遺跡5）出土している。

青磁 碗が5点出土しており、同安窯系の碗1点（大歳遺跡34）を除いては、龍泉窯系の青磁碗である。外面に籠をもつ蓮弁が認められるタイプ（筒井遺跡29）、鎬を持たない蓮弁が認められるタイプ（筒井

遺跡37)、内面見込みに割花文が認められるタイプ(大歳遺跡39)、内外面とも無紋のタイプ(大歳遺跡2)が認められる。

白磁 碗・皿・壺が出土している。碗は、いわゆるIV類碗に分類されるもので、五反田遺跡24と大歳遺跡36の2点出土している。皿は、筒井遺跡36の1点のみである。壺も、大歳遺跡35の1点のみである。四耳壺の体部と考えられる。

陶器 大歳遺跡で天日茶碗が1点(33)出土している。

(2) 時期の検討

山田地区遺跡が位置する淡路においては、岸本一宏⁽²⁾と西口圭介⁽³⁾による分析を除いては、当該期の土器の研究は全く進んでいない。このため、須恵器と瓦器を除いては、年代観が確定した器種は認められない。そこで、ここでは土師器の皿・杯類について、①前項での検討結果・②須恵器・瓦器との共伴関係・③島内を中心とした他遺跡での類例、を中心に検討をしていくたい。

皿A 以下を根拠として、皿Aa1は14世紀後半～15世紀前半に、皿Aa2は13世紀以降に、皿Ab1は14世紀後半～15世紀前半に、皿Ab2は13世紀前半に、皿Ab3は13世紀代に、それぞれ位置付けられる。なお、皿Ab4については、時期を明らかにすることはできない。

a1：宇和田遺跡4の類例が14世紀後半～15世紀前半とされる寺中遺跡溝15出土資料⁽⁴⁾に認められる。

a2：大歳遺跡25が13世紀以降と考えられる須恵器碗の口縁部片と共に伴している。

b1：同じ建物を構成する柱穴内から14世紀後半～15世紀前半と皿Aa1が出土している。

b2：五反田遺跡SD01において、13世紀前半に位置付けられた瓦器碗Aa・Ac・Ad・Aeと共に伴している。

b3：大歳遺跡11が大歳遺跡SB03～P5において、皿Bc3とともに13世紀代の東播系須恵器碗と共に伴している。

皿B 以下を根拠として、皿Ba1・皿Ba2・皿Ba3・皿Bc1・皿Bc2・皿Bc3は13世紀前半に、皿Bbは14世紀中頃に、皿Bc4が14世紀後半～15世紀前半に位置付けられる。他については、時期の特定は困難である。ただし、皿Ba4については、その形態から、13世紀前半を中心とした時期と考えられる。

a1：当タイプが出土した大歳遺跡SB01を構成する柱穴から、13世紀前半に位置付けられた瓦器碗Abが出土している。

a2：大歳遺跡7と大歳遺跡14がともに、13世紀前半と考えられる大型の皿と共に伴している。

a3：13世紀前半とされる平見遺跡(淡路市：旧北淡町)SX-1で、同タイプの小皿が出土している⁽⁵⁾。

b：筒井遺跡30が筒井遺跡SD07において、14世紀中頃とされる土師器杯Bb1と共に伴している。

c1：大歳遺跡24が大歳遺跡SK01において、13世紀前半の瓦器碗Abと共に伴している。

c2：皿Ab同様、五反田遺跡SD01において、13世紀前半に位置付けられた瓦器碗Aa・Ac・Ad・Aeと共に伴している。

c3：筒井遺跡25が筒井遺跡P13において13世紀代の瓦器碗と共に伴している。大歳遺跡10が13世紀代の東播系須恵器碗と共に伴している。

c4：宇和田遺跡6が出土した同じ建物を構成する柱穴内から14世紀後半～15世紀前半とされる皿Aa1が出土している。

杯A 以下を根拠として、杯Aa1が13世紀後半～14世紀前半に、杯Aa2が14世紀後半～15世紀前半に、杯Ab1・杯Ab2が15世紀後半に、それぞれ位置付けられる。杯Acについても、14世紀を中心とし

時期が考えられる。

a1：筒井遺跡 22 が筒井遺跡 P12において、断面蓮鉢形をなす瓦器椀底部片が共伴している。

a2：宇和田遺跡 8 の類例が、共伴する備前焼・須恵器から 14 世紀後半～15 世紀前半と考えられる寺中遺跡溝 15 に認められる。

b1：宇和田遺跡 SK01において、杯 Ab2 と共に伴している。

b2：宇和田遺跡 35 の類例が、15 世紀後半とされる⁽⁶⁾寺中遺跡土坑 6 に認められる。

杯 B 以下を根拠として、杯 Ba1 が 14 世紀中頃に、杯 BA2 が 13 世紀代に、杯 Bb1 が 14 世紀中頃に、杯 Bb2 が 12 世紀後半～13 世紀前半に位置付けられる。他については時期の特定は困難である。

a1：筒井遺跡 31 が筒井遺跡 SD07において、杯 Bb1 と共に伴している。また、同タイプの皿が京都の編年において 14 世紀中頃から後半に位置付けられている⁽⁷⁾。

a2：大歳遺跡 5 の類例が、12 世紀～13 世紀の鈴田遺跡溝 SD－3 一括資料中⁽⁸⁾に認められる。大歳遺跡 5 が出土した建物を構成する柱穴内から 13 世紀代の瓦器椀が出土している。

b1：他地域では 14 世紀中頃の資料に認められるタイプである⁽⁹⁾。

b2：12 世紀後半～13 世紀前半とされる筒井遺跡 SB01 を構成する柱穴内から出土している。

この他、五反田遺跡出土 13 についても、國化できなかったが五反田遺跡 10 と同タイプの須恵器と共に伴していることから、古代 II に位置付けられる。

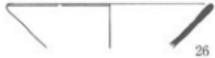
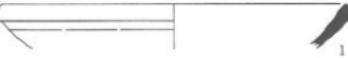
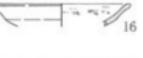
以上の検討結果から、当該期の土器は、大きく 12 世紀後半～13 世紀を中心とした時期（中世 I 期）と、14 世紀～15 世紀にかけての時期（中世 II 期）の 2 時期に、区分することができる。ただし、この 2 時期については、時期差を内包しているものと考えられる。しかし、良好な一括資料が少ないとから、本報告では同じ時期として括ることにする。以上をまとめたのが、第 163 図と第 164 図である。

(3) 小結

瓦器椀の B タイプについては、当遺跡群において特徴的な椀である。類例として、尾崎堂ノ鼻遺跡⁽¹⁰⁾（淡路市：旧一宮町）SK02・平見遺跡（淡路市：旧北淡町）・寺中遺跡（洲本市）建物址 7・志筑庵寺跡⁽¹¹⁾（淡路市：旧津名町）・瀬ノ向遺跡⁽¹²⁾（淡路市：旧一宮町）で認められる。時期を特定できる良好な一括資料に伴う例は認められないが、尾崎堂ノ鼻遺跡・志筑庵寺跡では、13 世紀前半に位置付けられている。なお、寺中遺跡では皿として報告されている。

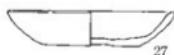
淡路島以外では、西田井遺跡⁽¹³⁾（和歌山県和歌山市）・秋月遺跡⁽¹⁴⁾（和歌山県和歌山市）・川間遺跡⁽¹⁵⁾（和歌山県那智勝浦町）でも類例が認められる。川間遺跡では 13 世紀末～14 世紀初頭に位置付けられている。一方、秋月遺跡第 8 次調査 SK-75 出土資料については、共伴遺物から判断して 13 世紀前半に位置付けられるものと考えられる。

以上から、当タイプの椀については、淡路・紀伊にその分布の中心があるものと考えられる。ただし、両地域とも量的にはわずかである。

時期	遺跡	遺構名	瓦器	須恵器
I 期	白生遺跡	SD01		 26
	筒井遺跡	包含層	 28	
	宇和田遺跡	SB01	 2	 1
		P08	 15	 16
		包含層	 33	 34
		包含層	 34	
	大歳遺跡	SB01	 1	 3
		SB02	 6	 9
		P07	 21	 20
		SK01	 26	 23

第163図 中世主要一括資料(1)

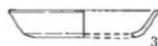
土 師 器



27



24



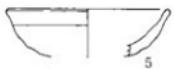
3



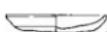
4



2



5



8



24



22

時期	遺跡	遺構名	瓦器	須恵器
I 期	大蔵遺跡	包含層		
		SB02		
	反田遺跡	SD01		
	筒井遺跡	SD07		
		包含層		
II 期	字和田遺跡	SB01		
		SK01		

第164図 中世主要一括資料(2)

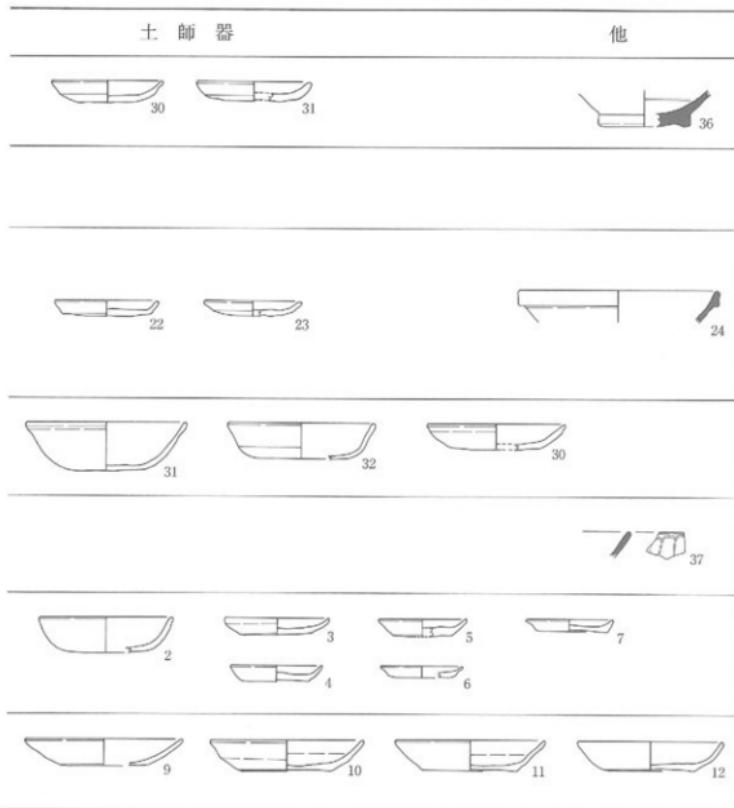
5. 江戸時代

当該期の土器は、筒井遺跡・字和田遺跡で出土している。このなかで、字和田遺跡では遺構に伴い比較的まとまって出土している。

筒井遺跡では、包含層から施釉陶器の鉢（織部焼：43）と碗（45）・染付磁器（44）が出土している。字和田遺跡では、染付磁器・無釉陶器・土師器・青磁・半磁器などが出土している。

6. その他

以上、各時期の土器について概観してきた。土器以外にも、石器・金属製品・土製品が出土している。このなかで、石器とりわけサスカイト製の打製石器が少なからず出土している。当地域の歴史を検討するうえで大きな意味をもつ資料と考えられる。そこで、ここに簡単にまとめておく。



サスカイト製打製石器は、白生遺跡・筒井遺跡・大歳遺跡・狭間遺跡から出土している。

白生遺跡からは、石鎌（S4）・削器（S1）・楔形石器（S2・S3）が出土している。筒井遺跡からは、石匙（S1）と石鎌（S2・S3）が出土している。大歳遺跡からは石鎌（S1）・石鎌（S2・S4）・楔形石器（S3）が出土している。狭間遺跡からは、石鎌（S1）が出土している。

以上のサスカイト製打製石器であるが、いずれも器表面の風化が顕著である点が共通している。各石器の特徴およびこの風化度から判断して、少なくとも縄文時代まで遡るものと考えられる。

〔註〕

- (1)藤田 淳『喜住西遺跡・五反田遺跡－一般県道鳥飼浦洲本線道路改良に伴う発掘調査－』兵庫県教育委員会 2004
- (2)岸本一宏「出土瓦器焼について」『本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』兵庫県教育委員会 1997
岸本一宏『平安時代～鎌倉時代の土器』『鉢田遺跡－淡路縦貫道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』兵庫県教育委員会 1990
- (3)西口圭介『中世の土器』『谷町筋遺跡－淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書V－』兵庫県教育委員会 1990
- (4)吉識雅仁『寺中遺跡－淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－』兵庫県教育委員会 1989 以下、本遺跡に関する記述は、本報告による。
- (5)岸本一宏「第2章 遺跡の調査 第6節 平見遺跡」『本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』兵庫県教育委員会 1997 以下、本遺跡に関する記述は、本報告による。
- (6)全景(3)に同じ
- (7)小森俊寛・上村憲章『京都の都市遺跡から出土する土器の総年研究』『研究紀要』第3号 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1996
- (8)吉識雅仁『鉢田遺跡－淡路縦貫道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』兵庫県教育委員会 1990
- (9)岡田章一『時期設定と土器・陶磁器組成の変遷』『兵庫津遺跡Ⅱ（浜崎・七宮地区の調査）－－般国道2号共同溝整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－』兵庫県教育委員会 2004
- (10)岸本一宏『本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』兵庫県教育委員会 1997
- (11)伊藤宏幸『志筑庵寺発掘調査報告Ⅱ－国庫補助事業 志筑庵寺範囲確認調査報告書－』淡路市教育委員会 2008
- (12)大石雅一『瀧ノ向遺跡Ⅰ・Ⅱ－農地災害関連区画整備事業 口達田地区に伴う埋蔵文化財発掘調査－』淡路市教育委員会 2007
- (13)土井孝之『西田井遺跡発掘調査報告書－一般国道24号（和歌山バイパス）建設に伴う発掘調査－』財団法人 和歌山県文化財センター 1991
- (14)井馬好英『秋月遺跡 第8次発掘調査概報』財団法人 和歌山市文化体育振興事業団 2000
井馬好英『秋月遺跡 第9次発掘調査概報』財団法人 和歌山市文化体育振興事業団 2002
- (15)黒石哲夫『藤倉城跡・川間遺跡－那智勝浦道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』財団法人 和歌山県文化財センター 2004

第2節 遺構

1. はじめに

前節において、山田地区遺跡群出土土器について、その時期を中心に検討してきた。以下、この検討結果をもとに、遺跡ごとに遺構の時期を検討していくことにする。ただし、前節での検討結果から、弥生時代については当該期の遺構は認められないため、奈良時代以降について検討していく。

2. 白生遺跡

本遺跡で時期を特定できる遺構は、鎌倉時代に限られる。SB01・SD01ともに中世Ⅰ期に位置付けられる。P01についても当該期に位置付けられる。

3. 筒井遺跡

本遺跡で時期を特定できる遺構は、鎌倉・室町時代に限られる。ただし、中世Ⅰ期と中世Ⅱ期の2時期の遺構が認められる。まず、中世Ⅰ期の遺構としては、SB01・SB02・SB06・P01・P02・P04～P08・P11・P13・SK02・SD04が挙げられる。他に、SB03・SB04・SB07～SB09・SD01についても当該期に位置付けられる。中世Ⅱ期の遺構としては、SB05・P09・P12・SD07が位置付けられる。

4. 宇和田遺跡

本遺跡で時期を特定できる遺構は、鎌倉・室町時代と江戸時代に限られる。鎌倉・室町時代に関しては、SB01・P01・SK01が挙げられ、いずれも中世Ⅱ期に位置付けられる。江戸時代の遺構としては、SK02～SK09・SD02が挙げられる。

5. 大歳遺跡

時期を特定できる遺構は、中世Ⅰ期に限られる。SB01～SB04・P01～P07・SK01・SK02・SA01が挙げられる。SB05の時期の特定は困難であるが、中世と考えられる。

6. 五反田遺跡

本遺跡で、時期を特定できる遺構は、奈良時代～平安時代前半と鎌倉・室町時代である。前者の遺構としては、SB06・P01・P03～P06・SD03が該当する。いずれも、古代Ⅱ期に位置付けられる。また、これらの遺構との位置関係等から、SB07・SB08・SD05・SA01についても当該期に位置付けられる。

後者の遺構としては、SB02・SB03・P02・SD01が挙げられ、いずれも中世Ⅰ期に位置付けられる。他に、SB01・SB04・SD02・SD04についても当該期に位置付けられる。

7. 七反田遺跡

SD01が弥生時代後期に、P01とP02が中世に位置付けられる。

8. 狹間遺跡

P07・P10・P11・SD01が中世Ⅰ期に位置付けられる。

第3節　総括

1. はじめに

本章第1節・第2節における検討結果をもとに、本節では遺跡ごとにその概要をまとめることにする。この結果をもとに、当地域における遺跡ごとの動向を明らかにし、本報告書のまとめとしたい。

2. 各遺跡の概要

(1) 白生遺跡

時期が特定できた遺構は中世Ⅰ期に限られる。掘立柱建物跡と溝状遺構からなり、当該期の家の一部と考えられる。SB01とSB02は平面的に重複することから、少なくとも1回の建て替えが行われており、一時期の集落ではなかったものと考えられる。ただし、遺物量・建物規模などから判断して、小規模な家であったものと考えられる。また、SD01と建物については、その方向性を異にすることから、同時期に機能していなかったのではないかと考えられる。

なお、遺構には伴わないが、弥生時代後期・奈良時代（古代Ⅰ期）の土器が出土していることから、当該期にも集落が存在した可能性が考えられる。さらには、サヌカイト製打製石器（削器:S1・楔形石器：S2・S3）の出土から、当遺跡の歴史は縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

(2) 筒井遺跡

K地区で検出した遺構は、中世Ⅰ期とⅡ期の2時期に限られる。ただし、中世Ⅱ期の遺構は、SB05・P09・P12・SD07と限られ、大半は中世Ⅰ期に位置付けられるものである。このため、掘立柱建物跡が平面的に集中する南建物群においても、SB05以外は全て中世Ⅰ期に位置付けられる。同所で3回の建て替えが行われていたものと考えられる。

以上から、当遺跡で検出した建物群は、①SB01・SB02、②南建物群、③SB03・SB04の、3つの建物群からなり、それぞれにおいて建て替えが行われていたものと考えられる。さらに、上記3建物群内の1棟ずつからなる、3棟の建物からなる屋敷地であった可能性が考えられる。SD01に関しては、この屋敷地の区画をなしていたものと考えられる。ただし、SD04～SD06・SD09の機能については明確にできない。

この他、A地区で検出されたSB01も中世Ⅰ期に位置付けられるものであるが、特徴的な建物である。K地区とは若干離れた位置関係にあることから、もう一つの屋敷地が考えられる。

中世以外には、縄文時代まで遡りうる石器や、奈良時代（古代Ⅰ期）と江戸時代の土器が出土している。

(3) 宇和田遺跡

検出した遺構の時期は、中世Ⅱ期と江戸時代に限られる。中世Ⅱ期の遺構は、D地区的SB01・SB02・P01・SK01、B地区的SD03が挙げられる。D地区は宇和田遺跡の北西隅にあたることから、筒井遺跡で復元されたような屋敷地を想定することは困難である。SB01・SB02の2棟からなる家と考えられる。また、建て替えが認められないことから、長期的なものではなかったものと考えられる。

ところで、地形環境から、B地区が本遺跡の中心と考えられる。そのB地区で明らかとなつた遺構・遺物は中世Ⅱ期を中心としたものであることから、宇和田遺跡は当該期が中心であったと考えられる。

なお、江戸時代の遺構はD地区に限られる。埋め桶遺構が多く認められたこと、字和田遺跡の南西隅にあたることから、畠作に関係したものと考えられる。

(4) 大歳遺跡

時期を特定できる遺構は、C地区のSB01～SB04・P01～P07・SK01・SK02、A地区のSK03が挙げられ、いずれも中世Ⅰ期に位置付けられる。調査地は、大歳遺跡の北側（C地区）と南側（A地区・B地区・D地区）にあたり、遺跡の中心部は未調査である。ただし、両地区から出土した遺物は中世Ⅰ期に位置付けられるものであることから、当該期が大歳遺跡の中心時期と考えられる。

ところで、C地区で明らかとなった建物跡については、それぞれ棟軸方向を異にしており、建物相互の関係をつかむことは困難である。

なお、A地区においては黒色土器が出土しており、古代Ⅱ期まで遡る可能性が大いに考えられる。これを裏付けるように、本報告の調査が行われた翌年度（平成18年度）に県道建設に伴う調査を、A地区的北東部で行い、古代Ⅱ期に位置付けられる石帯が出土している。これに関連して、本遺跡が中街道沿い（第8図）に位置する点からも注目される。

さらに、縄文時代まで遡る打製石器がA地区とD地区で出土していることから、大歳遺跡の歴史は当該期まで遡るものと考えられる。

(5) 五反田遺跡

面的に調査が行われたのはC地区に限られ、古代Ⅱ期と中世Ⅰ期の遺構・遺物が明らかとなっている。C地区で検出された遺構は、中央部のSD03を境に北西側と南東側に大きく分かれる。SD03を含む南東側の遺構の大半が古代Ⅱ期に、北西側の遺構群が中世Ⅰ期と、時期的にも明確に分けられる。

まず古代Ⅱ期の遺構については、SB05・SB06とSB07・SB08の2群に分けられる。各群1棟ずつがセットとなって建物群を形成していたものと考えられる。建物群の北西から北東側にかけて溝（SD05）と樋（SA01）で区画されており、山田遺跡群のなかでは初期の屋敷地と考えられる。そして、この建物群内では1回の建て替えが行われている。また、当遺跡の南東側に古代まで遡る可能性が考えられた中街道（第8図）が推定されており、当該期の遺構群が中街道側に集中する点も注目される。

次に中世Ⅰ期の遺構については、北西建物群内で2度の建て替えが行われている。SD01がこれらを区画する溝で、この溝の南西側に建物群が形成されていたものと考えられる。ただし、C地区は五反田遺跡の南西端にあたることから、その規模はわずかであったものと考えられる。

この他、縄文時代まで遡る磨製石器が出土している。

(6) 七反田遺跡

当遺跡に関しては面的な調査が行われなかったため、良好な資料は得られていない。この中で、弥生時代後期の溝状遺構と中世の柱穴が検出されている。中世については、時期の特定は困難である。

(7) 狹間遺跡

当遺跡の調査も面的ではなかったが、中世Ⅰ期の遺構が明らかとなっている。その遺構は、P7・P10・P11・SD01に限られ、当該期の遺跡の性格を論じることは困難である。

3. 山田地区遺跡の動向

(1) はじめに

今回報告する山田地区遺跡においては、縄文時代・弥生時代後期・奈良時代～平安時代前期（古代Ⅰ期・古代Ⅱ期）・平安時代後期～鎌倉時代前半（中世Ⅰ期）・鎌倉時代後期～室町時代（中世Ⅱ期）・江戸時代の遺構・遺物が明らかとなった。そこで、本報告の最後として、時期ごとに当遺跡群の動向を明らかにし、まとめとしたい（第165図）。

(2) 時期ごとの動向

縄文時代　白生遺跡・筒井遺跡・大歳遺跡・五反田遺跡で、当該期まで遡ると考えられる石器が出土している。ただし、いずれの遺跡においても土器および遺構は確認されていない。また、具体的な時期についても明らかにすることは困難である。

弥生時代後期　白生遺跡と字和田遺跡で土器が出土し、七反田遺跡で溝状の遺構が検出されている。

奈良時代（古代Ⅰ期）　白生遺跡と筒井遺跡で土器が出土しているのみで、遺構は検出されていない。

平安時代前期（古代Ⅱ期）　五反田遺跡で建物群が形成され、字和田遺跡と大歳遺跡で土器が出土している。

平安時代後期～鎌倉時代前半（中世Ⅰ期）　白生遺跡・筒井遺跡・大歳遺跡・五反田遺跡・狹間遺跡で遺構が検出されている。また、良好な資料は得られなかったが、七反田遺跡も当該期に位置付けられるものと考えられる。

鎌倉時代後期～室町時代（中世Ⅱ期）　筒井遺跡・字和田遺跡で遺構が検出されている。前期同様、七反田遺跡の一部も当該期に位置付けられるものと考えられる。

江戸時代　字和田遺跡で遺構が検出され、筒井遺跡で土器が出土している。

(3) 小結

以上のように、山田地区遺跡内の7遺跡であるが、遺跡ごとにその存続時期が異なる。白生遺跡は弥生時代後期から中世Ⅰ期にかけて、筒井遺跡は中世Ⅰ期と中世Ⅱ期にかけて、字和田遺跡は中世Ⅱ期から江戸時代にかけて、大歳遺跡は古代Ⅱ期から中世Ⅰ期にかけて、五反田遺跡は古代Ⅱ期から中世Ⅰ期にかけて、それぞれ存続したものと考えられる。また、七反田遺跡は中世、狹間遺跡は中世Ⅰ期の遺跡と考えられる。以上をまとめたのが第165図である。

なお、調査は、各遺跡内の限られた範囲を対象としたものである。このため、各遺跡において、上記以外の遺構・遺物が将来明らかになる可能性が十分考えられることを断っておく。

全体的にみて、中世Ⅰ期・中世Ⅱ期が中心であったと考えられ、山田地区遺跡内のいずれの遺跡においても当該期の遺構あるいは遺物が明らかとなっている。鎌倉・室町時代以降の遺構・遺物については、字和田遺跡と筒井遺跡に限られるが、おそらく各遺跡で存続していたものと考えられる。一方、鎌倉・室町時代における山田地区遺跡を構成する各遺跡は、必ず現在の集落の一部を含んでいる。

以上から、現在山田地区にみられる集落景観は、少なくとも鎌倉・室町時代には形成されていたものと考えられる。